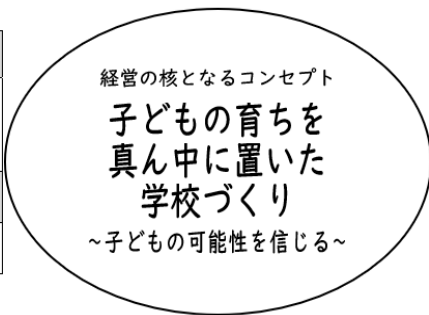


<様式>

学校名	山形市立第一小学校 山形市本町一丁目5番24号 TEL622-0651 FAX633-9301	校長	石澤 友章					
		研究主任	井上 桂子					
研究主題	深い学びの実現に向けた「きく」姿の共有と、 学びを繋ぐ授業デザイン（1年次）							
研究主題設定の理由	教育目標 体・徳・共・知・美の調和のとれた人間性と確かな学力を身につけた児童の育成							
	<table border="1"><tr><td>めざす学校の姿</td></tr><tr><td>違いを認め合いながら、 誰もが安心して学べる学校</td></tr><tr><td>めざす子どもの姿</td></tr><tr><td>くらしと学びをつくる子ども</td></tr></table>  <table border="1"><tr><td>キーワード</td></tr><tr><td>○自分事（主体性）</td></tr><tr><td>○仲間と共に（協働性）</td></tr><tr><td>○一歩ふみ出す（創造性・挑戦）</td></tr></table> <p>これまで「くらし」まで含めて広く扱ってきた研究領域を、今年度からは「学び」そのものへと焦点化する。児童が安心して学習に臨むことができるように、教師も児童もめざす「きく」姿についてイメージを共有し、学習基盤を整える。そして、教材への丁寧な理解に基づいた授業デザインにより、児童の深い学びを実現するための授業改善の視点から主題を設定した。</p>	めざす学校の姿	違いを認め合いながら、 誰もが安心して学べる学校	めざす子どもの姿	くらしと学びをつくる子ども	キーワード	○自分事（主体性）	○仲間と共に（協働性）
めざす学校の姿								
違いを認め合いながら、 誰もが安心して学べる学校								
めざす子どもの姿								
くらしと学びをつくる子ども								
キーワード								
○自分事（主体性）								
○仲間と共に（協働性）								
○一歩ふみ出す（創造性・挑戦）								
研究の重点	重点① 学習の基盤となる 人とつながる「きく力」の育成 児童が互いの考えを受け止め、理解しようとする姿勢と技能を育てることで、安心して発言できる環境を整え、他者の考えを尊重しながら学びをつくる学習集団の形成を図る。							
	重点② 教科の本質に迫る授業デザイン 身につけるべき資質・能力と目指す児童の姿のイメージを明確にイメージする。生活経験・既習事項・次の学習や生活、将来の生き方・考え方など、学びの前後にあるものも関連づけた教材研究に基づき、単元全体を見通した授業づくりをする。							
	重点③ 学びの自覚を促すふり返りの充実 児童がふり返りを通して学びを言語化することで、概念を再構築し、学んだことがいつでも使えるものとして定着することを目指す。概念形成の到達度を把握し、授業改善につなげる。							

研究の内容・方法

- 令和8年度 山形県教育センター「継続サポート」を活用し、全ての研究授業について、事前研究～事後研究まで指導主事による伴走型支援を取り入れる。
- 日本教育公務員弘済会事業 学校研究助成金申請中（6～10万円程度）

		授業	事前研	参観	事後研運営
大研	県センター伴走型	一斉 もしくは 単元内 自由進度 学習	上/下 学年部	全員 ※中学校区に案内	推進部
小研			低/中/高 学年部	低/中/高 学年部 推進部+任意	学年部
特支 ことば		記録 動画	特支 ことば	交流+推進部 全員	特支 ことば

研究の計画

日時	内容	備考	
4月9日(木)	推進委員会①		
4月20日(月)	研究全体会①		
6月22日(月)	授業研 5年	提案授業	
7月15日(水)	大妻女子大学 澤井陽介教授による講義・演習		
7月27日(月)	言語通級		
9月7日(月)	授業研 3年		
10月20日(火)	授業研 6年	※後期に 特別支援の 授業研究を行う	
11月12日(木)	授業研 4年		大研
11月19日(木)	授業研 1年		
12月7日(月)	授業研 2年		大研
12月15日(火)	推進委員会②		
12月23日(水)	大妻女子大学 澤井陽介教授による講義・演習		
1月7日(木)	研究全体会② まとめ 来年度の方針		
1月末	研究集録 UP		

※事後研のまとめは該当単元終了後、授業者が1ヶ月以内に発行・配付する
 ※R7 から集録の製本なし。スターオフィスのキャビネットへアップする。
 県教育センター分のみ印刷

<様式>

学 校 名	山形市立第二小学校 山形市香澄町三丁目 9 番 38 号 TEL 023-622-0652 FAX 023-633-9310	校 長	高橋 浩
		研究主任	林 和沙
研 究 主 題	生き生きと表現し合い、くらしを豊かにする子どもの育成(4年次) ～ 4つの資質・能力を育成する授業の追究 ～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>本校では、学校教育目標を「輝く未来の星 ふじかげの子どもを育成する」、重点目標を「生き生きと表現し合い、くらしを豊かにする子どもの育成」と掲げている。「生き生きと表現し合う」とは、自分の思いや考えをもち、相手や状況に応じて表現したり、友達の多様な考えに触れたりして学び合うことであり、主体的な学びを通して「社会や生活の様々な変化を前向きに受け止め、自他ともに価値ある存在として尊重し、協働しながら様々な課題を乗り越え、豊かな生活を主体的に創り出す子ども」の育成を目指している。こうした力はこれからの時代を生きていく子どもたちにとって必要な力であり、日々の授業の中で、育てていくことが大切な力である。</p> <p>昨年度、研究主題に迫るために、めざす子どもの具体的な姿「4つの資質能力」を視点として、「心が動く課題の設定と学びをつなげる振り返りの充実」と「表現し合う楽しさを感じられる学び合いや場の設定の工夫」の2つの手立てを通して取り組んできた。グループでの学び合いの学習を取り入れることで、考えを伝え合ったりわからないことを教え合ったりする力が高まり、友だちの考えに「なるほど」と納得する姿が多く見られ、お互いに考えを共有して深めるよさを味わう機会が増えた。</p> <p>一方、スピーチに関しては、時間的な余裕がないことや学年担任制になったことでの取り組みに難しさがあり、なかなか取り組めなかったという反省があがった。そのため、子どもたちでよりよいくらしを創り上げるための時間として、学年集会に力を入れることにした。学年のために何ができるか自分の意見を持ち、自分たちで計画実施する経験を通して、くらしの中で気になることや改善した方がいいことなどに気付き、みんなで解決しようという気持ちが育ってきた。</p> <p>振り返りについては、まだ不十分であるという反省も出ている。教師側の必要感も含め、改めて振り返りの意義について考え深めていく必要がある。</p> <p>そこで今年度も研究テーマを引き続き「生き生きと表現し合い、くらしを豊かにする子どもの育成(3年次)」とし、さらに追及していくことで子どもたちの力を伸ばし、教師の授業力を高めていく。昨年度同様、めざす子どもの具体的な姿「4つの資質能力」を視点として、2つの手立てを通して迫っていく。</p> <p>授業の中で有効な手立てを検証していき、教育活動全体で子ども主体の学びを通して、4つの資質・能力を付けることで、生き生きと表現し合い、くらしを豊かにする子どもを育てていく。</p>		
目 的	<p>(1) 目指す資質・能力を明らかにして、研究の視点を基に授業を構想し、子ども主体の学びが促される授業実践を積み重ねて、資質・能力を育成するために有効な手立てや適切な支援の在り方を追究する。</p> <p>(2) 授業実践を通して、学習活動における関わり方や教師の出を吟味し、授業力を高める。</p>		

「生き生きと表現し合い、くらしを豊かにする子どもの育成」のために、以下の視点・手立てを通して、子ども主体の授業づくり・授業改善を行っていく。

(1)視点「4つの資質能力」

- 「思いやりの心」：違いを認め合い、自他ともに尊重しながら寛容な心で接する力
- 「自己指導力」：よりよい生き方を目指して、正しいと思う行為を自分で判断して実行する力
- 「創造力」：考えを伝え合い話し合いながら、よりよい方法を生み出していく力
- 「挑戦力」：高みを目指して果敢に挑戦し、試行錯誤を繰り返しながら、粘り強くやり遂げる力

授業研究では、この4つの資質能力が身に付いたか・具体的にどのような子どもの姿が見られたのか・なぜそのような姿が見られたのか、記録写真を通して話し合うことで、主題に迫っていきたい。

(2)2つの手立て

手立て1 心が動く課題の設定と学びをつなげる振り返りの充実

生き生きと表現するためには、子ども自身の心が動き、主体的に学ぶことができる課題を設定することが大切である。これまでの研究において明らかになった課題設定の手立ては以下の通りである。

- ・子どもの疑問をもとにした課題の設定（前時との違いやつながり、子どもの困り感）
- ・子どもの興味関心をひく課題の設定（教材の提示の仕方、本物にふれる、体験を通して学ぶ）
- ・子ども自身で課題を作る・自己選択のできる課題の設定
- ・単元の見通しをもたせる。

今年度も上記のような課題設定の手立てを行い、子どもたちの学習内容への興味関心を喚起したり、自分なりの考えや予想をもちやすくしたりする。

また、課題や見通しをもとにした振り返りを行い、振り返りで出た疑問や課題を次の学習や自分のくらしにつなげていくために、教師が意図的に振り返りの場を設定する。教師も子どもも、学びのつながりを意識しながら「課題を設定」し、「解決の見通し」をもち「充実した振り返り」になるよう取り組む。

手立て2 表現し合う楽しさを感じられる学び合いや場の設定の工夫

① 支持的風土づくり

表現し合う楽しさを感じられる学び合いの場のためには、基盤として学級の支持的風土の醸成が大切である。授業だけで培っていくのではなく、給食や掃除、休み時間などさまざまな場面で1年を通して作っていく。

② 学び合いの手立て

支持的風土を基盤として、教師がどのような手立てをとると子どもたちは主体的に学び、学び合いの場が成立するのか検証していく。

（考えられる教師の手立て）

*参考：令和8年度山形市教育委員会「指導の指針」

- ①学び合う必要感をもたせる。
- ②交流を組織する。（ペア・グループ・フリーなど）
 - ・捉え方や根拠の違いをもとにした交流。
 - ・根拠をもち、気付きや自分の考えを適切な言葉で表現し、相手意識をもって伝えられるようにする。

- ・学びの広がりや高まりが生まれるようにコーディネートする。
- ③教師の出番を的確に判断し、授業を活性化させる。
 - ・指示の工夫・・・考える視点や発表時の吟味する観点など。
 - ・発問の工夫・・・考えを引き出す。考えを深める発問など。
 - ・個に応じた適切な支援の工夫・・・多様な学習方法や学習形態など。
- ④子どもの思考や問題解決の過程が見えるように板書の構造化を図る。
- ⑤ICTなどの活用。

③ 学年集会の取り組み

子どもたちでよりよい暮らしを創り上げるための時間として、週に1回学年集会を行う。学年のために何ができるか自分の意見を持ち、自分たちで計画実施する経験を通して、くらしの中で気になることや改善した方がいいことなどに気づき、みんなで解決しようという気持ちを育てながら、子どもたちの資質能力を高めていきたい。

<めざす子どもの姿>

- ・自分たちで、自分たちの生活に気付く姿（自己指導力）
- ・自分たちで、よりよい生活にするための手立てを考え、実践する力（創造力・挑戦力）

研究の進め方

大研	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年部で1つ（低学年部1、中学年部1、高学年部1、合計3＋提案授業1） ・学年部で授業の事前研究会と事後研究会を行う。 ・授業研には、外部講師を招聘する。 ・指導案はフルサイズ指導案。授業1週間前まで完成させる。 ・指導案は全員に配付し、参観、事後研究会に参加する。 ・教科は原則単元構成を含めて考えられるもの。
中研	<ul style="list-style-type: none"> ・大研をしない学年で行う。 ・学年で授業の事前研究会を行う。事後研究会を学年部と自主参加者で行う。 ・授業研には、外部講師を招聘する。 ・指導案は、フルサイズ指導案。授業1週間前まで完成させる。 ・指導案は全員に配付し、学年部で参観。その他は可能な限り参観する。 ・参観し、事後研に出ない場合は、用紙に感想を書いて授業者に渡す。
小研	<ul style="list-style-type: none"> ・大研中研の授業者以外は、授業公開のみ。指導案は本時のみ。 ・事前研や事後研は任意。 ・参観し事後研に出ない場合は、用紙に感想を書いて授業者に渡す。

研究の計画

4月	3日	研究推進委員会①	概要、方法の検討
4月	15日	研究全体会①	研究の概要、目指す子どもの明確化、方法の共有、質疑応答 「見通しをもたせる」ことについて共通理解 ・見通しをもっている子どもの姿とは ・見通しをもてる子どもにするためには
7月 ～12月		校内授業研究会	1学期に大研1つ、2学期に2つ 各学年部1つは1学期に行う。 <提案授業> 6月17日(水)…2学年(算数) <大研> 7月1日(水)…4学年 9月7日(月)…5学年 11月12日(木)…1学年
7月		校内研修会①	社会科について研修会
1月	26日	研究推進委員会②	研究全体会②について、実践記録のまとめについて
2月	15日	研究全体会②	今年度の振り返り・来年度に向けて
2月	26日	研究推進委員会③	来年度に向けて

<様式>

学校名	山形市立第三小学校 山形市宮町五丁目7番58号 TEL 023-622-0653 FAX 023-633-9320	校長	高橋 和久
		研究主任	萩原 溪太
研究主題	子どもの粘り強さと自己調整力を育む(5年次) ～ 見方・考え方を軸にした授業づくりを通して ～		
研究主題設定の理由	<p>これからの時代は、一人一人の多様性を原動力とし、新たな価値を見出していくことが必要となってくる。子どもたちには、こうした変化を乗り越え、高い志や意欲をもつ自立した人間として、他者とともに、価値の創造に挑み、粘り強く未来を切り拓いていく力を身に付けることが求められる。そのためには、子どもたちが、「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」という、学び方を習得・選択し、自己調整を図りながら学習を進めていくことが必要である。また、教師は、子供たちが課題解決に向けて、主体的・協働的に学ぶための指導方法を充実させていく必要がある。</p> <p>そのような社会的背景から、子どもたちの「粘り強さ」と「自己調整力」を育むことが必要不可欠だと考え、本校では、令和4年度から、「子どもの粘り強さと自己調整力を育む～見方・考え方を軸にした授業づくりを通して～」を研究主題として、学校研究に取り組んできた。教科の見方・考え方を働かせながら、「粘り強さ」と「自己調整力」を高めるための手立てを明確にし、授業研究会を行い、事後研究会等においては、子どもの具体的な姿をもとに話し合い、実践を重ねてきた。そして、「粘り強さ」「自己調整力」について、令和7年度の成果と課題を明らかにした。以下は、研究の重点について、令和7年度の成果と課題である。</p> <p>研究から見えた成果と課題【○=成果 ▲=課題】</p> <ul style="list-style-type: none">○自分事として問題や課題を捉える工夫、教科の見方・考え方及び既習事項を使うことができる問題提示や課題設定など、導入の工夫によって、子ども自らが問題解決に向かう姿や学習有用感を得られるような学びにつながってきている。○教師と子どもが教科の見方・考え方を共有する、教師と子どもが単元計画を共有し掲示及びICTの活用による視覚的支援によって見通しをもったり、自分に合った学び方や解決方法の選択を自分で判断したりしながら学ぶ姿が見られるようになってきている。▲多様な学び方や解決方法、子どもたちの困り感、子どもたちの思考の広がりや深まりなどを教師がコーディネート(調整)してだけでなく、ファシリテート(促進)していく必要がある。教師主導型の授業から、子ども一人一人がどのように学ぶかを大切に、教科の本質も大切にしながらより子ども主体(粘り強さ・自己調整力を育成し機能させる)となる授業づくりへと転換していく。そのためには、学び方や学習過程の工夫、自分で解決方法や学び方を選択できる要素(個性化・個別化)も必要である。▲最終的に自分に還る学びの過程の工夫(個別最適な学びの視点)を行い、自己調整しながら粘り強く問題解決する自立した学習者へと育てていく。さらに、算数の世界から実生活に結び付けて考えることができたり、実生活で活用したりできるようにしていく必要もある。 <p>成果と課題を受け、教師が子どもの学びをコーディネート・ファシリテートしながら、個別最適な学びの視点で、「粘り強さ」と「自己調整力」を育む必要があることが分かった。今年度も、この2つの資質・能力を子どもが働かせながら学びを深め、これからの時代を生きる子どもの育成を目指していきたい。</p>		

研究の目標

学校全体として、以下の4つを「子どもを育てる4つの柱」にし、校内研究を中核としてカリキュラム全体で育む。

- 【協働性】 多様性を受け入れ、共感的な関係を築き、協働して課題に立ち向かう子ども
 - 思いやりのある聴力の育成 ○伝えたいという願いのある発信力の育成
 - 多様な人との出会いから学ぼうとする力の育成
 - 【主体性】 課題を自分のこととしてとらえ、願いをもって自力解決に向かう子ども
 - 学びの手応えや楽しさを味わい、次の学びを求め続ける力の育成
 - 課題の解決に、自分なりの見通しをもって取り組む力の育成
 - 情報を効果的に活用し、筋道を立てて考える力の育成
 - 【創造性】 夢や願いをもち、学びや経験をくらしに生かそうとする子ども
 - 気づき・考え・行動する実践力の育成 ○自己肯定感・自己有用感の高いチャレンジ力の育成
 - 失敗体験や振り返り、他者評価を次の学びにつなぐ力の育成
 - 【持続性】 日々の学びを通して自信をもち、社会のニーズに合った活動に挑む子ども
 - 自分たちの良さを再発見し自信をもって表現することを通して、新たな目標をもったり、メタ認知を深めたりできるようにする。
 - 地域の出来事、時事的な問題、社会的なニュースなどに関心を向け、よりよくするために自ら関わりたいという願いがもてるようにする。
 - 自分の生きたい社会について話し合ったり、イメージしたりして、未来を切り拓こうとする姿勢を創る。
- Keyword:「チャレンジ」
- 向上をイメージし、今よりも前へという意識をもった学校生活にする。
 - 共通の願いや目標に向かい、協力して取り組む必要感を感じられるようにする。
 - 結果や成果を適正に評価し、次へつながる連続的な取り組みにしてい

研究の内容および重点

三小の子どもたちに育成したい「粘り強さ」「自己調整力」(具体的な目指す子どもの姿)について私たちが共通理解を図った具体的な目指す子どもの姿は以下の通りである(R7まで)。

粘り強さ	自己調整力
<input type="checkbox"/> もっている知識や技能を用いて、何とかして解決しようとする、あきらめなくて最後まで取り組む。 <input type="checkbox"/> 課題からはなれず、のめりこむ。 <input type="checkbox"/> 課題を自分事として捉え、挑戦してみようとする。	<input type="checkbox"/> 自分の変容を理解する。(できるようになった→その原因は何か) <input type="checkbox"/> 他者の考えを受け入れたり、よさを認めたりして、自分に取り入れる。 <input type="checkbox"/> 解決するための手段を選択する。

「粘り強さ」と「自己調整力」はそれぞれが独立して伸びたり、一方が身に付いてもう一方が身に付いたりするものではなく、相乗効果で育てていくものだと考える。これらの姿を目指し、具体的な研究の重点は下記の通りである。日々の授業から「重点の選択」によって、研究の日常化やカリキュラム・デザインで重点化して授業づくりを行っていることが見えるように取り組んでいく。

「粘り強さ」を育むために働かせる・機能させる子どもへ	「自己調整力」を育むために働かせる・機能させる子どもへ
◆子どもが課題解決の見通しをもてる学習計画の工夫。 <input type="checkbox"/> 掲示や ICT 活用。 <input type="checkbox"/> 見方・考え方の共有。 <input type="checkbox"/> 子ども一人一人の目標設定・学習計画。 <input type="checkbox"/> 学習のゴールを教師が子どもと共有。 ◆子どもが学びに向かうための導入や課題設定の工夫。 <input type="checkbox"/> 既習事項や教科の見方・考え方を足場。 <input type="checkbox"/> 子どもたちの興味・関心や実態、困り感を捉え、子どもたちが「解決したい」と思える導入及び課題設定。 <input type="checkbox"/> 個性化・個別化を視野に入れた問題提示 <input type="checkbox"/> 実生活と結び付ける・学習したことを生活に生かす学習場面や学習課題の設定。	◆適切な自己評価と自覚化につながる工夫。 <input type="checkbox"/> 具体的な変容を促すためのふり返りの視点を明示。 <input type="checkbox"/> ふり返りを言語化したり交流したりして共有。 <input type="checkbox"/> 適応問題の活用やつまずきの可視化。 ◆解決方法を選択・決定できる学習過程の工夫。 <input type="checkbox"/> 個別最適な学びや協働的な学びの視点を取り入れた学習過程や学習活動。 <input type="checkbox"/> 解決方法を子どもたちが選択・決定・説明できる学習過程や学習活動。

「粘り強さ」「自己調整力」を育む・働かせる・機能させるための土台

- ◇子どもの実態に合わせた単元の計画, 修正
- ◇カリキュラム・デザインを基盤にした学級経営と研究の日常化
(主体性の醸成過程 教師・子どもの授業像 研究の日常化との関連)
- ◇子どもたちが学びの主体となるための教師のファシリテート(日々の授業づくり)

研究の方法

- ◇ねらいを明確にした学年協働研究
(同じ単元で授業づくり・授業実践 単元についての理解を深める)
- ◇算数科を窓口にした授業研究の継続
(指導案形式継続・算数だからこそその系統性・教科限定のメリット)
- ◇領域や系統性のつながりを大切にした研究
- ◇担任全員授業、小研の事前研・事後研等の時間の確保と日程調整
- ◇子どもの具体的な学びから検証(授業での見取り・事後研にも関わる)

(1) 研究の窓口:算数 (こまくさ学級は子どもの実態等に応じ,算数に限定しない)

(2) 研究方法

指導案作成-事前研-本時の参観-事後研のプロセスを通して,子どもの「粘り強さ」と「自己調整力」が高まったかどうか,子どもたちが「粘り強さ」「自己調整力」を働かせたり,機能させたりできていたかをふり返る。できる限り「固有名詞を大切に」「子どもの学びの姿を具体的に捉えた」事後研究会にしていく。また,昨年度のふり返りで,「系統性を見ていく」という意見があったが,全学年で「領域をそろえ」「系統性を見る」のは難しいため,今年度も学年で選択制による研究を行う。領域をそろえるのは,学年までとしていく。

- A: 学年で領域をそろえず,個人が領域や単元を決定する。
- B: 学年内で領域をそろえ,個人で単元を決定する。
- C: 学年で領域と単元を決め,1つの単元を学年協働研究で行う。

(3) 全校研

年間3回の授業研究会(全校研及び自主研究協議会)を計画する。今年度は3回の全校研で3つの授業(低学年部1・中学年部1・高学年部1)を計画する(こまくさ学級は含めない)。自主研究協議会は,授業研究の日程を山形市内の小校等に周知し,参加者を募る。

(4) 学年部研

学年部を基盤にして,研究主題や研究の重点に迫るために,すべての学級担任が授業実践を行う。

(5) 研究のまとめ(授業実践のふり返り)

事後研から研究の重点について,成果と課題を明らかにした振り返りを行い,一人一人が研究のまとめを作成する

研究の計画

研究全体会・研究推進委員会・全校研を教育課程に位置付けて計画。また、学年部研も計画する。

日程		内容	備考
4月3日	金	研究推進委員会① 今年度の研究の 方向性	推進委員決定 研究の概要・重点・研究年間計画 全体研・授業研の日程について 指導案・事前研・事後研・実践記録について確認
4月13日	月	研究推進委員会② 研究全体会①に 向けて	研究の概要・重点・研究年間計画 全体研・授業研の日程について(授業者の検討) 指導案・事前研・事後研・実践記録について確認
4月28日	火	研究全体会①	研究の概要(案)提案・目指す子どもの姿検討 全体研・授業研の日程について(授業者の検討・決定) 指導案・事前研・事後研・実践記録について確認
5月中 カリキュラム・デザイン表作成 学級経営の土台づくり			
6月4日	木	研究推進委員会③ 全校研①に向けて 事前研	全校研①に向けて(役割分担及び事前研)
6月17日	水	全校研①	全校研①(高学年)部 研究推進委員から授業者(芳賀 梢 先生) ★指導主事の先生 ご来校・ご指導
7月2日	木	研究推進委員会④	全校研①を終えて(改善点・変更点) 全校研②に向けて(事前研)
7月14日	火	全校研②	全校研②(低学年)部 授業者(漆山 和歌子 先生) ★齊藤一弥先生 ご来校・ご指導
8月27日	木	研究推進委員会⑤	全校研②を終えて(改善点・変更点) 全校研③(自主公開研)に向けて 単元の検討 事前研(日程調整など)について 齋藤一弥先生授業の参観について 今後の研究の方向性の確認
10月8日	木	研究推進委員会⑥	全校研③(自主公開研)に向けた準備確認
10月22日	木	研究推進委員会⑦	全校研③(自主公開研)事前研
11月6日	金	全校研③ (自主公開研)	全校研③(自主公開研 I 授業) 授業I(中学年)部 授業者(佐々木 健斗 先生) ★齊藤一弥先生 ご来校・ご指導 ★山形市全体に案内を出します。
12月9日	水	研究推進委員会⑧	R8校内研究のふり返り(成果と課題) 研究全体会②に向けて役割分担の確認 来年度の研究について
12月21日	月	研究全体会②	R8校内研究のふり返り(成果と課題)
1月14日	木	研究推進委員会⑨	今年度の成果と課題 来年度の研究について
2月5日	月	研究推進委員会⑩	来年度に向けて研究推進委員会原案作成
2月17日	水	研究全体会③	今年度の成果と課題 来年度に向けて(方向性検討)

学校名	山形市立第四小学校 〒990-0055 山形市相生町4番37号 TEL 623-6019 FAX 633-9321	校長	横山尚久
		研究主任	逸見裕輔
研究主題	<p style="text-align: center;">研究主題 つながりの中で学ぶ、しなやかな子ども —深い子ども理解を土台にした「教師の待ちと出」を探る—（6年次）</p>		
研究主題について	<p>学校研究は、学校教育目標「よりよい社会や人生をともに切り拓いていく子どもを育てる」を具現化するための方策である。本研究主題は、学校教育目標と子どもの実際の姿と期待する姿を照らして設定した。また、それに迫るための教師のあり方を副題に据え、研究の柱とした。多様性を尊重し、他者と協働的に学びながら、それぞれの強みや個性を發揮できる子どもを育てていきたい。</p>		
研究の重点	<p>「はじめに子どもありき」を出発点にして</p> <p>1 深い子ども理解</p> <p>(1) 深い子ども理解の土台＝愛情と信頼に基づく関係</p> <p>深い子ども理解とは、子どもの育ちの可能性を探ることである。深い子ども理解は、愛情と信頼に基づく関係の上に成り立つものである。</p> <p>子どもたちは、一人一人違っている。そして、本来力を持ち、自ら進んでいこうとする力をもっている。どの子もその子らしく学び、その子らしく育ってほしい。そのために、教師は子どものありのままを受け入れ、心に寄り添い、一人一人を大切にする。子どもの願いや思いに耳を傾け、一人一人が何を求めているのかをとらえるために、子どもをよく見なければならぬ。また、子どもの行動そのものだけでなく、行動の奥にあるもの・意味するものまで見とれる教師でありたい。そうして、一人一人がよりよく育つことができる学校をつくっていききたい。</p> <p>(2) カリキュラム・マネジメント</p> <p>カリキュラム・マネジメントは、目の前の子どもを丁寧に見つめ、育ちやつまずきを授業や学級経営に反映していくことである。そして、学校全体で育てたい子ども像を共有し、計画を立て、「子どもがどう育ったか。」という視点でふり返り、目の前にいる子どもの指導にいかしていくことを続けていく。子どもが身に付けた資質・能力は意図的にフィードバックして、子どもが自身の成長を実感し学び続けることができるようにしたい。そのために、昨年度の学級カリキュラムを生かしながら、子どもの実態に即しながら、目指す子どもの姿に迫るために特色が見える学級カリキュラムを構築していく。その際、生活科・総合的な学習の時間を要に、他教科や領域、行事等と関連付けながら学級で目指す子どもの姿に迫るようにする。また、今年度は、幼保小のつながりを一層充実させ、緩やかなつながりの中で1年生の育ちを支えるために、スタートカリキュラムを構築する。幼保小を見通した9年間の育ち、そしてよりよい社会や人生をともに切り拓いていく大人を見越したつながりのある学びを大切にしていきたい。また、作成した単元配列表に、単元を入れ替えたり他教科と関連付けたりした足跡を残し、次年度に引継いでいく。内容の重点化、焦点化を図り、学びの充実や軽重のつけた実践につなげていきたい。</p>		

2 教師の「待ちと出」

(1) 教師の「待ち」

子どもが強い思いをもち、主体的に活動に向かったとしても、必ずしもことが順調に進むわけではない。見通しの甘さから、やり直しを余儀なくされることもある。そんなとき、どんな思いでそれらを乗り越えようとしているのか、実際にどのようにして乗り越えているのか、そしてそれを支える思いは何かを捉えながら、子どもを信じて見守っていく。

ただし、子どもたちがやりたいことをただ手放しで見ているわけではない。子ども主体ということは、「子どもたちの自主性に任せる」のではない。子どもが行動を起こす元になる心を支援し、「子どもの自主性を育てる」ことである。子どもが、知識や技や見通しがないうまに、ひたすらに迷い、悩んでいることはないか。教師は策もないまま子どもを傍観していることはないか。子どもの育ちにつながる「待つこと」になっているか。そもそも子どもを信じて「待つこと」ができているか。教師は常に自分をふり返りながら、教師の待ちと出を検討していく。

(2) 教師の「出」

「待つこと」だけでは子どもの育ちは成立しない。学び方が分からないときに必要なことを教えないと、子どもの学びは広がらない。子どもたちの力が最大限に引き出され新しい自分に出会うためには、「教師の出」つまり、より広い視野と深い思索に根差した適切な教師の支援が大事になる。そのために、わたしたちは物事の本質を捉え、子ども理解を土台にした教材研究、内容研究を大切していく。

「教師の出」は、子どもが活動をうまくできるようにするためだけのものではない。子どもの追究を強くするために行うものである。子どもたちが身の回りの人・もの・ことに問題意識をもち、解決していくことができるようにするために、どんな場合に待ち、どこでどれぐらいどのように出るかを吟味していく。

(1) 「小さな学習会」

毎週金曜日の放課後に「小さな学習会」を位置づけて研修の時間とする。教材研究や情報交換、行事の詳細の打ち合わせ・検討、地域施設の見学などを行う。紙上での研修や共通の課題に取り組むなど、様々な方法を用いて日常的に研修を積み、実践にいかすことができるようにする。

(2) 校内授業研究会

校内授業研究会を通して、教師の授業力を高め、日常の授業の充実、改善を図り、目の前の子どもを育てていく。

各教科の授業づくりにおいては、教科内容そのものを研究し、教科を通した目で目の前の子どもの育ちを考えることが必要である。子どもたちは、どんな見方・考え方を働かせるのか、身に付けるべき資質・能力は何か、どのような問題解決が成し遂げられるかを吟味していく。そして、子ども自身が自分の力を自覚し、新たな課題に挑む強さと自信を身に付けることができるようにしたい。

そのために、事前・事後研究会は全員参加とし、互いの子どもの見方を聞き合うことでより子どもを多面的にとらえ、子どもの育ちを考えていくことができるようにする

(3) 研究を発信する場を意図的・計画的に運営する

わたしたちの取り組みを多くの方々に見ていただいたり協議したりできる場を年2回設定する。私たちが大切にしてきたことを発信することで、手ごたえや新たな視点に出会うことができると考える。そのために、年2回予定されている研究会の場を意図的・計画的に運営し、子どもの育ちはもちろん、わたしたち教職員がさらにレベルアップできる場にしていく。また、学校外の方々を招き、教材研究や単元づくり、事後研において、様々な視点からの意見をいただくことで、本校での取り組みを広い視野でふり返る機会とする。(予定：①7月13日 第一回山形市委嘱研究会 ②12月3日 自主公開研究会 兼 第二回山形市委嘱研究会)

(4) 研究のまとめ

1年間の実践をふり返るとともに子どもの育ちをまとめ、研究の足跡を残す。(『銀杏の実』第72号)

(1) 夢中になって学びに向かう、自立した学習者を育てる教師の待ちと出

目の前の子どもたちは一人一人違う。だからこそ、一人一人の育ちを適切に捉え、目指す子どもの姿を設定する必要がある。そのため、自立した学習者を育てるためには、深い子ども理解に根差した個に応じた教師の待ちと出が求められる。「こんな場をつくったらあの子は輝きそうだな。」「これがあればあの子も一人で学べそうだ。」「ここでつまずいた場合は、〇〇の視点から助言してみよう。」と思いを巡らせるなど、個の求めに合った働きかけを吟味するなど、個の学びを大切に。一人一人が築いた学びを集団の中で紡ぐことで、個の学びがさらに磨かれ、学ぶよさを実感できるようにしていく。そうすることで、「もっと～してみたい。」という思いを膨らませ、夢中になって学びに向かい続けると考える。

一方、子どもの追究意欲は、常に高まった状態にあるわけではない。活動の空気が停滞し、這いまわることもしばしばある。そのようなとき、わたしたちは本物の事象(人・もの・こと)といつ・どのように出会わせるか、吟味することが求められる。日頃から視野を広げ、子どもの学びを広げたり深めたりできる事象がないか検討するなど、教材研究に努めていく。

(2) わくわく・ドキドキする楽しい授業

学校生活の大半を過ごすのは授業の時間である。子どもたちが「授業が楽しみだな。」「どうしてこうなるのだろう?調べてみたいな。」「もっと～したい。」と思いを膨らませることができるよう授業を目指していきたい。そのためには、子どもの思いに耳を傾けたり、想像したりしながら、その子のことを理解しようとする姿勢が欠かせない。その上で、それぞれの思いにフィットする働きかけ(単元づくり・教具や教材づくり・言葉がけ・環境づくり等)ができるように、その教科や単元の本質を捉えた働きかけを講じていく。

さらに、わたしたちの使命は、子どもに確かな学力を育み、よりよい社会や人生を切り拓いていくことができる子どもを育てることである。今、求められる学力とはどのような学力なのか議論を重ねるとともに、日々の授業をどのように改善すべきなのか話し合いを重ねていく。まずは、その一つの切り口として、教科がもつ本質を捉え、系統性を明らかにした単元づくりに力を注いでいく。その単元で何を学ぶのか、その学びがこれまでの学びとどのようにつながり、今後発展していくのか明らかにしていきたい。教科の本質に触れ、「もっと知りたい。」「詳しく学びたい。」とわくわく・ドキドキが膨らむ授業を目指していく。

(3) すべてが「授業」ととらえ、「生徒指導の5つの場」を意識して指導にあたる

子どもたちにとって、学校生活の全てが学びの場である。各教科領域の授業はもちろん、朝の会や帰りの会、給食や掃除の時間も「授業」としてとらえていく。本校で「三人行事」として位置づけている学校行事「いちよう大運動会」「いちよう音楽会」「いちよう兄弟体験学習」も同様である。すべての「授業」について、「目の前の子どもにとって価値ある学びになっているか」という視点を持ち、教師の待ちや出を探りながら子ども一人一人の課題や育ちをとらえていくようにする。今年度は特に、委員会活動など特別活動の意義や目指す子どもの姿を再検討し、全職員で力を合わせて取り組んでいきたい。

生徒指導の5つの場……「自己決定の場」「存在感が持てる場」「人間的にふれあいが大切にされる場」「相手との関わりで行動できる場」「発達の可能性を最大限に発揮しうるような場」

研究 の 計 画	4月～5月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究主題と研究の柱、具体的な取り組みの共有 ・学級カリキュラム（年度当初版）作成 ・校内授業研究会（原則一学級一授業）を実施し、授業力の向上を図る
	6月～	<ul style="list-style-type: none"> ・三大大事（「いちよう大運動会」、「いちよう音楽会」、「いちよう兄弟体験学習」）について「教師の待ちと出」を視点とした検討・ふり返り ・第一回山形市委嘱研究会 ・学級カリキュラム修正
	12月	<ul style="list-style-type: none"> ・自主公開研究会 兼 第二回山形市委嘱研究会
	2月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究のまとめ（1年間の授業や子どもの育ち） ・学級カリキュラムふり返り
	3月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究集録発行
<p>※年間を通して毎週金曜日（場合によっては水曜日も含む）の放課後に「小さな学習会」を設定する。</p>		

学 校 名	山形市立第五小学校 山形市東原町一丁目1-9 TEL 622-0655 FAX 633-9331	校 長	太 田 千 春
		研究主任	長 瀬 朱 里
研 究 主 題	「一人一人の子供を主語にした授業づくりを目指して」(3年次) ～全ての子供の可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>【社会的な背景から】 新型コロナウイルスのパンデミックや急速な AI の普及、DX による社会構造の変化など、現代の社会は複雑で予測困難となってきている。このような時代だからこそ、一人一人の子供が、民主的で持続可能な社会の創り手となることができるようにするためには、自らの意思をしっかりともち、主体的に考え、多様な他者と協働しながら納得解を導き出すことができる資質・能力の育成が求められる。そして、学校教育は、生涯にわたって学び続ける基礎を培う役割を担っている。</p> <p>【自立した学習者の育成】 「自立した学習者」とは、今、求められる資質・能力を身に付けるために、自らの判断と意思で、生涯にわたって能動的に学び続ける姿であると捉えている。また、自立した学習者には、自らが自己の目標を設定し、目標達成に向けて自らの学びを主体的に調整し、実行し、進捗状況を評価し目標を再設定するといった、自ら学びを調整する力が必要であると考え。さらに、一人一人の子供を自立した学習者に育成していくためには、教師主導の授業から脱却し、一人一人の子供を主語とした学習者主体の授業へと「観」を転換していく必要がある。子供自身が学習の中心に立ち、主体的に学びを進める授業への改善である。</p> <p>【研究主題及びサブテーマ】 そこで、本校では、研究主題及びサブテーマを「一人一人の子供を主語にした授業づくりを目指して」～全ての子供の可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実～とした。本来、学習の主体は子供である。子供は、学びたいと思っており、適切な学習環境さえ与えれば、喜んで学習する存在である。子供を主語にした授業とは、こうした「子供観」に立つ「子供が学ぶ」学習者主体の授業である。将来の社会を見据え、必要となる資質・能力を育成するに当たり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた子供が主語となる授業改善に挑戦したい。</p>		
研 究 の 目 標	令和6年度に本研究を立ち上げ、主題に掲げた「一人一人の子供を主語にした授業づくり」を目指して、理論の研究及び実践研究を重ねてきた。この2ヶ年で、教師の「観」の転換は図られてきたと言える。また、学習が個に成立する単元の構想や、多様性を包摂する教材・学習方法等の選択を子供に委ねることに理解が進み、子供が自らの学びを調整しながら学習を進めている姿が増えてきたことに成果を感じている。一方で、子供の学びを支える伴走者としての教師の役割については、実践を通して検討していく必要があることが明らかとなった。これらを踏まえて、今年度は、確かな学びが個に成立する単元を構想するとともに、子供の学びを支援する教師の役割を明らかにし、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を通して主題に迫っていくことを目指す。		

<p>研究の内容</p>	<p>一人一人の子供を主語にした授業により、主体的・対話的で深い学びを実現し、確かな学力を育成するとともに、自らの判断と意思で、生涯にわたって能動的に学び続ける自立した学習者を育成していくうえで、以下の内容に焦点化を図り、研究を進めていく。</p> <p>(1)教科の本質に触れながら深い学びに至る単元の構想 自己選択・自己決定の場が保障された中で、主体的・対話的で深い学びを通し、育成したい資質・能力を身に付けることができるような単元を構想する。</p> <p>(2)自ら学びを調整する自己評価と振り返りの充実 一人一人の子供が、自ら学習状況を把握し、学習の達成感や成就感を味わうとともに、その後の学習を自ら調整することができるようにする。</p> <p>(3)子供の主体的な学びを支援する伴走者としての教師の役割 一人一人の子供が、必要に応じて自ら働きかけ、学びに向かうことのできる学習環境の整備、一斉学習の場において子供同士の協働的な学びを支えるファシリテート、子供が自ら問いを更新しながら学び続けるための支援など、教師の役割を明らかにする。</p>
<p>研究の方法</p>	<p>(1)ともに学びともに育つための研究組織づくり 一人一人の強みや持ち味、経験年数等を考慮し、これまでの経験値が異なる教師がともに学び、方向性を共有しながら新たな学びを創造できるような組織編成とする。 研究推進委員会は、校長、教頭、教務主任、研究主任、研究副主任で組織し、研究の内容や方法等について協議するとともに、研究全体会で成果や課題を共有する。</p> <p>(2)理解を深め互いの実践に生かす協働の時間 研究組織を生かしながら、協働して授業づくりを構想したり、教材をつくったりする時間を設ける。 教科の本質に触れながら子供を主語にした授業を実現するために必要な内容研究を協働的に行う。</p> <p>(3)実践研究による子供の育ちの検証 研究の内容に基づく授業研究会を全員が行う。市の委嘱を受けて、他に開かれた公開授業を年3回実施し、それ以外は研究組織ごとの授業研究会とする。いずれの授業研究会でも、互いの授業に学び合う機会を確保する。 研究の3年次となる今年度は、子供たちの確かな学力を育むとともに、一人一人が自分らしく可能性にチャレンジしようとする態度を育成し、子供自身も自らの成長を実感できるようにしていく。</p>
<p>研究の計画</p>	<p>《1学期》 ・研究組織づくり ・5月27日(水) 先行実践及び外部講師招聘 ・7月15日(水) 市委嘱公開授業① ・授業研究会</p> <p>《2学期》 ・11月26日(木) 市委嘱公開授業② ・授業研究会</p> <p>《3学期》 ・2月10日(水) 市委嘱公開授業③</p>

<様式>

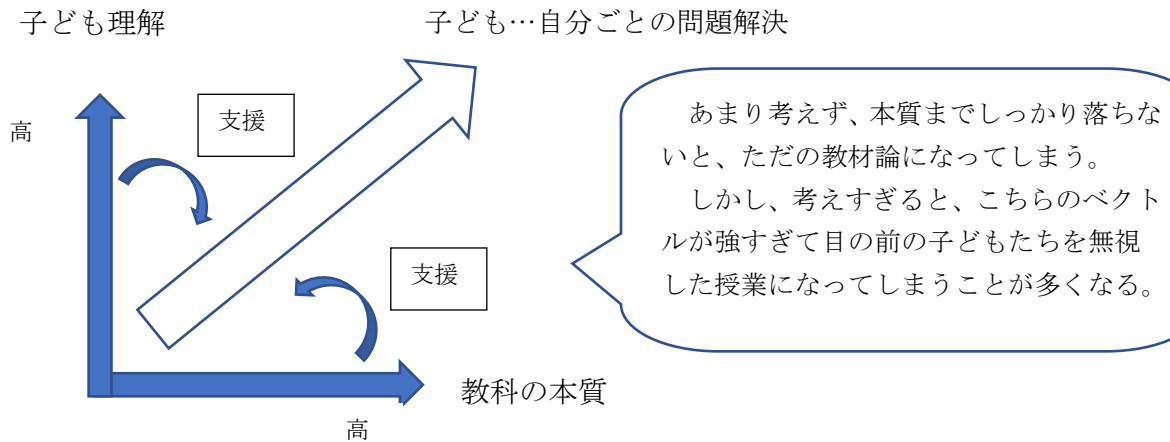
学 校 名	山形市立第六小学校 山形市鉄砲町二丁目 9 - 5 5 TEL 622-0656 FAX 633-9341	校 長	富樫 朗
		研究主任	佐藤 由希子
研 究 主 題	仲間とともに、自ら学びに向かう子どもの育成（5年次） ～子ども理解をベースにした授業づくり～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	本校では、「笑顔あふれる子ども」の育成を学校教育目標に掲げ、次のような子どもの姿をめざして教育活動を行っている。		
	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; text-align: center;"><p>(1) 学習大好きかしこい子ども「かしこく」(確かな学力) (2) みんなを大事に豊かな子ども「ゆたかに」(豊かな心) (3) 明るく健やか元気な子ども「すこやかに」(健やかな体)</p></div> <p>【社会的背景から】 今、子ども達を取り巻く社会環境は目まぐるしく変化している。コロナウィルス感染症によって世界中が経済、医療、教育など様々な場面で問題を抱えることとなり、従来のやり方を見直し、新しい方法を模索することとなった。子ども達が成人して社会で活躍する頃には社会構造や雇用環境が大きく変化し、子ども達が就くことになる職業の在り方についても、現在とは様変わりすることになると指摘されている。こうした時代の変化の中で、特に「学びに向かう力」は、自分を見失うことなく未来を切り開いていくために、また、変化が激しく先行き不透明な 21 世紀の社会を生き抜く上で必要となるであろう。新学習指導要領では、「主体的」「対話的」「深い学び」「探究的な学習」などを大切にして学習していくことが求められるようになった。特定の教科等にとどまらず学校教育全体を通じて、「どのように学ぶのか」という学びの質や深まりを重視していくことが必要になってきている。 これらのことから、物事を自分事としてとらえ、考え、社会や他者と関わりながら自己実現しようとする子どもの姿を目指し、研究主題を設定した。</p> <p>【これまでの取り組み】 本校では、学校経営構想の中で育成を目指す資質・能力でもある「主体性と協働性」を特に培っていかねばならないと共通理解されている。そこで、「仲間とともに＝協働性」「自ら＝主体性」という二本柱で、学びに向かう子どもの育成に取り組んできた。「仲間とともに、自ら学びに向かう子どもの育成」のためには、「子ども理解をベースにした授業づくり」が必要である。子どもたちのよい姿が見られたが、さらに仲間とともに、自ら学びに向かう子どもを育成するためにも、今年度もこのテーマで学校研究を進めていく。 また、「子ども理解をベースに」というテーマで研究に取り組むにあたり、授業での子どもの育ちについて話し合っていくことは重要だと考えている。そこで、子どものみとり方についてさらに焦点をあてて、子どもの思いや願いに耳を傾け、一人一人が何を求めているのかを考えたり、「どうしてその子がこう考えた（行動した）のかな。」と子どもの言動の奥にあるものについて考えたりするなどして、教師が子どもを理解し続けようとしながら授業に取り組んでいくことを研究の核として進めていきたい。 以上のことから、研究主題を「仲間とともに、自ら学びに向かう子どもの育成」、サブテーマを「子ども理解をベースにした授業づくり」と設定し、学校教育目標を具現化していきたいと考えた。</p>		

研究の内容

(1) 子ども理解をベースにした授業づくり

- ①子どもの姿（言動、行動）で語り合う。～教師のみとり方の向上 = 授業力の向上～
 子どもの具体的な姿を根拠として話し合うことで、何が見え、どのように解釈し、価値づけたのかを語り合っていく。一人一人が何を求めているのかを考えたり、「どうしてその子がこう考えた（行動した）のかな。」と子どもの言動の奥にあるものについて考えたり話しあったりすることを通し、子どもの育ちを知ると共に、教師自身の子どもを見る目を鍛えることは、教師の授業力が向上することにつながる。
- ②子どもの見方や考え方の広がりや深まりにつながるように、教科の本質を考える。
 教科の本質・教材の子どもにとっての価値について吟味する。指導案を書くときに、教科の本質を捉え、記述する。

《授業に対する教師の向き合い方》



- ③長期的な見通しをもって授業に望むためのカリキュラム・マネジメント表の作成。
 子どもの実態とめざす子ども像に応じて教育計画を立て、見直して修正していく。

(2) 研究の日常化

- ①授業を通覧したり開いたりして、いつでも見て学べるようにする。
 日常的な実践を見合ったり全校の子ども達の様子をみとったりできるようにするために、授業を通覧したり授業を開いたりして、誰もがいつでも見て学べるようにする。
- ②実践交流の時間を定期的に設ける。(月2回程度)
 日常の授業実践の交流(取り組みの成果や課題、指導上の悩み等)を中心に、事前研・事後研も必要に応じて行う。

研究の方法・計画

- (1)「個人テーマ追究型」授業研究会の実施…全員(短時間勤務の先生を除く)が研究授業を行い、研究主題の実現に迫る。
- (2) 校内研修会の実施…学びたい分野の専門家の招聘希望を集約し、学習指導部で依頼。
- (3) 校外研修の推進…県内他校や県外校への視察、研修(オンラインを含む)への積極的な参加を呼び掛ける。

【年間計画】

4月	今年度の研究構想・全体計画・指導案提案検討
5月	グループ研 情報研修
6月	グループ研 研究授業
7月	グループ研 全体会
9・10・11月	グループ研
12月	グループ研 全体会
1月	グループ研
2月	今年度のまとめと振り返り・次年度の研究構想

学 校 名	山形市立第七小学校 山形市城北町二丁目9番37号 TEL 023-644-3434 FAX 023-645-8586	校 長	小沼 裕佳理
		研究主任	志鎌 桃子
研 究 主 題	対話を通して気づき、考え、互いの思いを引き出しながら学びを楽しむ子どもの育成 (2年次) ～「実践プラン」を軸とした日々の授業づくり～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>◆主題設定の理由</p> <p>変化の激しい時代を生きぬく子どもたちは、高い志や意欲を持った自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓く力(課題解決力)を身に付けることが求められている。また、新しい時代を生きる上で必要な資質・能力を育むためには、「何を学ぶか」という知識の質や量の吟味に加え、「どのように学ぶか」と主体的に取り組み、生活をよりよくするという学びの質を高める指導法を探ることも重要になっている。</p> <p>こうした状況を踏まえ、本校では、子どもの姿からつきたい力を重点化し、「対話を通して、他者の考えを引き出しながら、考えることを楽しむ子ども」「豊かに気づき、試行錯誤する子ども」の二つを重点目標に策定した。</p> <p>◆主題・副主題について</p> <p>昨年度の研究で、本校ではこれまでの校内研究の在り方について職員間で話し合いを重ね、自分たちが何をめざしていきたいのかを考えた。</p> <p>その結果、子どもの思考を読み取り、具体的な姿を語り合うことで、教師の見取る力が向上し、子どもたちへのよりよい働きかけや子どもたちの発言・内省的な思考を引き出すことができているのではないかと考えた。</p> <p>さらに、本校が以前から取り組んでいるカリキュラム・マネジメントをブラッシュアップさせた「実践プラン」を作成することで、年間を見通し、日々の教育活動から子どもの思考を見取っていくこととする。</p>		
研 究 の 目 標	<p>◆重点目標</p> <p>1. 対話を通して、他者の考えを引き出しながら、考えることを楽しむ子ども</p> <ul style="list-style-type: none"> ○伝えたい思いを高め、相手に分かりやすく伝えようとする。 ○対話しながら学び合う中で互いの思考の活性化を図り、深い学びへとつなげる。 <p>2. 豊かに気づき、試行錯誤する子ども</p> <ul style="list-style-type: none"> ○生活の中で様々なことに気づく。 ○自ら課題を解決しようとする。 		
研 究 の 内 容	<p>1. 実践プランの作成</p> <p>本校では毎年、カリキュラム・マネジメントを作成、活用しながら学習指導の充実を図っている。本校のカリキュラム・マネジメント表は、学級経営案及び学習指導カリキュラムとしての性格を持ち合わせ、適宜改訂を図っていくものであり、今年度から「実践プランへ」とブラッシュアップさせる。</p> <p>2. 授業充実のための取り組み</p> <p>(1) 授業研究</p> <p>子どもの思考を多面的・多角的に捉えながら授業を進めていくための学年合同授業を行う。</p>		

容	<p>(2) 学年（教科）担任制の導入 学年 2 クラスの教科担任制を導入することで、一つの教科をじっくりと教材研究したり、より目の前の子どもの思考に沿った授業を行ったりすることが可能になる。</p> <p>(3) 単元構成を大切にする。 単元全体を通して探究型の構成にする。1 時間の授業も探究型をめざしていく。</p>
研究の方法	<p>1 研究全体会の実施</p> <p>(1) 実践プランの活用 ① 教員、ひとりひとりが研究実践プランを作成する。 ② 学期ごとに子どもの実態や授業の様子について対話を通して学びを深め、教師自らの指導や支援、実践プランの修正、改善を図る。</p> <p>(2) 教科担任制・学年担任制の実践校や本校の研究に有効な研修会への参加を通して研修の機会を作り、情報を共有することで学びを深める。</p> <p>2 授業通覧週間の実施</p> <p>年 2 回、1, 2 学期に互いの授業を見合い、子どもがどんな姿で、どんなつぶやきをしていたか、その教科のどのようなものかの見方・考え方につながっていたかなど、具体的な姿で見取る。参観者の子どもの思考を見取る力を養う、授業者に見取った子どもの思考を伝え還元することを目的とする。</p> <p>3 学び方の共有</p> <p>(1) それぞれの実践プラン、わたしの学びのまとめをデータとして蓄積し、次年度の研究につなげる。 (2) 普段の授業を積極的に開き、互いに学び合う。</p>
研究の計画	<p>4月15日 研究推進委員会① 4月28日 研究全体会①（実践プラン作成） 5月14日 研究推進委員会②（5/26 研究授業事前研） 5月26日 研究授業①（6年生） 研究全体会②（事後研究会） 6月 1日～授業通覧週間① 7月16日 研究推進委員会③ 7月29日 研究全体会③（1 学期振り返り、もやもや相談会、2 学期にむけて） 11月 1日～授業通覧週間② 12月18日 研究推進委員会④ 1月 6日 研究全体会④（2 学期振り返り、もやもや相談会、3 学期にむけて） 1月20日 研究推進委員会⑤ 2月 4日 研究全体会⑤（実践プランまとめ）</p>

<様式>

学校名	山形市立第八小学校 山形市小白川町二丁目 8 番 36 号 TEL 631-2140 FAX 631-9009	校長	高橋 郁子
		研究主任	中村 千歩
研究主題	『自ら楽しいくらしを創る子どもの育成』 ～ 研究の 3 つの柱「主体性・協働性・自立性」を軸に ～（2 年次）		
研究主題設定の理由	<p>資質・能力ベースの教育、令和の日本型教育、ウェルビーイング等、現代社会の課題解決に向けた施策や考え方が叫ばれる中、学校現場では、子どもたちの未来と今の繋がりをしっかり見据えながら教育活動を展開していかなければならないと考えている。その鍵は、『子ども自らが強い思いをもって学びやくらしを創ること』と、それを支える『教師の意識改革』にあると捉えている。</p> <p>そこで、本校では、研究主題を『自ら楽しいくらしを創る子どもの育成』と設定し、その実現に向けて、研究の 3 つの柱「主体性・協働性・自立性」を軸に子ども主体の学びを構築し、実際の子どもの姿をもとに語り合い、子どもの育ち実現に向けて研究を進めていくことにした。</p> <p>研究主題にある「楽しい」とは、自分自身の思いから生まれるたのしい状態のことであり、内側から湧いて来るもの、与えられるものではなく、自分自身の考え方で変わってくるものである。</p> <p>研究主題にある「くらし」とは、教科等における学習はもとより、行事や総合的な学習（生活科含む）、児童会活動、道徳科、外国語活動の活動等、学校生活の全てを示している。本校の子どもたちは「くらしづくり」と呼んでおり、教科の学びを創ったり、縦割り班の楽しいくらしを考えて実行したり、学校行事等について話し合い、目的意識や相手意識をもった活動を創ったりしている。</p> <p>子どもの育ちには、子どもたちが本気で学びたくなるような活動展開や必要感を抱いて友だちとかかわりたくなるような交流場面、自立に向けた手立て等が重要となる。研究の 3 つの柱「主体性・協働性・自立性」は、子どもの育ち実現には欠かせない要素であり、授業づくりの主軸になるものと捉えている。主体的で協働的な価値ある学びを経験した子どもは、自らの生き方・あり方・学び方・考え方等の変容に気づき、自信を高めていくに違いない。</p> <p>さらに、昨年度の子どもたちの姿から見えてきたよさと課題を踏まえ、今年度は重点ポイントとして「自己指導能力」の育成も挙げている。自ら楽しいくらし創りをしていく中で、何のために活動をしているのか、どのような力がついてきたのかを自分で語れる子ども、少し難しい課題にも粘り強く挑戦し続ける子どもの育成を目指していきたいと考える。</p> <p>このような学びを構築するには、子ども主体の学びに向けた「教師の意識」と、その意識に支えられた「教師の支援」が欠かせない。教師は、期待する子どもの姿や育つ活動プロセスを思い描き、目の前の子どもを深く理解していくことが大切になってくる。また、子どもの考えや思いに寄り添いながら、「出と待ち」を考え、場に応じた支援に努めなければならない。今、求められている「活用力・実践力」や「思考力・判断力・表現力」等の資質・能力の育成は、教師の指導力にかかっており、教師同士の活発な OJT によって高まっていく。今年度も、教師による日常的な学び合いを大切にしていきたいと考える。</p> <p>本校では、以上のような教育的ニーズや子どもたちの実態を鑑み、『子ども主体の学び』に焦点をあてて、授業研究会のみならず、行事や児童会活動等の特別活動・教科・総合的な学習等における子ども主体の授業や教師の支援について追究していくこととした。その日常的な教育の営み、いわゆる教職員文化を確立することが、本研究の最終ゴールであると捉えている。</p>		

<p>研究の目的</p>	<p>子どもの実態や学習指導要領の趣旨等を踏まえ、研究3つの柱「主体性・協働性・自立性」を意識しながら日常的に教育活動を展開し、子どもの育ちに向けた「子ども主体の学びのあり方」や「教師の支援のあり方」等を探る。</p>
<p>研究の内容</p>	<p>(1) 子ども主体の学びと教師の意識 単元づくり・授業づくりの始めの一步は、「何を教えるか」ではなく、「子どもの実態から、どんな教師の願いを描くか」さらには「子どもの興味・関心から、どんな活動を展開していくか」である。「子どもたちの実態は、こうだから…」 「子どもの興味・関心はこうだから…」 子どもを主語に置いた授業づくりを心がけていくことは、資質・能力ベースの教育には欠かせないことと捉えている。 また、教師には「させたい活動」がある。しかし、子どもたちの思いが乗らない状況のまま教師主導のもとに活動に取り組ませれば、子どもたちは学びに対して受け身になってしまう。単元や授業をどのように展開すれば、子どもたちが主体性を保ったまま、教師の「させたい活動」の必要性に気付くのか…そこに教材研究の醍醐味がある。</p> <p>(2) 子ども主体の学びを創る研究の3つの柱 子ども主体の学びを創造するための要素は、 ①主体性…自分ごとになる価値ある学び ②協働性…必要感ある仲間との交流 ③自立性…自立した学習者を育てるための手立てや活動 の3つと捉えている。この3つの要素は、授業研究会に留まることなく、全ての教育活動を創造する際に強く意識していく。</p>
<p>研究の方法</p>	<p>(1) 日常的な教育活動における子ども主体の追究</p> <p>①「子ども主体のくらし」の創造 学校行事や児童会行事、委員会活動等では、子どもたちが強い課題意識をもって、自分たちの手で活動を切り拓き、互いに関わりながら取り組んでいけるように、具体的な教師の支援や児童理解のあり方等について教職員OJTにより学び合っていく。</p> <p>②「カリキュラム・マネジメント」(以下、「カリマネ」と表記)の推進 カリマネは、日常的に「子どもの育ちをマネジメントすること」である。子どもにとって、やり甲斐のある活動を通年にわたって繋げていけるように、「教育課程」並びに「学級経営案(学級カリキュラム)」について、十分に吟味して作成しなければならない。また、学級経営案(学級カリキュラム)は、年度当初の「紙キュラム」から、教育活動が進むにつれてPDCAサイクルによる加除修正を加え、年度末に完成を迎えるようなイメージで取り組む。子どもの育ちは「日常の教育活動」にあると捉えている。</p> <p>③「生活科・総合的な学習」「自由進度学習」等の実践研究 カリマネの中核となる生活科・総合的な学習は、子どもの育ちの実現に欠かすことのできない教科・領域である。子どもにとって遣り甲斐のある活動にするには、「単元の立ち上げ」や「子ども主体の学びを支える教師の支援」が重要となる。また、「自立した学習者」育成に寄与する自由進度学習についても、研修を深めていかなければならない。外部の様々な研修の機会を活用したり、校内研修会を企画したりしていきたい。</p>

	<p>(2) 授業づくりにおける子ども主体の追究</p> <p>研究授業は一人一授業（大研は各学年部より一つ）とする。研究の窓口は限定せず、学級経営の中核となる教科・領域を決めて実践を積み上げる。事前研究会や事後研究会では、研究の3つの柱を視点として話し合う。</p> <p>※事後研の記録や年度末の研究集録は作成しない。（実践を見て話し合うことに意味があるため。）</p>
<p>研 究 の 計 画</p>	<p>【1学期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究全体会①・・・・・・・・ 4月13日 ・授業研（大研①4年生）・・・・ 7月15日 ・研究全体会②・・・・・・・・ 7月27日 1学期中の成果と課題 <p>【2学期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業研（大研②6年生、大研③1年生）・・・・・・・・9月10日②、11月中③ ・研究全体会③・・・・・・・・ 12月21日 2学期の成果と課題 <p>【3学期】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究全体会④・・・・・・・・ 2月22日 来年度の方向性等 <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 20px;"> <div data-bbox="746 734 1110 824" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>※研究推進委員会は、 必要に応じて実施する。</p> </div> <div data-bbox="1129 734 1497 824" style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>※小研は、日程を調整し、 随時実施する。</p> </div> </div>

学 校 名	山形市立第九小学校 山形市馬見ヶ崎二丁目5番1号 TEL 023-681-3600 FAX 023-681-3518	校 長	沼澤 聡
		研究主任	齋藤 優花
研 究 主 題	<p style="text-align: center;">豊かなくらしを、ともに創り出す子どもの育成 ～主体的な学びを支える授業づくり～（2年次）</p>		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>【研究主題設定の理由】</p> <p>現在の社会では、予測困難な不確かなことにも対応でき、持続可能な社会を形成する人材の育成が求められている。それを受けて、学校では、個人が豊かな人生を切り拓くために、他者を価値のある存在として尊重し、互いに協働しながら様々な社会的な変化を乗り越えていく力を身に付けさせる必要がある。</p> <p>本校の子ども達は、課題に対して熱心に取り組む一方で、“自分たちの学びは自分たちでつくる”という、主体的に学ぼうとする姿に課題がある。そこで昨年度から、「豊かなくらしを、ともに創り出す子どもの育成 ～主体的な学びを支える授業づくり～」を研究主題として実践を行ってきた。主体的な学びを支えるものとして、「課題設定」「単元構成」「学び合い」を重点に置き、授業づくりを行ってきた。1年間の実践を通して、毎時間の学習課題を工夫したことで、学びに向かう姿がよくなった。一方、学び合いの場を設定したことで、協働的に学習する姿は見られたが、学びの深まりと単元づくり、単元を通じた課題設定において課題が残った。そのため、単元としての授業づくりをどのように進めていくのか、学び合いをどのように捉えるか、単元づくりを進める中で、課題設定や学び合いをどう位置付けるのか等について、さらに考えていく必要性から、今年度の研究主題は、「豊かなくらしを、ともに創り出す子どもの育成 ～主体的な学びを支える授業づくり～（2年次）」と設定する。さらに、重点を「単元構成」とし、子ども達の主体的な学びに迫っていきたい。</p>		
主 題 に つ い て	<p>【主題について】</p> <p>○ 豊かなくらしを、ともに創り出す子どもとは</p> <p>社会や生活の様々な変化を前向きに受け止め、自他共に価値ある存在として尊重し、協働しながら様々な課題を乗り越え、豊かな生活を主体的に創り出していく子どもと捉えている。</p> <p>この主題を実現するために、以下の4つの資質・能力をもとに、全ての教育活動を実践していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 探究：探究的（課題→情報収集→整理・分析→表現・まとめ）に課題解決する子ども ● 整理：既習事項や新たな情報を課題に即して整理する子ども ● 表現：学んだことを課題に即してまとめ、多様な表現方法で伝える子ども ● 対話：友と対話して、自分の考えを広め、深める子ども <p>これらを重要な4つの要素と捉えて実践を積み重ねていくことで、学級づくりや授業づくり、支援のあり方や教師の意識について共通理解を図ることができると考える。そして、豊かなくらしをともに創り出す力を育てていきたい。</p>		
研 究 の	<p>今年度は、昨年度の「単元づくり、単元を通じた課題設定においても課題が残った。」という反省から「単元構成」を重点とする。見通しをもたせることで、「主体的に学ぶ子ども」という目指す子どもの姿に近づくことができるのではないかと考え、研究を進めていく。</p>		

重点

研究の内容・方法

【研究の内容】

全教科 ※研究授業の教科も指定しない。

【研究の方法】

研究組織

- ・研究全体会、推進委員会、各学年部会、各学年会で組織する。

授業研究

- ・日常的な授業実践
- ・カリキュラムマネジメントの作成と活用
- ・研究授業
- ・先進校の授業視察
- ・校内研修の実施
- ・研修日の活用

〈授業研究会の進め方について〉

	大研	小研
	全3回 (各学年部) 指導主事要請を行い、ご指導いただく。	1人1授業 (学級担任) 積極的に指導主事を要請する。
事前研	学年部+研究主任・副主任 (+該当教科をもっている方などの希望者)	学年 (必要に応じて学年部でも可)
準備	研究推進員を中心に、学年・学年部で協力して行う。	
役割分担	(学年部で分担) ①授業者 ②記録・写真/司会 ③事後研だより	(学年で分担) ①授業者 ②記録・写真/司会
事後研	全員	学年部+参観者
事後研だより	学年部の担当者が発行(2週間以内) 全員に配付	授業者が発行(2週間以内) 全員に配付
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・研究授業に限らず、自ら授業を開いたり他の先生の授業を参観したりして学び合う。 ・年間に1度は全員指導案(細案)を書き、授業を公開する。 	

〈研修日〉

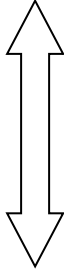
- ・水曜日は研修日として、授業について考える。
(単元づくり、教材研究、指導案検討や実践の情報交換、お悩み相談会、板書検討等)
- ・確かな学力育成部と連携して、研修会を実施する。

〈研究のふり返し〉

・研究集録は作成せず、データで保管する。

研
究
の
計
画

【研究の計画】

月日	学級・教科など	備考
4月6日	研究全大会①（今年度の重点、進め方の共有など）	 行 う 一 人 一 授 業 を
6月26日	2年 算数 研究授業（大研）①	
7月31日	研究全体会②（1学期のふりかえり）	
11月10日	5年 国語 研究授業（大研）②	
12月8日	3年 理科 研究授業（大研）③	
12月21日	研究全体会③（2学期のふりかえり）	
2月26日	研究全体会④（今年度のふり返し来年度の方向性など）	

学校名	山形市立第十小学校	校長	学 校 長 山 川 直 樹
	〒990-0835 山形市やよい二丁目6番1号 TEL643-4102 FAX645-8590	研究主任	鈴 木 千 紘
研究主題	<p align="center">「聴き合い、支え合い、学び合う子ども～協同的学びへ～」</p> <p align="right">(2年次)</p>		
研究主題設定の理由	<p>本校の学校教育目標は、「しなやかな心とたくましい実践力をもち、徳・知・体の調和のとれた児童の育成」である。学校のめざす子ども像は、「ゆたかに・かしこく・たくましく」として、十小の子どもたちが、仲間と心を通わせながら自分たちで考え、未知の問題や課題にも挑戦し、最後までやり抜くことを目指している。また、学校教育を通じてよりよい社会を創るという昨今の教育的背景を踏まえ、子ども自らが学びを創っていくことができるように取り組んでいかなければならない。</p> <p>そこで、昨年度より研究主題を上記の「聴き合い、支え合い、学び合う子ども～協同的学びへ～」とした。授業の中で見られる子どもの姿だけでなく、日常から互いを尊重し、安心した環境のもと生活や学習ができるよう追究するとともに、子どもたちの未来に役立つ実践力や活用力を高めるような教育活動を展開していきたいと考えている。</p> <p>この研究主題に込めた思い（意味）は、次のとおりである。</p> <p>「聴き合い」…… 学びの出発点。子どもと子ども、子どもと教師、教師と教師が聴き合い、対話的コミュニケーションを生み出す。アクティブな聴き方を推進していくことで、一人ひとりが主人公になって学ぶ等</p> <p>「支え合い」…… ペアやグループの形態を取り、自然に寄り添い、聴き合いが生まれる環境を整備する。相手の尊厳を認め、対等な関係で接することができるようにする。男女4人グループ等</p> <p>「学び合う」…… 聴き合う、支え合う関係を通して、「わからない」子どもが質問することから出発し、わからない子どもとわかっている子ども両方に恩恵をもたらす互恵的関係を構築する等</p> <p>この研究主題を実現するために、以下の『2つの柱』をもとに全ての教育活動を実践していく。</p> <div style="border: 1px solid green; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>◎課題のデザイン…楽しみながら集中して取り組めるようなやりがいのある課題をつくる。</p> <p>◎支え合いの場の工夫……子ども同士がさりげない支え合いができる場をつくる。</p> </div> <p>これらを大切に、実践を積み重ねていくことで、教職員全員で教育の方向性を確かめたり、授業づくりや学級づくり、支援のあり方や教師の意識について共通理解を図ったりすることができる。さらに、十小全体で発達段階に合わせた系統的な学習方法の定着や教室環境整備を図っていくことで、人間関係づくりを学びながら、未来を豊かに生きる力を育てていきたい。</p>		
研究の目標	<p>子どもが安心して過ごせる教室の物的心的環境を整備し、学ぶことを楽しみ、没頭できるようにする。その具現化に向けて、『研究の2つの柱』をもとに教育活動を創造するとともに、教師の支援のあり方を追究して、「子どもの育ちを実現できる学校」をめざす。</p>		

1 6年間の育ちの系統性を意識した教育活動の展開

- ・子どもたちが安心して、主体的に学べるような支援や教室環境の整備を行う。
- ・学校行事や学年全体での取り組み等について「めざす子どもの姿」の共通理解を図り、具体的な活動場面において育てたい力、指導者の立ち位置、よりよい支援を話し合って共有していく。
- ・学年・学級カリキュラムシートをもとに、(更新しながら) 1年間、そして小学校生活6年間を見通して、めざす子どもの姿を意識して、子どもの育ちを実現していく。

2 単元末・単元後・未来の子どもの姿をイメージし、

聴き合いを中心とした日々の授業づくり・授業実践・授業改善

- ・「何を学び」「何ができるようになるのか」といっためざす子どもの姿を明らかにしながら実践にあたる。子どもたち自身が「実践・活用」できる力を身に付けるために、子どもたちにとってやりがいのある課題づくり、実践・活用に結び付く学習過程の工夫、学習後の価値付け・支援を繰り返しながら取り組んでいく。
- ・子どもたちが「どのような意識で学び、かかわっているのか」を考え、よりよい支援を探り、子ども主体の学びを目指していく。

3 子どもを見る視点の共有化、

授業づくり＝学級づくりを意識し、学年・学校全体で子どもを育てる。

- ・支えがつかず取り残されている子どもがいないか、子ども同士でさりげなく支え合いができていくかを見る。
- ・子どもの姿を記録し、語り合い、子どもの変容をとらえて支え合いができていくかを考える。(授業研究会後の事後研究会、語りタイム、教科担任制での連携)
- ・子どもたちが、支え合うことのよさを実感でき、安心して過ごせる学級経営、学年で子どもを育てる学年経営に取り組む。授業と学級・学年経営は切り離すものではなく、**授業を通して学級経営や学年経営を行っていく。**学年間で、積極的に教科担任制を取り入れていく。



「資質・能力」重視の教育
「主体的・対話的で深い学びの実現」
「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」

山形県

人間力を磨き、山形の未来をひらく
・知徳体の調和、自立した一人の人間として社会の発展に貢献する。
・郷土を愛し、地域で活躍する。
・広い視野と高い志をもつ。
「探究型学習の実現」

十小の子どもの姿 ○よき □高めたい

- 自分の生活、経験、今までの学びから課題を見出すことができる。
- ふり返りから、自己の学びを見つめ、次の課題へとつなげようとする姿勢がある。
- 相手の意見を共感的に受け止めることができる。
- 自分の考えをどのような場でも表現する。
- よりよい課題解決に向けてこだわりをもって粘り強く取り組む。
- 仲間と一緒にわかる喜びや楽しさを感じながら学びを高め合う。

山十小 学校教育目標

しなやかな心とたくましい実践力をもち、徳・知・体の調和のとれた児童の育成
～ゆたかに かしこく たくましく～

研究主題

『聴き合い、支え合い、学び合う子ども～協同的学びへ～』

研究の柱

課題のデザイン

支え合いの場の工夫

育ちの土台となる学級・学年経営

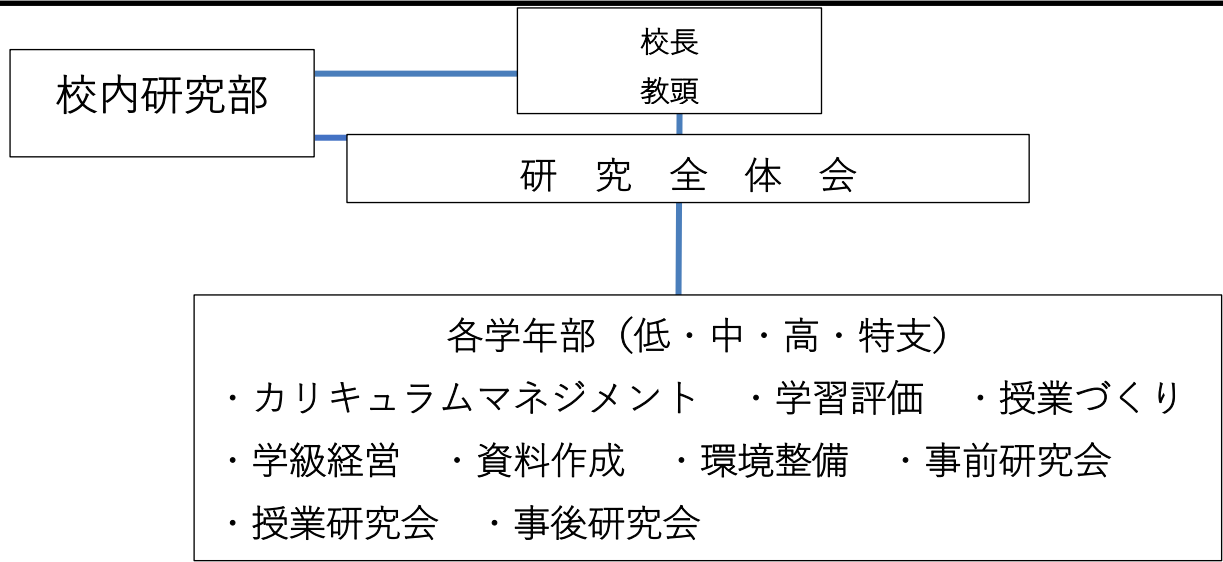
研究の方法

- (1) 子どもの育ちに結びつく授業・単元づくりのあり方や教師の支援の仕方を学ぶ。
- ① 提案授業
 学年部で授業づくりを行い、授業を提案する。授業研究会の持ち方を工夫し、お互いの授業を参観して学び合える形で行う。
 事前研究会は、以下の内容で2回行う。
事前研究会①：授業が子どもの「支え合いの場」になっているか、やりがいのある「課題のデザイン」がされているかについて話し合い、授業・単元構想をもつ。
事前研究会②：予想される子どもの思考と指導事項について考え、指導案を検討する。
 事後研究会は全体で行う。提案授業を実践・参観し、各自が学んだことを共有する。
- ② マイ授業
 提案授業者以外が行う学年部での授業研究会。
 事前・事後研究会は、学年部単位で行うが、他の学年も自由に参加してよい。
 事後研究会で話題になったことを全体に共有化していく。
- ③ 日常授業実践
 授業が子どもの「支え合いの場」になっているか、やりがいのある「課題のデザイン」がされているかを意識し、日々の授業の実践にあたる。
 教材研究や教材の開発等、個人内にとどまらず、学年間や学年部間、教科担任間で連携しながら授業づくりを行う。
 「校内研だより」を刷新し、第1回校内研究全体会を経た上で、各自が今年度の目標をたてる。
 また、提案授業やマイ授業で学んだことを記録していくことで、自分の授業実践に活用していく。

(2) 研究の日常化（育ちの追究の日常化）を図るために、学校行事、学年での活動、総合的な学習の時間、普段の学級・学年経営等における、よりよい教師の支援を探る。

- ① 学校行事、学年での活動、総合的な学習の時間・生活科などにおける育ちの追究
 学年担任団で子どもの学びの姿を把握し、「めざす子どもの姿」をイメージしていく。研究主題・2つの柱をもとに、「活動内容」、「教師の支援（特に意識付けを重視）」を検討しながら実践にあたる。
- ② 子どもの育ちや教師の支援のあり方についての共有化
 授業研究会だけでなく、日常的に子どもの学びの姿を記録していき、子どもの変容をとらえられるようにする。また、学年会や語りタイムを活用し、子どもの姿を共有化したり、よりよい支援を考えたりする。支援委員会とも連携を図り、子ども理解に努める。
 学校・学年の活動において「めざす子どもの姿」、教師の支援（意識）のあり方について、2つの柱にもとづいて研究全体会で共有する。各活動の実践後は、子どもの学びの姿をふり返り、子どもの育ちを言語化して蓄積する。次のよりよい支援を考えていくようにする。

研究組織



研究の計画
(主なもの)

年度当初 ◆研究の方向性の確認と見直し・研究計画・研究の組織づくり

組織・計画
(年間の見通し)

4月 ◆研究全体会（研究の概要、組織、計画等の提案）及び提案授業 A

☆校内研修会…山形大学 森田智幸先生 より

5月 カリマネ研修会
～各学年部の提案授業の日程調整及び講師招聘～

6月 ～授業づくり 教育活動の展開～
～提案授業、マイ授業へむけた 単元・授業づくり スタート～
学び合い参観 week 1 回目

7月 ◇提案授業 B
☆校内研修会
◆研究全体会
(一学期のふり返り 資質・能力の見直しカリキュラムシートの更新 今後の見通し)

8月 ☆校内研修会
子ども理解研修及び授業づくりを計画予定

実践
研究

9月 ～マイ授業へ向けた 単元授業づくり 2学期～
10月 学び合い参観 week 2 回目

11月 ◇提案授業 C・D
～子どもの姿を整理・分析～

12月 ◆研究全体会
(2学期のふり返り、資質能力の見直し カリキュラムシートの更新
今年度の実践のまとめ提案)

まとめ


1月 ～学年・学校全体によるふり返り 今年度の研究実践のまとめ～
◆研究全体会（資質・能力について見直し・再検討）
☆校内研修会：子どもの姿をとらえ、実践活用を見据えた授業づくり
学び合い参観 week 3 回目

2月 ◆研究全体会（研究の成果と課題、次年度の方向性）

3月 ～次年度の研究の方向性 組織づくり～

- * 提案授業研究会は研究全体会に位置づけ、分散型の全員参加とする。
- * 上記以外の会議や研修会等については、研究部で必要と認められた場合に実施する。
- * 先進校の実践等を学ぶための研修や講話などに進んで参加できるようにする。

<様式>

学 校 名	令和8年度 山形市立南小学校 山形市青田二丁目1番1号 TEL 6 3 2 - 3 6 6 0 FAX 6 3 1 - 9 0 1 9	校 長 我妻 靖浩		
		研究主任 富田 拓也		
研 究 主 題	令和8年度研究主題=学校教育目標 「夢を持ち、わたしの未来・わたしたちの未来を豊かに創造しようとする子どもの育成」(第3次) 一言語能力の育成に重点を置いたカリキュラムマネジメント			
研 究 の 内 容	研究内容と研究の重点 ★研究の内容 =学校教育目標具現化のグランドデザイン 4つの資質・能力育成とつ教育活動の方針 ★研究の重点 =「言語能力の育成」に重点を置き、学年部で協働研究 「言語能力の育成」を核にしたカリキュラムマネジメントの作成と日常的な活用 令和8年度 山形市立南小学校 学校経営グランドデザイン  (学校教育目標) 夢を持ち、わたしの未来・わたしたちの未来を豊かに創造しようとする子どもの育成			
	【地域】 郷土を愛する心 わ 輪になって ともに学ぶ子ども ○多角的な視点を持つ 地域全体を学びのフィールドに ○多様な視点への気づき 多世代とかかわって学ぶ ○キャリア教育の充実 他者と協力して社会をつくる力を育てる	【知】 確かな学力 か 考えを進んで 伝え合う子ども ○資質、能力の向上 主体的・対話的で深い学びの充実 ○指導法改善 カリ・マネの効果的活用 DXの推進 職員研修の充実 ○対話する力の育成 言語能力育成に重点 ファシリテーションの導入	【徳】 豊かな心 た 助け合い、 思いやりのある子ども ○生徒指導4視点を生かした学級経営 安心、安全な居場所づくり ○ピア・サポートの推進 自分たちの力で、居心地の良い学校を創る ○インクルーシブ教育の推進 みんな違って、みんないい。 でも、みんなであるための工夫が必要	【体】 たくましい心と体 け 健康でたくましい子ども ○健康、安全教育の充実 自己管理能力の向上 ○体力、運動能力の向上 多様な動きを経験 ○やり抜く力の育成 結果でなく、プロセスを認める
	〈めざす学校像〉 「笑顔で登校、笑顔で下校」 「あいさつが響く学校」 「失敗を恐れずチャレンジできる学校」		〈保護者、地域との連携〉 PTA活動の充実 学校運営協議会活性化 地域学校協働活動推進 員との積極的連携	
	〈めざす教師像〉 強い情熱をもった教師 専門的な力量を備えた教師 総合的な人間力のある教師			

言語活動について学び合う場の設定

定期的に「言語能力を高めるためにどんな取り組みをしているか」について情報交換する場を設ける。

事後研だよりについて

形式は昨年度のを踏襲する。大研をした学年で作成し、配付する。

研究集録について

昨年度同様、共有にデータで残し、いつでも見られるようにしておく。

カリキュラムマネジメント

カリキュラムマネジメント表の形式を見直し、「言語能力の育成」を目指した学年カリキュラムを作成し、運営していく。

※授業研究会では、指導主事または授業者が希望する先生を指導・助言者として来ていただく。

学年 カリキュラム検討

1 ねらい

年間指導計画を見通し、重点的に指導する教科等（単元等）、そこで育成したい資質・能力を明確にして、児童の学力向上につなげる。

おおまかに年間を見通せるように。見通しをもって1学期の指導に当たれるように。

2 進め方

(1) 総合的な学習の時間（3～6年）の年間指導計画を、検討する。

現時点での計画で、途中で変更になる可能性はあり。

今後の学習を進める上で、記述しておいた方がよいことは自由に記述する。

(2) 児童の実態、学校経営方針と、年間指導計画を照らし合わせる。

(3) 他教科との関連を図る（教科で獲得した資質・能力を活用、発揮させて解決させる）場を設定し、年間指導計画で関連を図る単元をつなげる。

「あの時学んだことが、ここの学習でも使えそう」と子どもに自覚させるには、私たちがまず自覚する必要がある。私たちが無自覚だと、ただ通り過ぎてしまう。

研
究
の
方
法

<研究全体会>

第1回 4月20日

第2回 4月28日

第3回 5月 1日

第4回 5月 8日

今後、日程を相談し、学期ごとに学年カリキュラムの振り返り、調整を行う。2回程度

第5回 7月31日

第6回 12月25日

第7回 2月22日

<大研授業研究会 計画> 日程は候補の段階

第1回 1学年 授業者：菊池 利菜 教科：未定

第2回 6学年 授業者：秋葉 夏月 教科：未定

第3回 4学年 授業者：板垣 聡一郎 教科：未定

第4回 わかたけ学級 授業者：石山 尚弥 教科:自立活動

授業日及び事後研修会日は調整中

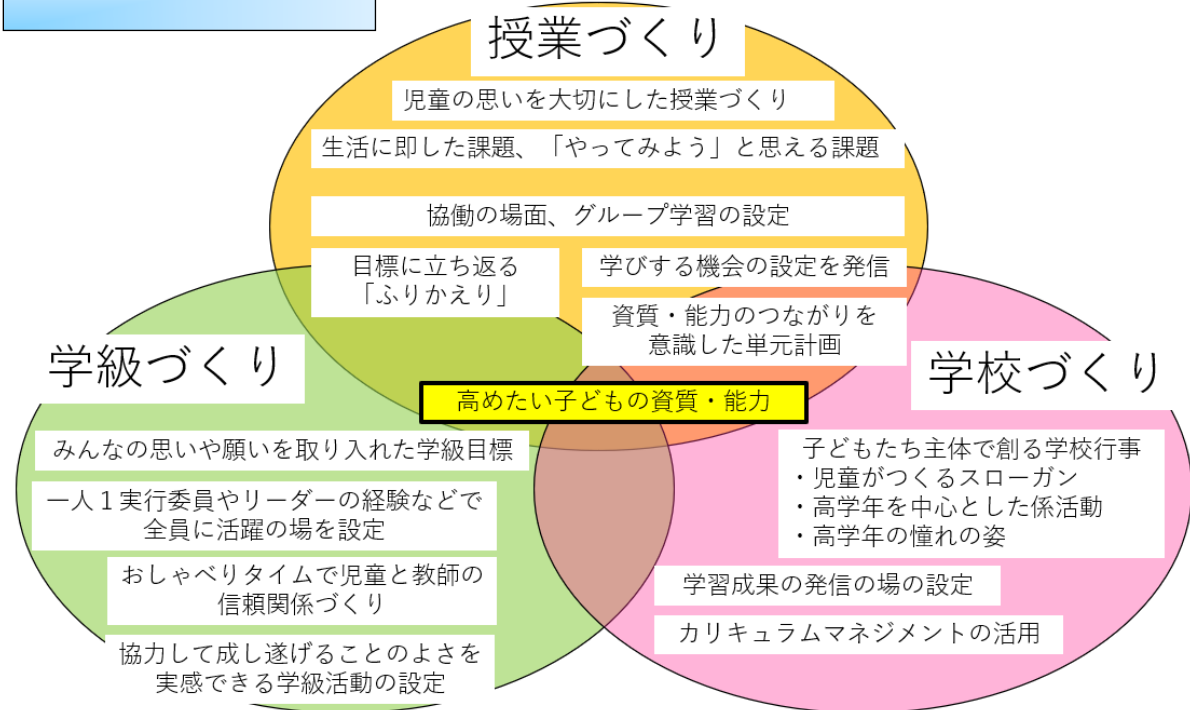
※小研は教務と日程を相談し、大研の合間に挿入していく。

<様式>

学 校 名	山形市立西小学校 山形市西田三丁目2-1 TEL 6 4 5 - 0 3 9 0 FAX 6 4 5 - 8 5 9 4	校 長	小林 聡
		研究主任	大沼 沙貴
研 究 主 題	自ら考え、ともに学び合う子どもの育成（8年次） ～子ども同士のつながりを大切にした教育活動を通して～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>1 はじめに 昨年度の研究内容について</p> <p>昨年度は、研究主題として「自ら考え、ともに学び合う子どもの育成～つながりを大切にした教育活動を通して～」を掲げ、研究を進めてきた。子どもたちの主体的・協働的な学びの姿を目指し、「授業づくり」「学級づくり」「学校づくり」のつながりを大切にしながら、育成を目指す3つの資質・能力①自分から行動する力【自立・主体性】②人を思いやる心【共生・理解想像】③心と体を通して考え抜く力【創造・試行錯誤】を全ての教育活動を通して、育み、高めてきた。また、相互のつながりが見える化されるように、各学級で中核に据える教科を決めてカリキュラム・マネジメント表の作成をしてきた。</p> <p>研究を進めていく中で、子どもの主体性を育むためには、教師の「出」と「待ち」や教師の立ち位置が重要であること、子ども同士が学び合える環境を日常的に整えたり授業でのグループ学習や共感の反応を増やしたりすること等の取り組みが、学級の温かい雰囲気づくりや子どもたちの学びを深めることにつながると実感できた。</p> <p>一方で、子ども同士の反応の不足、自分から話すことが苦手な子どもへの手立てや、子どもの目的意識の高まりなどに課題が見られた。これらの課題を改善していくことで子どもの学びはより深いものになると考える。</p> <p>2 今年度の研究の方向性について</p> <p>子どもたちの学校生活の大半は「授業時間」である。子どもの資質・能力を高めるために、われわれの研究を日常化していく鍵は、「授業づくりの充実」にあると考える。そこで、今年度も「授業づくり」「学級づくり」「学校づくり」のつながりを大切にしながら、副題に「子ども同士」を加え、子ども同士のつながりを土台にして、教師の授業力を高めていく。子ども同士のつながりを生み出す手立てとして、①子ども同士の関係づくり②きき合う関係づくり③教師の支援の在り方の3つに焦点を当てていく。</p> <p>具体的には、2つの方法を用いていく。1つ目は、指導案の形式や有無にとらわれない研究授業の実践である。2つ目は、教師の知識・技能を高めるための研修の実践である。全職員が、どちらかの方法を選択し、「授業づくり」ひいては「学級づくり」「学校づくり」につなげていきたいと考える。</p> <p>昨年度までの校内研究の取り組みを通して、「学級づくり」「学校づくり」のそれぞれ</p>		

の面で、子どもの育ちを支える「西小らしさ（成果）」があることも明らかになっている。これらの「西小らしさ」「西小の財産」は、今後も受け継いでいけるようにする。

西小らしさ（西小の財産）



研究の目標

【めざす子どもの学びの姿】

- ① 「自分の考えをもち、学び続ける子ども」（主体的な学びの姿）
⇒自分事として課題を捉え、思いや願い、考え、こだわりをもって前向きに学ぶ姿
学習に対して見通しをもち、粘り強く取り組んだり、学びを自己調整したりする姿
学習活動を振り返って自分の変容に気づき、学びを次につなげたり、広げたりしようとする姿
- ② 「かかわりながら、ともに学び合う子ども」（協働的な学びの姿）
⇒友達と協力したり協働したりすることで、学びを豊かにしようとする姿
友達、教職員や地域の人との対話を通して、自分の考えを広げたり、深めたりする姿
学びを豊かに表現したり、発信し合ったりすることで、学びを広げたり、深めたりする姿

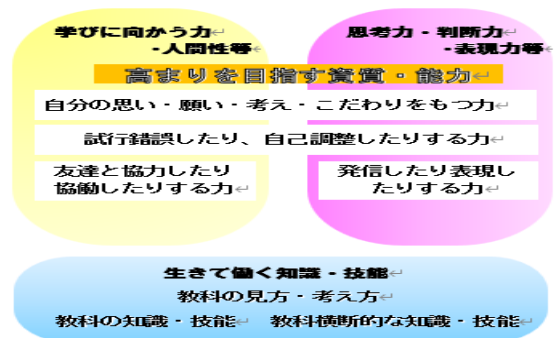
【教育活動全体を通して高まりを目指す資質・能力】

（主体的な学びの姿に関わって）

- 1) 自分の思い・願い・考え・こだわりをもつ力
- 2) 試行錯誤したり、自己調整したりする力

（協働的な学びの姿に関わって）

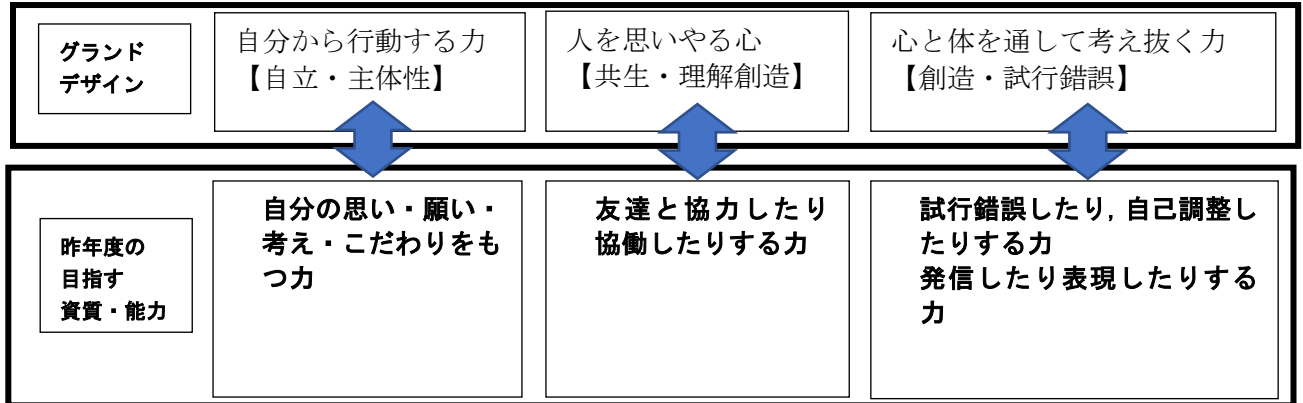
- 3) 友達と協力したり協働したりする力
- 4) 発信したり表現したりする力



「授業づくり」「学級づくり」「学校づくり」のつながりを大切にした教育活動全体を通して、1) 自分の思い・願い・考え・こだわりをもつ力、2) 試行錯誤したり、自己調整したりする力、3) 友達と協力したり協働したりする力、4) 発信したり表現したりする力の高まりを目指していく。

①「子どもの育ち（高まりを目指す資質・能力）」を真ん中に、「授業」「学級生活」「学校生活」のつながりを大切にしていく。

今年度も、3つの資質・能力の育成を目指していく。（図2 目指す資質・能力 参照）



「育成を目指す3つの資質・能力」は、1) 自分から行動する力【自立・主体性】 2) 人を思いやる心【共生・理解想像】 3) 心と体を通して考え抜く力【創造・試行錯誤】の3つの大きな視点で、子どもたちの実態や担任団の願いを基に、具体的な文言に表して設定した。児童の実態や集団の特性が異なることから、「育成を目指す3つの資質・能力」の具体的な文言については、「3つの力」を大枠に、各学級で設定し、全ての教育活動を通して、育み、高めていけるようにしていく。

今年度も、「授業づくり」「学級づくり」「学校づくり」の相互のつながりの見える化と日常的に活用していくためのツールとして「カリキュラム・マネジメント表」を作成する。

②「子ども同士つながり」を大事にした単元・授業づくり

ポイント1 児童の思いや願いから出発する学習課題

子どもたちの「これがやりたい」「こうなりたい」「できるようにになりたい」という思いや願いを大切にする。そのためにも、「憧れ」や「願い」をもったり、「問い」や「疑問」がうかんだりするような学習材や課題との出合わせ方を工夫していく。

ポイント2 「つながり」を大事にした学習活動の仕組み

子ども同士のつながり、子どもと教材とのつながり、子どもと教師とのつながりなど、学習の中の様々な「つながり」を大事にした授業づくりを計画していく。そのために、ペア、グループでの学習や交流の仕方など、学習方法を工夫していく。

ポイント3 次の学びにつなげるふりかえり

友達との対話の中で自分の考えを再検討・再構築したことや自らの学習をふりかえり、学習の成果を確かめ、次の学習へと広げていけるよう促す。また、自分の成長を実感することが、子どもたちの次の学習への粘り強い取り組みにつながり、よりよい学び手に成長できるように支援する。

【子ども同士のつながりを生み出すために大切にしたいこと】

①子ども同士の関係づくり

- ・友達の話聞きたい、分かってほしいという気持ちを醸成する。
- ・「そばにいつも仲間がいるから、いつでも話せる、困っても大丈夫。」「誰のどんな話にも、みんなで耳を傾ける」という集団をつくる。

②きき合う関係づくり

- ・相手の話じっくりと耳を傾ける姿、わからないことを腑に落ちるまで、相手に尋ねる姿、困った時に、他者の力を借りることが出来る姿を目指す。
- ・相手が困っていないのに教えるというのは、「きき合い」ではないと捉える。できない友だちの世話をするのではなく、一人一人が、「どうしてそう考えたの?」「今、どこまで考えた?」などと、相手を慮りながら、相手の思考や状態を押し量りきき合うことで、自分の理解が深まったり、止まっていた思考が進んだりするようなきき合う関係を目指す。

③教師の支援

- ・ペア、グループ、全体、ワールドカフェ、自由交流など、子どもの学びに応じて、目的は何か、どんな場面で必要か、そもそも必要かどうかを見極める。子どもの思考がストップしないように、教師は話をまとめずに、子どもと一緒に学びをつくっていくスタンスで支援する。

③子どもたちが創る「あたたかい学級」

ポイント1 みんなで目指す学級目標づくり

子どもたちが一人一人の強みやよさを活かしあい、お互いの心を温め合いながら、ともにめざすクラスづくりの重点を、子どもたちも担任も「目指したい!」と思える目的づくり、すなわち「学級目標づくり」と捉える。子どもたちが協力したり、助け合ったりする場面を意図的に設け、その成果や課題を「学級目標」に立ち返って振り返ることで個や集団の成長を目指していく。

ポイント2 児童が創る学級の暮らし・学級文化

学級の暮らしや文化を創る主体を「子どもたち」と捉え、子どもたちの積極的な参画による自律的・自治的な活動を大切にする。「どういう学級であってほしいか。」「そのためにはどのような活動やきまりごとを大切にするか?」「どういう行動や言動を増やしていきたいか?」といったことを話し合う自治活動を、学級文化を創造する活動の基盤とする。

ポイント3 担任一子どもの信頼ベースの関係づくり

「管理＝服従」の関係ではなく、「指導・援助＝信頼」の関係を目指す。子どもの「できているところ」「がんばっているところ」に目を向け、言葉をかけていくことで、自分らしく学習したり生活したりできるようにする。

ポイント4 子ども一子どもの共感的な関係づくり

担任と子どもの信頼ベースの関係を土台として、子どもたち同士も互いのよさや頑張りを認め合い、励まし合えるような関係づくりを目指していく。

④主体的に子どもたちが参画する学校づくり

ポイント1 児童が主体となって創り上げる行事

学校や学年の行事で目指す子どもの姿をイメージし、ねらいを設定する。行事の計画や運営に子どもたちが積極的に参画し、主体的に活動できるように支援・指導していく。

ポイント2 地域資源を十分に活用した教育活動の展開

保護者や地域の人、専門家などの人的な資源や、公民館、博物館などの社会教育施設や団体、その他、各種の団体などの組織的な資源を工夫して活用していく。

ポイント3 けやきっ子班活動の拡充とつながり

毎週木曜日を「けやきタイム」とし、けやきっ子班活動や学年、学級などでのつながりを深める活動を推進していく。

⑤「授業づくり」「学級づくり」「学校づくり」のつながりを見えるようにするツールとしてのカリキュラムマネジメント表の作成・活用

- カリキュラム・マネジメントについて視覚的な表を作成し、「授業」「学級」「学校」のつながりを大切にする。教師も子どもも、つながりを意識して活動に取り組む。
- 学習活動の中に、運動会やけやきっ子班活動などの学校行事を位置づける。資質・能力の高まりの機会として、子どもたちが積極的に参画し、ねらいをもって取り組めるようにする。
- 適宜、編集・改善をして作り替えていく。「指導の重点の見える化」を図り、研究の日常化に努める。また学習内容により軽重をつけた指導を行う。
- カリキュラム・マネジメント表を学級経営案と一体化することで、「授業づくり」「学級づくり」の計画を一元化し、全ての教育活動と「高まりを目指す資質・能力」とのつながりが見えやすく、より活用しやすいものにしていく。

研究の計画

項目	実施時期	担当・参加者	備考
全体授業研究会(大研)	9月～12月 (上学年部・下学年部)	学年部 1授業	事前研：学年部 授業参観・事後研：全職員 ※助言者として指導主事1名。
授業研究会(小研)	6月～1月 ※1回目大研以降	授業か 研修 どちらか を選択	事前研・授業参観・事後研は学年部を基本とする ※助言者はお招きしない。
互いに学び合う研修	6～12月		子ども同士のつながりに関する内容。全職員を対象とした学び合いの場を設ける。放課後やけやきタイムの時間。
研究推進委員会	4月 定例推進委員会 5月 主題・計画の提案 1月 指導案形式の検討 2月 研究のまとめ 研究紀要の作成 そのほか、必要なとき	研究推進委員	各学年の研究推進 ※情報発信、とりまとめ 指導主事派遣申請 (主任) 授業研の運営・記録 事前(後)研の運営・準備 校内研修会の運営・準備 研究紀要の提案(主任) 研究紀要の取りまとめ
研究全体会	4月 今年度の研究方針 5月 授業研の日程調整 7月 指導案形式の検討 12月 前期の反省 2月 反省・実践の整理 成果と課題の集約 研究紀要の作成 来年度の検討	全職員	推進委員会で提案・運営 《研究紀要》 ※各自ファイルに作成 ① 指導案 ② カリキュラム・マネジメント表 ③ まとめ
校内研修会	1回目：5月 (カリキュラム・マネジメント表の作成タイム) 2回目：6月 (お話タイム)	全職員	講師： 村山教育事務所指導主事 鈴木耕太郎先生 内容：子ども同士のつながり関すること

<様式>

学校名	山形市立東小学校	校長	石山 勝
		研究主任	秋山 駿
研究主題	『思いをもち 学び続ける子ども (2年次) 』		
研究主題設定の理由	<p>本校の学校教育目標は、「あかるく かしこく たくましい子どもの育成」である。学校のめざす子ども像は、「あかるい子・かしこい子・たくましい子」として、東小の子どもたちが、仲間を受け入れたり自分を表現したりしながら、自ら考え、判断し、よりよい課題解決に向けて主体的に取り組むことをめざしている。また、学校教育活動全体を通して、自分のよさや成長を実感し、これからの社会を生き抜く粘り強さ、しなやかさを身に付けていくことをめざしている。さらに、学校教育を通じてよりよい社会を創るという昨今の教育的背景を踏まえ、仲間と協働し、学び合う中で、基礎・基本の力を身に付け、学習者である子ども自らが、目標に向かって自己調整できるように取り組んでいかなければならないと考える。</p> <p>そこで、研究主題を上記の「思いをもち 学び続ける子ども」とし、子どもの思いを耕し、協働的な学びの中で、学習者自身が自己への気づきや次の学びへの期待を実感できるような教育活動を展開し、めざす子ども像にせまっていく。また、学ぶ心地よさを実感できる学習習慣づくり、子ども一人一人の個性を受け止めて適切な支援を探る子ども理解についても、学びの土台として継続的に取り組んでいく。</p> <p>昨年度まで大事にしてきたように、授業実践の中で見られる子どもの姿だけを追究するのではなく、日々の子どもの変化をとらえ、子どもの思いと照らし合わせながら行動の意味を考えていく必要がある。授業を通して安心して過ごせる学級経営を実践し、子どもたちの未来に役立つ主体性や協働性、自己調整力を高めるような教育活動を展開していきたいと考えている。</p> <p>この研究主題に込めた意味は、次のとおりである。</p> <p>「思い」……学習者である子ども自身が、人、もの、ことに向き合った時に感じること 「なぜだろう」、「どうなるのかな」、「もっと〇〇できるようにになりたい」、「こうやったらできそう」、「次は〇〇してみよう」等、疑問、質問、感想、こだわり等</p> <p>「学び続ける」…自分の弱みと強みを認識し、よりよい解決に向かう。あきらめずに粘り強く取り組む。 今までの学びから新たな課題、未知の学習・経験にも挑戦する。 自分の行動・言葉をふり返り、よりよい解決方法を思考する。 自分に合う学び方、自分を高める学び方に気づき、自分のよりよいくらしをつくる等</p> <p>子どもが学びを自分ごととして受け止め、強い思いを抱いた時、自ら対象と関わったり、必要感に駆られて交流したりするだろう。このような主体的で協働的な学びは、自分の学び方、あり方の気づきにつながっていく。そうした教育活動の積み重ねが、子どもの自己肯定感や実践力に結びついていくものと考えている。</p>		
研究の視点	<p>主体的な学び ・「なぜだろう」「もっと、〇〇できるようにになりたい」「できそう」「どうなるのかな」等、子どもたちが、自ら課題意識をもって解決に向かう。 ・よりよい課題解決に向けて、こだわりをもって取り組む。</p> <p>協働的な学び ・課題解決に向かう仲間との関わりの中で、必要な情報を収集・整理・分析する。 ・お互いの考えを分かりやすく伝え合う、じっくり受け止め合う。 ・人、もの、ことに向き合っている。 ・いろいろな表現方法で自分の考えを表す。</p> <p>視点1 子どもの思いを出発点にした課題</p> <p>視点2 必要感のある「人・もの・こと」との関わり</p> <p>視点3 学びの過程が分かり、成長が自覚できる ふりかえり</p> <p>*学びの土台* ・日々の授業を軸にした、安心して過ごせる学級経営。学年・学校全体で子どもを育てる視点。 ・育てたい資質・能力を明らかにした日々の授業づくり・授業実践・授業改善。 ・子ども自身が学習に見通しを持つことができる学習計画づくり。 ・子どもの姿を見取り、よりよい支援、価値づけを考える姿勢、とらえた姿の共有化。</p> <p>この研究主題を実現するために、次の3つの視点をもとに、全ての教育活動を実践していく。</p>		

*子どもの思いを出発点とした課題・・・学習の中で思いをもち、主体的に学ぶ。
 *必要感のある「人・もの・こと」とのかかわり・・・学習を広げ・深めるために「ひと・もの・こと」と関わる
 *学びの過程が分かり、成長を自覚できるふりかえり・・・自分が学んだこと、学びに向かう姿勢・過程、成長を表現する。

これらを重要な3要素ととらえて、実践を積み重ねていくことで、教職員全員で教育の方向性を確かめたり、学級づくりや授業づくり、支援のあり方や教師の意識について共通理解を図ったりすることができる考える。

研究の内容・方法

<研究の内容>

1 単元末・単元後・未来の子どもの姿のイメージ化

育てたい資質・能力を明らかにした日々の授業づくり・授業実践・授業改善

- ・「何を学び」「何ができるようにするのか」といっためざす子どもの姿を明らかにしながら実践にあたる。子どもたち自身が「実践・活用」できる力を身に付けるために、自分事になる課題づくり、実践・活用に結びつく学習過程の工夫、学習後の価値づけ・支援を繰り返しながら取り組んでいく。
- ・子どもたちが「どのような意識で学び、かかわっているのか」を考え、よりよい支援を探り、子ども主体の学びを目指していく。

2 子どもを見る視点の共有化

授業づくり=学級づくりを意識し、学年・学校全体で子どもを育てる。

- ・ありのままの子どもの姿を受け止め、その子どもなりのがんばり、よさを見る。
- ・子どもの姿を記録し、語り合い、子どもの変容をとらえてよりよい支援を考える。(授業研究会後の事後研究会、教科担任制での連携、学校全体での取り組みの共有化)
- ・子どもたちが、かかわることのよさを実感でき、安心して過ごせる学級経営、学年で子どもを育てる学年経営に取り組む。授業と学級経営は切り離すものではなく、授業を通して学級経営を行っていく。

<研究の方法>

(1) 子どもの育ちに結びつく授業・単元づくりのあり方や教師の支援の仕方を学ぶ。

① 提案授業 ～子どもの姿を見取り、よりよい支援を探る～

研究中心教科は学校としては設定せず、授業者の強みや学年として目指す姿に強く寄与する科目を設定する。教員同士の学びの共有化を大事にし、全員参加型の提案授業研究会を実施していく。
 学年部を中心に事前研究会を行い、授業を提案する。事前研究会は、以下の内容で2回行う。

事前研究会①:子どもの学びの姿をもとに、めざす子どもの姿、つけたい資質・能力について話し合い、授業・単元構想をもつ。

事前研究会②:予想される子どもの思考と指導事項について考え、指導案を検討する。

事前研究会①は学年部 +研究主任・副主任 ②は①に加えて、校長、教頭、教務も入る。

提案授業は、全職員の参加を基本とし、特定の子どものグループに注目して、学びの姿を見取るよう努める。

事後研究会では、各自が見取った子どもの姿を根拠にししながら、成果と課題を挙げ、次の日からの実践につなげる。

② 全員1授業(マイ授業) ～目指す子どもの姿をより具体的にイメージし、日々の実践の方向性を探る～

提案授業者以外が行う学年部内での授業研究会。事前・事後研究会は、学年部の研究推進委員が中心となり、学年部で行う。事後研究会で話題になったことを全体に共有化していく。

実施後には、提案授業のふりかえりを作成する。

3つの視点を意識し、日々の授業の実践にあたる。教材研究や教材の開発等、個人内にとどまらず、学年間や学年部間、教科担任間で連携しながら授業づくりを行う。提案授業や1授業で発行された「校内研だより」を読み、自分の授業実践に活用していく。積極的な授業参観のため、職員室のホワイトボードを活用し、マイ授業や提案授業・自身が特に力を入れて取り組みたいと考えている実践に関わる情報の開示を行う。

(2) 研究の日常化(育ちの追究の日常化)を図るために、学校行事、学年での活動、総合的な学習の時間、普段の学級・学年経営等における、よりよい教師の支援を探る。

①学校行事、学年での活動、総合的な学習の時間(生活科)などにおける育ちの追究

学年担任団で子どもの学びの姿を把握し、育てたい資質・能力を考え「めざす子どもの姿」をイメージしていく。研究主題・3つの視点をもとに、「活動内容」、「教師の支援(特に意識付けを重視)」を検討しながら実践にあたる。全職員が全校児童の担任という意識を持ち、子どもの主体的な学びや育ちを見取り、担任と共有する習慣を作る。

②子どもの育ちや教師の支援のあり方についての共有化

授業研究会だけでなく、日常的に子どもの学びの姿を記録していき、子どもの変容をとらえられるようにする。特別支援教育部とも連携を図り、子ども理解に努める。学習指導部と連携を図り、学力向上のアクションプランを取り入れながら、指導・支援を工夫していく。学校・学年の活動において育てたい資質・能力、「めざす子どもの姿」、教師の支援(意識)のあり方について、3つの視点にもとづいて研究全体会で共有する。各活動の実践後は、子どもの学びの姿をふり返り、子どもの育ちを言語化して蓄積する。次のよりよい支援を考えていくようにする。

学 校 名	令和8年度 山形市立鈴川小学校	校 長	金山 治行
	山形市鈴川町三丁目7番10号 TEL622-2158 FAX633-9571	研究主任	横山 洸
研 究 主 題	<p>「気づき、考え、働きかけ、受けとめる」子どもの育成（第四次）</p> <p>—子どもが主体的に学びをつくり、学びを調整することで 「ともに、暮らしをつくる」—</p>		
研 究 主 題 設 定 の 理 由 と 目 標	<p>子どもたちが人生を歩む上で様々な問題場面に出会う。それらの問題を解決するために、問題を正確に把握し（気づき）自分事としてめあて（課題）をもって問題解決に挑む主体的な態度（考え）が必要であると考え。さらに、自分一人では到底解決できない問題は、専門家や仲間と解決しようとする協働的な態度（働きかけ）も必要だろう。そして、自分なりに振り返り、その問題解決の方法や最適解を修正・更新（受け止め）し、暮らしをつくる人になってほしいと願っている。</p> <p>昨年度の研究のまとめにおいて、「3つの具体的な視点」に基づき研究を進めたが、以下の点について十分な成果が得られなかったという課題がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの主体性：授業が「子ども主体の学び」になっていたか、その判断が難しい。 ・子どもの姿の把握：「気づき、考え、働きかけ、受けとめる子どもの姿」といった、子ども主体の学びを体現する具体的な姿や授業のあり方が明確になっていない。 <p>それらをふまえ、今年度は授業づくりの具体的な視点を定める前に、研究テーマの根本的な確認と深掘りを行いたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究テーマ（変更なし）：「気づき・考え・働きかけ・受け止める」子どもの育成 ・研究の焦点 <ol style="list-style-type: none"> 1. 「子どもが主体の学び」における子どもの姿とそのための手立て 2. 「自己調整力」が身についた子どもの姿とそのための手立て <p>今年度は、この2つに焦点を当てて探究を進め、「子どもが主体となる授業での子どもの姿」とそのための「教師の具体的な手立て」を明確にしていく研究を目指していきたい。</p> <p>このことは、令和の日本型教育に示されている「個別最適な学び・協働的な学び」にもつながるとともに、自己調整力を養うこともできる。</p> <p>これらの研究を通して、令和の日本型学校教育の充実を推進し、「気づき・考え・働きかけ・受け止める」子どもの育成を目指して校内研究を進めていく。そして、全ての子どもを「ともに、暮らしをつくる子ども」に育てていきたい。</p>		

研究の内容及び方法	<p>研究の内容</p> <p>1 子ども主体の学びの研究をする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもは有能な学習者にとらえ→自ら学ぶ→学習者中心に授業を作る ・具体的な姿を通して実践研究を積み上げていく。 ・子どもの姿をもとにした事後研究会とする。 <p>2 職員の協働研究を大切にする</p> <p>① 学年部で事前研究・研究授業・事後研究を推進する。</p> <p>② 授業者とその学級の児童の姿から学ぶ意識をもつ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参観者は、学習活動案・研究授業・事後研究会で、授業者と児童の姿から成果を見出し、日頃の実践に活かすようにする。授業者は、授業後と事後研究会後で、省察した自分の成果や課題を子どもの姿から見出し、日頃の実践で活かしたり解決したりする。 <p>③ 学校生活全ての活動を校内研究の考え方で実践していく。(行事も)</p> <p>④ 学年で単元をそろえる。</p> <p>⑤ 子どもの姿、上手くいかなかったことから学ぶ(子どもがくいつかなかったなど)</p> <p>⑥ 1年に1回の研究だけでなく、何回か授業を見せ合っていく。(無理なく、指導案なしでもOK、挑戦してみるでもOK)</p> <p>3 令和の日本型学校教育への移行</p> <p>① 能動的な学習の文脈(主体的・対話的で深い学び)を意識した単元づくり。</p> <p>② 一人一人に応じた学習の文脈(個別最適な学びと協働的な学び)を大切にして個別最適な学び・指導の個別化・学習の個性化を探究していく。</p> <p>③ 行事総合ではなく、子ども主体の探究のサイクルを回し探究的思考力を育成する総合・生活をする学習の流れ</p> <p>① 情報の受信(インプット) → 情報を主体的に受信したくなる課題設定、課題解決へ向かう (実体験)</p> <p>② 情報の発信(アウトプット) → 表出することで自覚化、異なる多様な他者の情報の分析 (言語化・視覚化)</p> <p>③ 情報の再構築 → 再思考・更新・修正・一般化・概念化 まとめとふり返りを大切にしていく (言語化・視覚化)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各教科等の「見方・考え方」を働かせた深い学びについて、まとめることができる ・児童が学習のまとめやふり返りを自らの言葉で表現できるようにする。 <p>(振り返り→気づき→課題設定→情報収集) 統合化メタ認知 学習の構造化・連続性・日々の暮らしへ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度野口先生から教えていただいた算数の授業の流れ 問題→課題→見通し(既習から)→めあて(個人)→課題解決(個人)→共有→振り返り(自己調整力) ・日ごろから課題やめあて、まとめ、振り返りを考える、共有する時間をとる <p>*学習を子ども主体にし、見通し、振り返りの時間をとることで自己調整力を養う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大研は基本算数で行う。(変更可) <p>4 指導案・研究のまとめについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導案は 形式自由(A4一枚でも可) 枠が欲しい場合はフォルダからとる。 (単元計画、大切にしてきたこと、つけたい力や目指す姿に向かってどのような手立てを取ってきたか、これまでの過程、活動の様子、写真などぜひ) ・授業後まとめを授業者がつくり、紙で配付。データも研究のフォルダに入れる。形式自由 ・紀要なし
-----------	---

研究の計画

4 研究の計画・組織
(1) 校内研究会の全体計画

	日程	内容(研究授業学級・授業者)	担当	アドバイザー
第1回	5月1日(金)	主題・計画の提案	推進委員	
第2回	5月8日(金)	カリキュラムデザイン作成	推進委員	
第3回	7月22日(水)	授業研究会【大研①】	2年	野口先生
第4回	11月5日(木)	授業研究会【大研②】	4年	野口先生
第5回	月 日()	授業研究会【大研③】	5年	野口先生
第7回	12月16日(水)	研究の成果と課題について	各学年	
第8回	1月22日(金)	全体の成果と課題と来年の方向性	推進委員	
	月 日()	幼保小連携 鈴川幼稚園の先生方授業参観(全学年) 鈴川幼稚園の先生方と授業について語る会		

- ※ 同学年の学級は、同じ教科・同じ単元の授業を行い、授業創りに協働的に研究を行う。
 授業研究会を学年部(低・中・高)で行う。【大研】は学年部で1授業提案。【大研】ではない学年は中研。【大研】【中研】以外の先生は小研として授業を行う。
- ・中研はできるときに設定する6月までに決める。
 - ・一か月前に研究授業の日程(事前研日、授業日、事後研日)を決め、教務へ伝え、週予定で全員に周知する。
 - ・事前研は単元が始まる前に行う。
 - ・個別学級は授業を全員でつくり、代表者が授業する(知的1、情緒1など)大研はしない

(2) 研究推進委員について

校長	教頭	1年	2年	3年	4年	5年	6年	個別	教務
金山	有川	横山	山科	荒井	穂積	玉城	鈴木	佐藤貴	佐藤保
顧問	顧問	主任	次第	副主任	会場	記録	グループ	用具	日程

- ・研究主任 横山 光
- ・副研究主任 荒井 敦子(事後研運営)…次第、協議の視点
- ・会場準備
- ・用具準備(マジック・画用紙・マグネット・付箋)
- ・記録写真

学校名	山形市立千歳小学校	校長	森谷 弘昭
		研究主任	門間 祐
研究主題	<p style="text-align: center;">自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、 自ら行動する子供の育成（3年次） －子供が愉しむ学習プロセスに着目して－</p>		
研究主題設定の理由	<p>本校の今年度の教育目標は次のものである。</p> <p style="text-align: center;">自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供の育成</p> <p>大小関係なく、子供の自己決定の場を増やすことで、自信をつけたり主体性を伸ばしたりする。自分に解決する力や現状を変える力があることを何度も自覚することで、自分は社会や世界を変えていくことのできる存在だと思ったり、社会を変えるのは自分だと考えたりすることにつながる。その結果、未来や自分に夢や希望をもつ。このような考えから設定した教育目標である。 この教育目標を受けて、研究主題を次のように設定した。</p> <p style="text-align: center;">自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供の育成（3年次）</p> <p>教育目標の達成、つまり、「自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供」を育てるために、我々教師は学ばなければならない。教師の学びと子供の学びについて以下の指摘がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデルである。 ・教師の学びの姿は、子供たちの学びの相似形である。 <p>教師の学ぶ姿勢や学び方が、子供のそれにも影響を及ぼすとともに、豊かに深く学ぶ教師のもとで育つ子供もまた、豊かに深く学ぶということである。よって、上記の目標達成に向けて、教師が学ぶことは必要条件といえる。</p> <p>さらに、教師自身が問いを立て実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく探究的な学びを教師自らがデザインしていくことの必要性も指摘されている。まさに、本校で育成を目指している子供の姿と一致する。これを踏まえて、校内研究をトップダウンなるものではなく、各教師の興味や課題、キャリアステージ等に応じて研究内容を決められるよう、小集団での活動を基本とする。ここで根底にあるのは、個人の思いに基づく学びである。小集団での研究活動において、視座を変えてみることや、異なる視点の獲得、視野の拡張が期待でき、それによって個人の学びがより豊かになり、より深まるだろう。さらに、ある枠組みから検討したり、理想と実態、理論と実際の乖離を小さくしたり、自身の授業観や指導観を必要に応じて更新したりすることも想定される。ここで、個人の思いや学びが淘汰されることのないよう留意したい。前述したトップダウンが、小集団内でも起こらないようにしたいのである。</p> <p>ここで、日本の子供たちの特徴のうち、興味深いデータを参照しよう。OECD による 15 歳の生徒を対象に行われた意識調査によると、日本の生徒は外国の生徒と比較して、失敗への恐れが大きいようである。現在、VUCA と呼ばれていることからわかるように、子供たちが生きていく社会において、未知の状況にどう対応できるかがカギとなる。失敗を恐れて何も行動できない彼らは、複雑な課題や未知</p>		

の問題に対応することができるのだろうか。

また、山形県の子供たちの興味深いデータも参照しよう。全国学力・学習状況調査で、国語・算数の調査結果だけでなく、質問紙調査も行われている。最近の調査で、山形県小学校の国語・算数の学力は他の自治体と比べて低い結果であったが、一方、解答に時間が余ったと回答している子供は全国でトップレベルに高い結果であった。国語も算数も共に、である。このことから、山形県の子供たちは、以下の特徴があると推察した。

- ・時間がかかりそうな問題には取り組まない。
- ・見たことのない問題へのアプローチが苦手。
- ・解決することをあきらめるのが比較的早い。
- ・時間が余っても、解決できなかった問題への再チャレンジはしない。

以上の調査結果を併せて考えると、山形県の子供たちの学習観は、「できる・できない」にとどまっているのではないだろうか。あるいは、そのような学習観にしているのは、教師の授業観に起因しているとも思われる。もちろん、できないことができるようになる喜びも大切である。ただ、「できる・できない」を重視した学習観では、できないことはやらない、できないことがこわい、難しそうなことは最初から挑戦しない、できることだけやる、できなそうならあきらめる、失敗はいけないことだ、ということになる恐れがある。これでは、前述した VUCA 時代で活躍することはできない。

そこで、研究の副題として、以下を設定した。

－子供が愉しむ学習プロセスに着目して－

「愉しむ」とは、心から満足し、過程や体験を深く味わうことであり、内面的な喜びや充実感があるとき、趣味へ没頭しているときに使われる言葉である。たとえ、うまくできなかったとしても、その活動のプロセスで満足したり、充実感を味わったり、没頭したりすることはある。

授業で納得いく結論が出せず、授業が終わっても黒板の前で議論している子供がいる。周りの友達は公式ですぐに答えを求めても、自分は絵をかいたり、ひたすらたし算を繰り返したりして答えにたどり着く子供がいる。ノートや教科書にあとが残るぐらい考え続けている子供がいる。跳び箱をとび越えられなくとも、何度も挑戦して息を切らしている子供がいる。休み時間にリコーダーの練習をして、できるようになってからもずっと演奏している子供がいる。友達と帰るまで歌い続けている子供もいる。後転ができるようになった友達を見て大喜びしている子供がいる。

このように子供が愉しむ学習プロセスが実現するよう授業に取り組み、あるいは子供が愉しんでいる姿に着目して授業について議論し、もっと子供が愉しむ授業を考える。このような教師の取り組みや意識は、できる・できないを越えた学習観を子供がもつことにつながるはずである。そして、失敗を恐れず、あきらめず、強い気持ちで学び続ける人間になるだろう。考える幅が広がり、あきらめる・やらないという選択肢をなくし、前向きな実行へと進んでいく。

改めて、本校の研究主題は以下の通りである。

自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供の育成 －子供が愉しむ学習プロセスに着目して－

<p>研究の内容と方法</p>	<p>子供が愉しむ学習を重視し、自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供の育成に向けて、次の通り研究活動に取り組んでいく。</p> <p>(1) グループ編成 各教師は、自身の興味や課題等に基づいて、問いを立て、実践を積み重ねる。子供に求められている主体的・探究的な学びを教師が実践し、協働的に研究を進める。 ①各教師で、重点教科や子供が愉しむための授業を考える。 ②研究推進委員で各教師の重点教科・学年・経験年数等を考慮して、グループを編成する。</p> <p>(2) グループ単位で研究に取り組む どのように研究を進めていくかを具体的に計画するのは、各グループを構成する教師である。例えば、次のような計画が想定される。 【○○先生の10月の研究授業に向けて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月に□□先生の授業研究、7月に△△先生の授業研究を行う。 ・夏休みに、学習指導案作成のため関連する文献研究や諸研修会への参加を各々行い、夏休み明けに学びを共有する。 ・9月に著名な実践家の授業DVD映像を見て、授業構成や子供との関わり方を学ぶ。 <p>これは一例である。各グループの思いや学びたいことに基づいて計画され、日常的な実践の積み重ねが前提であることは言うまでもない。後述する研究の計画は、校内全体として研究の時間を設けたものである。各グループが必要に応じて実践の場を設け、校内研究という枠に収まらず日常の実践が研究そのものになることを想定している。</p> <p>(3) 各グループの研究の現在の位置の把握・校内での共通の学びの生成のための校内授業研究会 グループでの研究を進めていく中で、視野が狭くならないように、グループでの学びを本校での学びという共通したものとするために、校内授業研究会を行う。これは、校内研究に参加する者全員が対象の授業研究会である。各学期1回の全3回を想定している。</p>
<p>研究の計画</p>	<p>以下は、全体で行われる大まかな計画である。この他に、各グループでの研究活動に取り組む。校内授業研究会では、必要に応じて外部へ指導・助言を依頼する。また、基本的に各月一回はグループで活動するよう努める。</p> <p>4月 研究の方向性とグループ決定 5月 重点指導計画や学習年間計画の作成 グループでの研究計画立案 6月 校内授業研究会① 7月 QUテストの結果から考える学級経営 8月 学力テストの結果から考える授業改善 11月 校内授業研究会② 1月 校内授業研究会③ 2月 研究のまとめ</p>

<様式>

学 校 名	山形市立金井小学校 山形市陣場三丁目 7 番 60 号 TEL 681-8471 FAX 684-6768	校 長	黒田 靖彦
		研究主任	間 彩菜
研 究 主 題	自ら課題を解決する子どもの育成（3年次） —主体的に学び続ける子どもの姿を求めて—		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>令和6年度に、本校では9年ぶりに研究主題を見直し、「自ら課題を解決する子どもの育成」とした。更新の理由は、AIの発達とともに日々進化する予測不能な世の中「Society5.0」を生きていくためには、自ら課題を見つけ解決し、未来を主体的に切り拓いていく資質・能力の育成が子ども達に必要不可欠だからである。</p> <p>また、副題を「主体的に学び続ける子どもの姿を求めて」と設定し、子ども達の学びを「自分事」にさせ、自ら問いを立て、見通しをもち、課題解決をして振り返るといふ、学びの過程を子ども自身が丁寧に踏みながら、主体的に課題解決できるよう授業を改善していくこととした。</p> <p>これらの授業改善を通した日々の営みにより、子ども達が主体的に学び続けることで自ら課題を解決する子どもを育成することができると考えている。</p>		
今 年 度 の 研 究 に つ い て	<p>令和7年度は、子ども一人一人が問いをもち、見通しをもって主体的に課題解決に取り組むために、「学びの過程」を明確に位置付けた授業づくりに取り組んだ。</p> <p>各授業者が「学びの過程」を明確に位置付けた授業づくりに取り組み、子ども達が主体的に課題解決に取り組む姿の実現を目指した。その結果、主体的な姿が見られるようになってきた一方、「自分の考えを発表しようとしなない」「自分の考えを上手く表現できない」など自己表現に課題がある様子も見られた。昨年度の学校評価アンケートでも「自分の考えを発表している」の項目は53%と低く、主体的・対話的で深い学びの実現のためにも表現力の向上をはかる必要があると考えた。</p> <p>そこで、今年度は令和7年度のテーマをさらに発展させ、子ども一人一人が問いをもち、見通しをもって主体的に課題解決に取り組むために、子どもの思考を捉えた上で、「学びの過程」を明確に位置付けた授業づくりに取り組んでいく。「学びの過程」という枠組みに子どもを当てはめていくのではなく、子ども自身が【課題の設定】【見通し】【課題解決】【振り返り】の4つの「学びの過程」を踏みながら学ぶことができるよう、子どもの思考の流れを捉えることに焦点化する必要があると考えた。そのため、「子どもの思考を捉えた上で」という言葉を加えた。さらに、【課題解決】の場面に重点を置き、子どもが主体的に考え、交流し、表現する学習活動を十分に行うことで、学力の向上を図っていきたい。</p>		

研究の重点	<p>重点① 子ども一人一人が問いをもち、見通しをもって主体的に課題解決に取り組むために、子どもの問いが内在する学習課題の設定を行うこと。</p> <p>子ども達にとって、「分かった」「できた」という実感は学びの大きな原動力になり、「もっとやりたい」「次はこうしてみよう」という意欲につながる。加えて、「いっぱい考えて疲れた」「なんかもやもやする」「上手くいなくてくやしい」など、学習課題に自分事として向き合ったからこそ感じられる気持ちも大切にしたい。このような姿を目指すには、学習課題との出会いが大切になると考えるため、「なぜだろうか」「どうしたら～だろうか」など、子どもの問いが内在した課題を設定していきたい。</p> <p>重点② 課題解決のための十分な思考と必要感のある交流を取り入れた学習活動を行うこと。</p> <p>子ども達が主体的に課題解決に取り組むために、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・十分な思考の時間を確保し、どうすれば課題を解決できるのか、学習課題に対してじっくり考え、課題と向き合う姿を目指す。 ・関わらせるための交流から、子ども達が目的をもった質の高い交流への転換を図る。例えば、「課題解決に必要な交流」「グループの考えをまとめるための交流」など、友達と関わりたいと思う子どもの必要感から自然発生的に交流する姿を目指す。 <p>思考・交流・表現の3つの要素はそれぞれ独立したものではなく、思考の過程で交流が生まれたり、交流の中で表現する必要性が生まれたりという関連性や、3つの要素の間をいったりきたりしながら学習する子どもの姿があると考え。自己表現が得意ではないという本校の子ども達の課題を踏まえ、ノートに自分の考えを書く、友達との交流の中で自分の考えを伝える、みんなの前で発表するなど表現する機会も大切にしていきたい。全ての授業・単元の中で3つの要素を網羅することは難しいが、学習内容によって軽重を付けながら授業づくりに取り組み、子ども達の学びを確かなものにしていきたい。</p>
	研究の方法

研究の計画

月	日	曜日	予定	内容
4	14	火	推進委員会	全体会①に向けて
4	16	木	推進委員会	全体会①に向けて
4	20	月	研究全体会①	研究主題・大研授業者・小研日程
4	23	木	推進委員会	全体会①を受けて・全体会②に向けて
5	7	木	推進委員会	全体会②に向けて
5	8	金	研究全体会②	事前研・事後研・指導案提案
5	14	木	推進委員会	提案授業に向けて
5	21	木	推進委員会	提案授業に向けて
5	25	月	提案授業	授業者：2-1 岡崎 教科：算数
6	3	水	推進委員会	大研①に向けて
6	15	月	大研①	授業者：4-2 荒木 教科：算数
7	2	木	推進委員会	大研②に向けて
7	9	木	推進委員会	大研②に向けて
7	13	月	大研②	授業者：なのはな 2 齋藤 教科：算数
7	27	月	研究全体会③	振り返り・実践報告会
9	3	木	推進委員会	大研③に向けて
10	15	木	推進委員会	大研③に向けて
11	2	月	大研③	授業者：2-4 渡邊 教科：国語
11	12	木	推進委員会	大研④に向けて
11	26	木	推進委員会	大研④に向けて
12	7	月	大研④	授業者：5-2 渋江 教科：国語
1	14	木	推進委員会	今年度の研究の成果と課題
2	18	木	推進委員会	今年度の研究の成果と課題
2	22	月	研究全体会④	今年度の成果と課題・次年度の研究に向けて

学 校 名	山形市立大郷小学校 山形市大字中野 506 番地 TEL 681-8472 FAX 684-6292	校 長	沼澤 周一
		研究主任	東海林 陽子
研 究 主 題	『自ら学びに向かう子どもの育成』(2年次) ～価値ある学びとかかわりを通して～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>本校の子どもたちは、とても素直で、前向きに学校生活を過ごしている。また、高学年の子どもたちを中心に、自分たちでくらしや学びを切り拓いていこうとする気運も高まってきている。一方で、自分の考えで行動に移すことに自信がもてない傾向が強い。そのため、学びや活動に対する子どものやりがい高め、活動プロセスにおける自分の変容に気付き、自信を高められるように支援していかなければならない。年間を通して、「子どもの育ち」を学校全体でマネジメントしていく必要があると考える。</p> <p>授業づくりでは、研究会を通して、学習に向かう意欲を育み、見通しをもって活動を進める力、相手の思いに寄り添って聴く力を高めていくことが、子どもたちが主体的に学ぶ上で大切であるとわかってきた。</p> <p>また、学校行事への取り組みに関しては、目指す姿や取り組み方、支援の仕方を全職員で具体的に話し合うことで、子どもたちがやりがいを感じ、自分たちで活動を進められるようになり、力を伸ばす取り組みになってきている。</p> <p>そこで令和8年度は、「自ら学びに向かう子どもの育成」を目指し、教科・総合的な学習や学校行事、児童会活動等で、子どもが学ぶことに価値を見出し、仲間と高め合いながら自身の成長を実感できるような授業や教師の支援のあり方について、さらに追究することにした。</p> <p>子どもたちの学びが、「できた」「わかった」「次もできるかもしれない」「くやしいから次こそは！」と、より主体的に紡がれていくように実践を重ね、教育の営みを確立していくことで、研究主題に繋がっていくものと考え。</p>		
研 究 の 目 標	子どもの実態や学習指導要領の趣旨を踏まえ、子どもの育ちに向け「自ら進んで学びに向かう主体的な子どもの育成」について、日常的に追究していく。		
研 究 の 内 容	<p>(1)「価値ある学び」づくり</p> <p>単元づくり・授業づくりのはじめの一步は、「何を教えるか」ではなく、「<u>子どもの実態から</u>、どんな教師の願いを描くか」であり、「<u>子どもの興味・関心から</u>、どんな学習活動を展開していくか」である。</p> <p>本校では「授業を通して身につけるべき資質・能力」「単元・学習を通して学びとること、育成される力、成長した姿」を子ども自身が実感できる授業づくりに取り組んでいく。そして、それが「もっとやってみたい」「これができたのだから次は・・・」などの新しい課題発見にもつながり、新たな学びの価値が創造されると考えている。</p> <p>子どもの実態を意識しつつ、子どもたちにやりがいや達成感のある学習を積み重ねていくことが重要と捉える。</p>		

(2)「かかわり」を通して

学習では、個々の学びの保障をしっかり行い、個で考えたり、考えを整理したり、自分の意見として整理する時間の確保を行う。その中で、「子どもたち自身」が「他の人の考えを知りたい」「自分の考えについて意見をもらいたい」「自分の考えをより良いものにするために、話し合う時間が欲しい」と感じられる学習場面や課題の設定、「話し合わない到達できないレベルの課題」など、仲間等とかかわり合いながら課題解決に向かおうとする意欲をもたせるようにする。また、かかわりを通してプラスになった成功体験や、問題・課題の解決方法としての有効性の理解を図る。

以上をかかわりでの大切な要素として捉え、全ての教育活動を創造する際に活用する。

(3)「主体性」を高める具体的な手立て

①学ぶ意欲を高める

- ・「もっと知りたい」「もっと調べたい」「確かめたい」など、思いを十分に引き出すような教師の学習のきっかけ、活動づくりをおこなう。
- ・学習が自分事(自分の中で学ぶ意義や価値を見出すこと)になるための働きかけをしていく。
- ・学習のゴールの姿(何ができるようになるか)を子どもたちと共有する。ゴールの姿は活動の中で生まれる課題と共に変容していくものと認識する。ただし、学級カリキュラムの付けたい力をねらった活動になっているか確認する。

□基礎学力の充実を図り、学習を支える土台作りにも注力する。(朝読書の実施、学習習慣の確立)

②学習への見通しをもたせる

- ・子どもの気付きや疑問をもとに学習課題をつくる。
- ・活動のゴールの姿(何ができるようになるか)を子どもと一緒に考え、具体的に共有する。
- ・「わかった」「できた」「できるようになった」などの小さな成功体験を積み上げ、学習への意欲が高まるようにする。
- ・既習事項との結びつきを考えさせる。

③相手の思いに寄り添って聴く力、話し合う力を高める

- ・話し合ったからわかった、新たな考えが広がったなど、話し合うことで得たよい経験を振り返りで価値付けていく。
- ・高め合う集団(クラス)を自分たちの手でつくっていくことを意識付ける。

研究の方法

(1) 授業における自ら学びに向かう子どもの追究

①「校内授業研究会」

研究授業は一人一授業とし、できる限り全員が参加する。研究の窓口となる教科は絞らず、課題づくり、個の学びの保障、仲間等とのかかわり、個の学びの整理、振り返りなど、学習への見通しがもてるような実践を積み上げる。事前研究会は、授業者が自ら設定し、OJTによって「主体性を高める」ことを主軸に据えた授業づくりに重点をおく。事後研究会の運営については、研究推進委員が中心となっていく。

②「七中校区 4校合同授業研修会」

中学校区を丸抱えにして、『セブン・プライド』の「三、授業に集中し、着実な努力をします！」に沿って、「子どもの育ち」を推進していく。子どもが本気になるような価値ある学びの創造や教師の支援について、4校で学びを深めていく。

(2) 日常的な教育活動における自ら学びに向かう子どもの追究

①全教育活動を通して実践研究

学校行事や児童会活動等では、子どもたちが課題意識をもって、自分たちの手で活動を考え、互いに関わりながら取り組んでいけるようにしたい。それには、大まかな活動計画を子どもと一緒に考え、子どもたち自身が活動に見通しをもって臨めるよう支援するなど、具体的な教師の支援や児童理解のあり方について教職員OJTにより学び合っていく。

②「カリキュラム・マネジメント」(以下、「カリマネ」と表記)の推進

カリマネは、日常的に「子どもの育ちをマネジメントすること」である。子どもにとって、やりがいのある活動を通年にわたって繋げていけるように、「教育課程」並びに「学級経営案(学級カリキュラム)」について、十分に吟味して作成しなければならない。また、学級経営案(学級カリキュラム)は、年度当初の「紙キュラム」から、教育活動が進むにつれてPDCAサイクルによる加除修正を加え、年度末に完成を迎えるようなイメージで取り組んでいく。子どもの育ちは「日常の教育活動」にあると捉えている。

③「生活科」「総合的な学習の時間」の実践研究

カリマネの中核となる教科・領域は生活科・総合的な活動であり、子どもの育ちの実現には欠かすことのできない教育活動である。子どもにとってやりがいのある活動にするには、「単元の立ち上げ」で、学習に向かう意欲や思いを十分に耕し、大まかな学習の流れを子どもたちと共に計画するなど、子どもが「自ら学びに向かいたくなるための教師の支援」が重要となる。

研究の計画

月	活動内容	主な研究内容
4	◆研究推進委員会	・研究の構想について ・「運動会」コンセプトの検討
5	◆研究全体会	・研究計画、提案授業、指導案 等
6	◆4校合同授業研修会	・授業研修会に向けた授業づくり (教材、教具、授業構想、指導案の作成について)
7	◆研究推進委員会	・「全校縦割り地区探訪オリエンテーリング」 コンセプトの検討 ・研究の方向性の確認
8	★授業研究会	・2学期以降の授業づくりについて共通理解を図る。
9		★ICTを効果的に用いた授業の実践に関わる研修会 (適宜)
10		
11		
12	◆研究推進委員会	・今年度の総括と研究紀要作成について ・「6年生を送る会」コンセプトの検討
1	◆研究全体会 ◆研究推進委員会	・学年部ごとの研究の成果と課題共通理解 ・次年度に向けての方向性
2	◆研究全体会	・次年度に向けての共通理解

※研究推進委員は、行事担当者とともに子ども主体の活動について検討する。

<様式>

学校名	山形市立明治小学校	校長	中村 昌彦
	山形市大字灰塚454 TEL 681-81473 FAX 684-6879	研究主任	佐藤 綾
研究主題	自ら考え、粘り強く課題に向かい、高みを目指す子供の育成 (1年次)		
研究主題設定の理由	<p>本校の学校教育目標は、『郷土を愛し、仲間と共に、夢をもって生きる子供の育成』である。明治小の子供達が、6年間同じ仲間と学んでいくことの強みを生かし、仲間と心を通わせながら、学びを積み重ね、学んだことを生かし、自分たちで考え、学びを、生活を、学校を創っていくことをめざしている。</p> <p>児童の実態から、研究主題を「自ら考え、粘り強く課題に向かい、高みを目指す子供の育成」とし、自分たちの生活や経験の中から課題を見出し、共に解決しようとしながら、更にこれからの自分たちの生活や学習への活用力を高めるような教育活動を展開していきたいと考えた。</p> <p>研究主題に掲げた「粘り強く課題に向かう」姿とは、「やってみたい」「分かってほしい」「解決したい」など、子供自身に湧き上がった思いを原動力として能動的・協働的に問題解決に向かう過程で見せる子供の姿をとらえている。現在の本校の児童の実態からも、学習者中心の視点を大切に、自分の思いをもとに探究を続ける力を育て、資質・能力を発揮しながら学びを深めている姿をめざす。また、「高みを目指す子供」とは、失敗や間違いをお互いの学びのチャンスと捉えられる温かく安心した雰囲気、力を合わせる共生的な関係の中で、ふり返りを通して、学びを広げたり深めたりする子供の姿である。このような子供の姿を目指し、本研究の主題を設定した。</p>		
研究の目標	<p>①全ての教育活動において 「学びのふり返りの工夫」…なりたい自分を自覚し、見通しをもち、「自分事」の学びを通して高みを目指していく。</p> <p>②授業改善～単元内自由進度学習</p> <ul style="list-style-type: none">・自分事となる学習課題の設定・解決に向けて粘り強く取り組むための工夫・自己決定、自己選択、失敗からの学びを生かす。		
研究の仮説	<p>・ふり返りを通して、次への学習への意欲につなげていく。自分を客観的に捉えたり、課題解決の手段をふり返ったりしていくことで、学習や生活の中で「やってみたい」「分かってほしい」「解決したい」という思いを実現するためにどうすればよいか、試行錯誤する場面や高みを目指して学習する姿が見られるのではないかと。</p> <p>・子供同士での関わり合いや教材・資料の活用を通して、整理したり、分析したりできるようにしていく。自分で調べたり、考えたりする時間や資料とじっくり向き合う時間を設定していく。このような場を設定することにより、自分事として学んだことを生かした学習活動ができるのではないかと。</p>		

研究構想図

学校教育目標

郷土を愛し、仲間と共に、夢をもって生きる子供を育成する



自ら考え、粘り強く課題に向かい、高みを目指す子供の育成(1年次)

◎めざす子供像 ・粘り強く課題に向かい、高みを目指す子供

高みをめざす子供

自分事となる学習課題の設定。解決に向けて粘り強く取り組むための工夫。自己決定・自己選択、失敗からの学びを生かして。学びのふり返りでは、なりたい自分を自覚し見通しをもって学習活動ができるようにしていきたい。

学びをつなぐための工夫

すぐには、答えが見つからない問題もある。学びは連続している。そこで、友達と学び合っ解決したり、既習事項を紐解いたり、他教科と合わせたりなど、学びをつないでいくことで、学びを深めていけるようにしたい。



□試行錯誤しながら粘り強く解決しようとするために

- 自分の考えをもち、追究する時間や追究方法の選択を保障する。(個別最適な学び)
- 思考を言語化していくよさを実感できるような工夫をする。
(思考や感性に関わる言葉が詰まったノートづくり、思考ツールの活用など)
- 教師の「出」と「待ち」を意識する。
(どんな情報を、どこで、どのように獲得できるようにするか。)
- 発問、言葉がけ、個別支援の工夫
- 視覚的な手立ての工夫

子供がワクワクするしかけ
(場面設定)づくり

□「自分ごと」となる学習課題にしていくために

- これまでの学びや、自分の生活、経験から学習課題を設定する。
- 「解決したい」「こうすればできそうだ」といった子供の強い思いを引き出し、解決の見通し(ゴール・プロセス)がもてるようにする。

□ともに学び合う良さを実感できる授業づくりのために (協働的な学び)

- かかわることのよさを実感し、安心して過ごせる学級経営を行う。
- 子供の思考をつなげる教師の問い返しを意識する。
「それってどういうこと?」「わからない」「ちょっと待って」と自然と言える学級を目指す。
「みんなでやったらわかった」「友達とやったら解決できてよかった」と実感できる経験を積み重ね、価値づけていく。

□学びの手応えを実感するために

- ふり返りで自分の学びや知識のつながりを実感する。
- ふり返りから次の課題を見つけ、自分たちの次の学習につながっていく経験を積み重ねていく。



学級カリキュラムマネジメント表の作成

- ・年間を通して育てたい資質・能力のイメージをもつ。
- ・育てたい資質・能力を視点として、教科と教科、教科と特別活動や学校行事をつなぐ。

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">研究の方法</p>	<p>① 試行錯誤を促す場面と協働的に学ぶ場面を組み入れたカリキュラムマネジメント表の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4月・5月にカリキュラムマネジメント表やアクションプランを全学年で話し合いながら作成する時間を確保する。 ・ 試行錯誤を生み出すために、自由進度学習を取り入れていく。 ・ 子供が育つ学習や活動にするために、「ふり返りの工夫」「粘り強く課題に向かう姿勢(試行錯誤)」の2つの視点に沿って活動内容や支援の在り方などについて意識したカリキュラムマネジメント表を作成する。カリキュラムマネジメント表の作成の際に、年間で重点とする単元を決め、明記する。また、・アクションプランとカリキュラムマネジメントの資質・能力等が関連させ作成する。 <p>②教職員間での授業についての研修 ～子供たちが粘り強く学習できる授業づくりをめざして～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校全体での授業研究会(七中校区合同研究会) 【事前研究会①】学級カリキュラムマネジメント表と学習指導要領を持ち寄り、めざす子供の姿、つけたい資質・能力、学びや遊びとのつながりについて話し合い、授業・単元の構想をもつ。 【事前研究会②】予想される子供の思考と指導事項、手立てについて考え、指導案を中心に検討する。 【事後研究会】子供の姿で語り合い、成果と課題を共有する。記録をとり、課題やテーマに沿って全員で検証し、授業づくりに生かす。 <p>③子供の姿を共有する場を設定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 複式学級で学ぶ子供たちの姿や、複式を生かして子供たちが協働的に学ぶ姿を教師で共有する。学期に一回授業を見合う時間を設定していく。教師が互いに授業を見合う機会を設定し、視点に沿った手立てを中心に検証する。 <p>④マイ研究紀要を作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究を日常的に行っていく。日々の授業実践を綴っていくファイルを個々で作成していく。月に1回程度、授業実践ファイルを見合う時間を設定したり、コメントし合ったりしていく。
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">研究の計画</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・研究全体会… 5/1(今年度の研究の方針・カリキュラムマネジメント表作成) ・7/29・12/22・3/8 *マイ研究紀要(授業実践ファイル)を教員間で見合う時間を1か月に1回程度設定する(6月～)。 *授業を見合う時間を各々で設定し、授業を見られるような時間を設定する。授業を見た際、感想等を付箋などで伝えられるようにする。 ・七中学区4校合同授業研究会…6/25【本校 第5・6学年「算数」】

<様式>

学校名	山形市立出羽小学校	校長	武田 重泰
		研究主任	村山 豪
研究主題	「深い学び」をつくり出す子どもの育成		
研究主題設定の理由	<p>昨年度は「一人ひとりが自分らしく輝く子どもの育成」を研究テーマに、「授業の中で自分らしく輝く子ども」と「一人ひとりが楽しいと思える授業」の2つに焦点を当て、日々の授業改善に取り組んできた。その結果、自分の考えを表現し、相手の言葉に耳を傾けられる児童が増えた。</p> <p>しかし、その一方で、解決すべき切実な課題も浮き彫りになった。対話の姿は見られるものの、表面的なやり取りに留まり、教科の本質に迫る「深い学び」まで至っていない場面が多かった。</p> <p>教師側においても、教材研究が不十分なために「何を学ばせるべきか」の焦点が定まらず、課題提示や発問、板書のタイミングに迷いが生じ、子ども中心の授業を深化させきれない現状があった。こうした授業の積み重ねから、子どもたちの学びの向かう力は低下し、それに比例するように集中力も低下していった。</p> <p>子どもたちの学びに向かう力の低下は数値にも表れている。近年のNRTや全国学力調査の結果は低下傾向にあり、自信を失った子どもたちの自己肯定感や困難な課題に立ち向かおうとする意欲の向上は喫緊の課題である。</p> <p>上記の現状を打破するため、研国語科と算数科に重点を置いた教科研究を行う。研究テーマを「深い学び」をつくり出す子どもの育成とし、子どもたちが「わかった!」「おもしろい!」と感じる知的な成功体験を積み重ねることで、「学びに向かう力」を底上げすると同時に、このような授業の積み重ねにより、結果として見える学力も向上させる。</p>		
研究の目標	日々の授業の質的向上と「深い学び」の実現		

研究の内容および方法

3つの柱を軸に研究を推進する。

○確かな教材研究（「問い」の設計）

教科固有の「見方・考え方」を働かせるために、何を学ばせるのかを明確にし、子どもの思考が動き出す本質的な課題をデザインする。

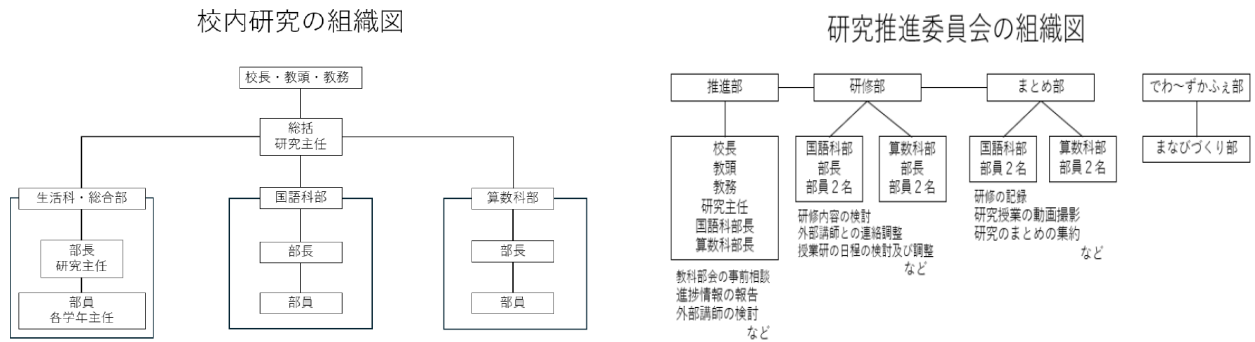
○授業力の向上（「出」の追求）

子どもの実態に基づき、最適なタイミングでの課題提示、発問、思考を構造化する板書など、教員自身の指導法を学び合う。

○安心できる集団づくり（生徒指導の4機能の意識化）

「自己存在感」「共感的な人間関係」「自己決定」「安全・安心」の視点で学級の集団作りを行う。また、これまで培ってきた「きき合う関係」を基盤に、誰もが失敗を恐れず、安心して自分を表現できる居場所を保障する。

国語科部会と算数部会を組織する。



研究の計画

(1) 校内授業研究会

① 「みんなで授業を語る会」(大研)

- ・国語科指導及び算数科指導に特化した講師を招聘した授業研究会（各教科2回）
- ・山形大学の森田智幸先生を招聘した、子どもの見取りに焦点を当てた研修。（1回：各教科1授業研）
- ・指導主事を招聘した、教科の本質及び指導法に焦点を当てた研修。（1回）

② 「授業を語る会」(授業研)・・・原則一人1回（大研授業者と七中学区授業者は除く）

- ・日程については、授業の進度、子どもの実態に応じて変更も可とする。
- ・教科部会で事前研と事後研を行う。
- ・小研に参加できるように週予定を調整する。教科部の授業研は、原則全て参観すること。

③ 事後研究会

- ・事後研は、ワークショップ形式や全体での話し合い形式など適宜工夫する。
- ・事後研の運営は、教科部長を中心に研修部員が分担して行う。

(2) 研究全体会

- ・年度初め、1学期末、2学期末、年度末に研究全体会をもち、研究への理解を深めたり、成果と課題を共有し合ったりする。
- ・森田智幸先生の講話（1回）

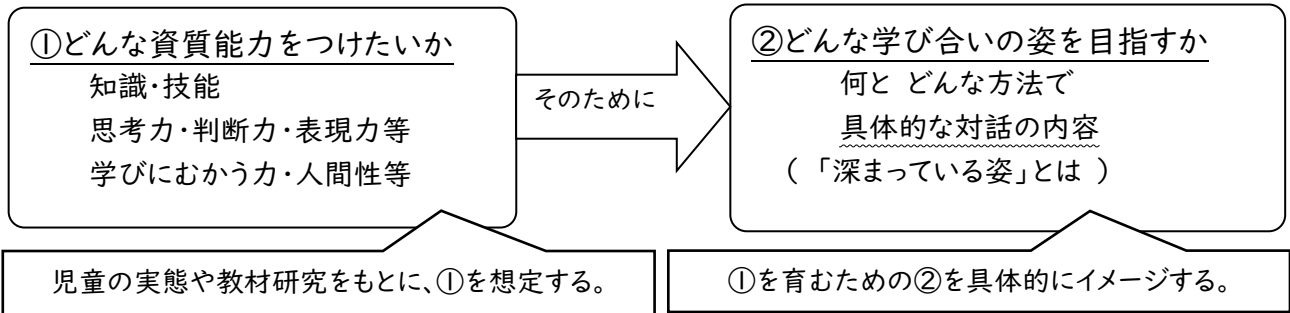
(3) 月1回の校内ミニ研修会（でわ〜ずかふえ）

- ・授業について様々な視点で語り合うことを通して、日々の授業の質の向上につなげる。
- ・日々の授業で悩んでいることや困っていることを語り合うことを通して、同僚性を高める。

<様式>

学 校 名	山形市立楯山小学校 山形市大字青柳字一本木64番地 TEL686-2006 FAX686-4183	校 長	芦野 あずさ
		研究主任	遠藤 佳代子
研 究 主 題	学び合い、考えを深める子どもの育成(2年次) ～子どもの思考に沿った授業を通して～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>本校では、「いのち 夢 なかまをつなぐ 子どもの育成」を学校教育目標に掲げ次のような子どもの姿を目指し、教育活動を行っている。</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; text-align: center;"><p>いのち たくましく元気な子ども (体) 夢 学びに向かう子ども (知) なかま やさしく思いやりのある子ども (徳)</p></div> <p>これまで、物事を多角的多面的にとらえ、気づき、考え、社会や他者と関わりながら自己実現しようとする子どもの姿を目指し、「気づき、考え、学び合う子どもの育成」を主題に研究を積み上げてきた。その中で、学びを深めていくためには、「言葉」を適切に用いて、自分の内言を言語化する力が不可欠であることを再確認した。</p> <p>それをふまえ、対話的に学んでいく授業づくりに力を入れて取り組んできた。実践を通して、様々な「学び合う姿」のイメージを広げ、教師間で共有することができた。また、児童の「相手意識をもって自分の意見を話す力」や、「聴くことが大切であるという意識」が高まったという成果があげられた。</p> <p>さらに、昨年度は、対話的な学びを通して資質能力を高めていくという「学び合い」に継続して取り組みながら、「思考を深めていくこと」に焦点をあてて授業研究を進めてきた。思考が深まらなかった要因として、「児童が課題を自分事として捉えられていないこと」「深めていこうとする動機付けが不十分だったこと」が挙げられた。そのため、「子どもの思考に沿った授業づくり」を副主題とし、課題設定や発問を工夫し研究を進めた。自分の考えを意欲的に表したり、粘り強く取り組んだりする姿が見られるようになった。しかし、意欲的に学び合い、考えを交流しているが、思考の深まりが見られなかったり、学んだことを生かしていこうとする姿が見られなかったりなどの課題も明らかになった。</p> <p>上記のような課題をもとに、今年度も、この主題に引き続き取り組んでいく。子どもの思考に沿った授業づくりを行っていく事で子ども達の主体的な姿を引き出し、学び合いの中で対話を通し、自分の考えを見返し、検討し、深めていく姿を目指していくこととした。</p>		
研 究	1. 目指す子どもの姿 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"><p>○課題を自分事として捉え、粘りよく学ぶ子ども ○他者と意見を交わし、考えを深める子ども</p></div>		

2. 研究の手順



※②の姿は、より具体的に想定する。特に、「学びが深まっている姿」とは、どのような姿なのかについて教材研究や指導理解をもとに、丁寧に検討する。

3. 目指す学び合いの姿を引き出すために

以下の3つの視点に分けて、それぞれ手立てを講じていく。その際に、子ども主体の授業を心がけていく。また、日常の学習においても思考を深める手立てを取り入れ、対話に必要な力の育成を図っていく。

(1) 課題設定

- ・児童の興味関心を引き出す課題
- ・児童の思考に沿った課題
- ・つきたい資質能力が確実に習得できるような焦点化された課題

(2) 学習場面

- ・児童の思考を段階的に引き出す発問
- ・児童にとって必要感のある学習形態
- ・体験活動や操作活動、ICT 機器等の学習用具の効果的な活用

(3) まとめと振り返り

- ・視点を与え、目的を明確にする
- ・振り返りの活用、またはフィードバックを行う
- ・質を高めるための声かけ(具体性, 分析力, 次への見通しなどへの価値づけ)

子ども主体の授業づくり

<思考を深める対話に必要な力と具体的な手立て>

- (1) 自分の考えを持つ力
個人思考の時間確保 理由付けの練習課題 例による「考え方の方」の提示
- (2) 相手の話を聞き取り理解する力
ペアトーク 聞く姿勢の可視化 話し手と聞き手の役割交代
- (3) 違いを受け入れつなげて考える力
比較・思考ツール可視化 反対意見の活用
- (4) 根拠で説明する力
事実と意見の区別 根拠探し
- (5) 対話を通して考えを更新する力
振り返り 考えの変化の共有 「変化=成長」として肯定的に扱う

授業研究のもち方

- ①全担任が研究授業を行う。
すべての研究授業に外部講師を招聘し研鑽を重ねていく。
- ②事前研究会は授業日の1か月前に1回目、3週間前に2回目を学年部ごと行う。

方法

「1回目は略案程度で、「どんな資質能力をつけたいか」「そのためにどんな学び合いの姿を
求めるか」等を中心に、相談ベースで。
2回目は完成した指導案を検討。「手立てや授業構成が有効か」「誤字脱字、書き方等のミ
スはないか」などを中心に行う。

指導案は、授業日の1週間前にデータで提出する。

③事後研究会は全体で行う。

- ・司会・記録・授業の写真は、学年部で分担する。
- ・事後研を行う場所は授業を行った教室とし、可能な限り板書も残しておく。
- ・原則としてワークショップ形式で行う。
- ・事後研の内容を受け、授業者が「授業研だより」を発行し、次回の授業研に生かせるようにする。

研究の計画

4月 3日	金	研究推進委員会	
4月 7日	火	校内研究日①	今年度の研究の方向性について
4月30日	水	校内研究日②	ワークショップ カリキュラムマネジメントについて
5月27	水	校内研究日③	指導案形式検討・研究授業計画
6月17日	月	校内研究日④	2年 算数
7月22日	水	校内研究日⑤	6年 算数
9月 7日	月	校内研究日⑥	3年 算数
10月21日	水	校内研究日⑦	4年 国語
11月 4日	水	校内研究日⑧	5年 算数
12月 9日	水	校内研究日⑨	6年 算数
12月16日	水	校内研究日⑩	予備日
1月27日	水	校内研究日⑨	研究の振り返り・研究のまとめと来年度の方向性について 研究紀要作成

<様式>

学校名	山形市立高瀬小学校 山形市大字下東山1264番地 TEL 686-2264 FAX 686-4184	校長	菱川 若葉
		研究主任	高嶋 彩乃
研究主題	自ら学び、共に伝え合う高瀬っ子の育成 ～課題解決へ向け、粘り強く取り組み、表現する力を養う～ (2年次)		
研究主題設定の理由	学校教育目標 本校では、「やさしく かしこく たくましく ～自分から～」を教育目標に掲げ、 ・「かかわりながら自他を認め合う子ども」<やさしく> ・「学びや経験をくらしに活かせる子ども」<かしこく> ・「夢や願いをもち自分を高める子ども」<たくましく> を目指し、児童の育成にあたっている。		
	課題と研究について 本校では、学校教育目標を具現化するために、校内研究を推進していく。 昨年度より、「課題解決へ向け、粘り強く取り組む子ども」「相手に応じてわかりやすく表現する子ども」の姿を目指し、「自ら学び、共に伝え合う高瀬っ子の育成 ～課題解決へ向け、粘り強く取り組み、表現する力を養う～」を主題に研究を積み上げてきた。成果としては、「友達の考えを聞き入れながら課題解決に取り組む姿」や「興味関心のある課題に粘り強く取り組む姿」が見られるようになってきた。 一方、課題解決をするなかで困難があると意欲が低下し諦めてしまう子どもや、話す力は育っているものの相手に分かるように表現する力が弱い子どもが見られる。 そこで、今年度も昨年度同様に研究主題を設定し、各学年で様々な教科の実践を通して、子どもたちの課題解決を目指していく。		
	授業づくりについて 「主体性」と「関わり」を中心に子どもの姿を見とり、子どもの姿を通して授業づくりを進める。授業づくりの際は、目指す子どもの姿を念頭に置きながら子どもの実態をとらえ、主体的に学ぶための教師の様々な支援、単元構成や場の設定等の工夫について探っていく。また、必要感のある子ども同士の関わり方を探る。それらによって、子どもの学びがさらに深まるようにする。 これまでの成果と課題を踏まえ、目指す子どもの姿を引き続き次のように設定する。		
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"><p>○課題解決へ向け、粘り強く取り組む子ども ○相手に応じてわかりやすく表現する子ども</p></div> <p>目指す子どもの姿にせまるために、今年度は各学年で教科を設定し、昨年度までの成果の積み重ねとともに、子どもたちの課題解決のための授業実践をしていく。</p>		

学 校 名	山形市立山寺小中学校	校 長	武田 裕子
	山形市大字山寺1650 023-695-2044	研究主任	(小) 神保幸恵 (中) 後藤 岬
研 究 主 題	自ら学び方を選択し、学びをつなぐ児童生徒の育成 ～主体性を育む授業デザイン～（1年次）		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>本校は、複式学級・少人数・小中併設校という特色を生かし、3年間にわたり総合的な学習を中心に9年間を見通したカリキュラム・マネジメントの充実を図ってきた。昨年度は、子どもが自分の学びを表現したり、地域と協働したりする姿が増加するなど、主体的に学ぶ姿が着実に育ちつつある。</p> <p>一方で、複式・少人数という環境は個別最適な学びを実現しやすい反面、学びが固定化しやすいこと、多様な考えに触れる機会が限定されること、学習の進め方を自ら調整しながら学ぶ力が育ちにくいことなどの課題も明らかになった。これらの課題の解決は、学習指導要領が重視する「主体的・対話的で深い学び」の実現において重要であり、次期学習指導要領ワーキンググループにおいても、学習者が自ら学習過程を構築しながら学ぶ「主体性」の育成が中心的なテーマとして位置づけられている。</p> <p>以上を踏まえ、令和8年度の研究では、これまでの「カリキュラム・マネジメントの整備」から一歩進め、子どもが自ら学びを創り出し、主体的に学習過程を組み立てながら学ぶ力を育成するための『学び方そのものを育てる授業改善』を研究の中心に据えることとした。</p> <p>「自ら学び方を選択する」とは、文部科学省が示す主体的な学びの概念に基づき、課題の発見、目標設定、学習方法の選択、対話・協働による学びの深化、振り返りと次の学びへの活用といった一連の学習プロセスを、学習者自身が主体的に構築していく姿を指す。</p> <p>「学びをつなぐ」とは、昨年度までと同様に、各教科で培った学びを総合的な学習で発揮し、社会で通用する力へとつなげていくことを意味している。</p> <p>また「主体性」とは、学習者が目標達成に向けて自らの思考・行動・感情を調整しながら学習を進める力であり、学習指導要領における「主体的に学習に取り組む態度」の基盤となる。次期学習指導要領においても、育成すべき重要な資質・能力として重視されている。</p> <p>本研究では、特に学び方を選択する力【学び方の自己選択】と、主体的に学びを振り返り次に生かす力【リフレクション】の育成に力を入れる。授業では、児童生徒が自らの学習活動を予見（見通し・目標設定）→遂行（方法の選択・調整）→省察（振り返り・改善）する場面を意図的に設定し、主体的に学ぶ姿を育てていく。</p> <p>さらに、育てたい非認知能力である「自分を高める力」「多様性を認める力」「目標を持ち、挑戦する力」について教職員で共通認識をもち、子どもたちの成長を見取る力を高めていく。</p>		
研 究 の 目 標	<p>学校教育目標『郷土「山寺」を愛し、社会に役立つ人間の育成』</p> <p>重点目標 「考える子ども」「助け合う子ども」「たくましい子ども」</p> <p>育成する力「自分と向き合う力」「多様性を認める力」「目標に向かって挑戦する力」</p> <p>日々の授業を通して、子どもが自ら学び続けるための「学び方」を身に付けることをめざす。</p>		
研 究 の 仮 説	<p>仮説1 学び方のスキルを明確にし、授業の中で意図的に育成すれば、子どもは自ら学びを調整し、主体的に学びに向かうようになる。【学び方の自己選択】</p> <p>仮説2 自分の学び方や学びに向かう姿勢を適切に評価する力を育成すれば、子ども達は他の様々な活動においても自らの思考・行動・感情を調整し、自分に合った生き方ができるようになる。【リフレクション】</p>		

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">研究の内容</p>	<p>(1) 子どもの姿の共有と「学び方」の明確化</p> <ul style="list-style-type: none"> ①育てたい非認知能力を踏まえた目指す子どもの姿を共通理解する ②学び方の実態を語り合い、育てたい学習スキルを共通理解する (目標設定・情報収集・対話・協働・表現・振り返り) ③小中連携による学び方の継続性の確保 <p>(2) 学び方を育てる授業デザインの検証【学び方の自己選択】と【リフレクション】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①個別最適な学びと協働的な学びをつなぐ授業改善[学習課題のデザイン] ②子どもが主体的に学びに向かう教室環境づくり (ICT 活用含) [学習環境のデザイン] ③子どもの主体性を尊重しながら学びをつくる授業改善[学習のファシリテート] ④子どもが自己評価、自己調整を適切に行うための工夫[リフレクション] <p>(3) 地域探究を通した学びの実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ①学級カリキュラム・マネジメントによる学びの系統化 ②小学校：1 日生活総合 DAY・中学校：Yamadera Welcoming Tour ③地域の方との協働による学びの深化 ④実践を振り返り、学び方の改善につなげる 	<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">学び方の自己選択</p>																					
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">研究の方法 (R8年度)</p>	<p>(1) 子どもの姿の共有と「学び方」の明確化</p> <p>①小中それぞれに設定した非認知能力の指標をもとにリフレクションを行う。月初めの週を「リフレクションウィーク」とし、児童生徒が自分自身について振り返る時間を設定する。発達段階に合わせて作成・実施し、客観的に振り返る力を付ける。(キャリアパスポートに入れ、成長の足跡を残す。)</p> <p>(2) 学び方を育てる授業デザインの検証【学び方の自己選択】と【リフレクション】</p> <p>今年度は②[学習環境のデザイン]と④[リフレクション]に重点を置いて研究を進める。年間を通して、山形大学の森田智幸准教授にご指導をいただく。また、職員会議において実践紹介を行ったり互いの授業を参観し合う「授業力ブラッシュアップ大作戦」を行ったりして、組織としてよりよい授業づくりを推進できる風土を醸成する。</p> <p>(3) 地域探究を通した学びの実践</p> <p>地域で活動し、大人と関わる時間や探究活動を経て児童生徒の力を発揮する場面を確保する。また、既習事項との関連を考えながら計画を立てさせたり振り返って関連に気づかせたりする場面を意識的に設定する。また、年間を通して学習の課程がわかる掲示を行う。</p>																						
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">研究の計画</p>	<p>3年計画 1年次：[学習環境のデザイン]と[リフレクション]に重点を置いて研究 2年次：[学習課題のデザイン]と[リフレクション]に重点を置いて研究 3年次：[学習のファシリテート]と1、2年次の課題に重点を置いて研究</p> <p>↓ 1年次の年間計画</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 15%;">時期</th> <th style="width: 35%;">主なテーマ</th> <th style="width: 50%;">取組内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>4～5月</td> <td>研究の基盤づくり</td> <td>校内研① (研究主題共有) / 実態調査</td> </tr> <tr> <td>6～7月</td> <td>授業改善のスタート</td> <td>ICT 活用 / 校内研② (授業参観強化週間) (学び方の授業デザインの検証)</td> </tr> <tr> <td>8～9月</td> <td>探究準備・学び方の実践</td> <td>プロセス指導 / 校外研修</td> </tr> <tr> <td>10～11月</td> <td>探究活動の実施</td> <td>(生活総合 DAY・Welcoming Tour) 校内研③ (村山教育事務所計画訪問)</td> </tr> <tr> <td>12～1月</td> <td>評価の在り方の検討</td> <td>自己評価改善 / 見取り研修</td> </tr> <tr> <td>2～3月</td> <td>成果まとめ</td> <td>成果整理 / 変容分析 / 次年度課題 / 紀要作成</td> </tr> </tbody> </table>		時期	主なテーマ	取組内容	4～5月	研究の基盤づくり	校内研① (研究主題共有) / 実態調査	6～7月	授業改善のスタート	ICT 活用 / 校内研② (授業参観強化週間) (学び方の授業デザインの検証)	8～9月	探究準備・学び方の実践	プロセス指導 / 校外研修	10～11月	探究活動の実施	(生活総合 DAY・Welcoming Tour) 校内研③ (村山教育事務所計画訪問)	12～1月	評価の在り方の検討	自己評価改善 / 見取り研修	2～3月	成果まとめ	成果整理 / 変容分析 / 次年度課題 / 紀要作成
時期	主なテーマ	取組内容																					
4～5月	研究の基盤づくり	校内研① (研究主題共有) / 実態調査																					
6～7月	授業改善のスタート	ICT 活用 / 校内研② (授業参観強化週間) (学び方の授業デザインの検証)																					
8～9月	探究準備・学び方の実践	プロセス指導 / 校外研修																					
10～11月	探究活動の実施	(生活総合 DAY・Welcoming Tour) 校内研③ (村山教育事務所計画訪問)																					
12～1月	評価の在り方の検討	自己評価改善 / 見取り研修																					
2～3月	成果まとめ	成果整理 / 変容分析 / 次年度課題 / 紀要作成																					

<様式>

学 校 名	山形市立東沢小学校 山形市防原町4-15 TEL 629-2119 Fax 629-2907	校 長	設樂 宏幸
		研究主任	寒河江 ふみ子
研 究 主 題	全職員が全児童を支える学校をめざして ～ 「チームとしての学校」の可能性を探る ～ (二年次)		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>(1)今日的教育課題から これからの社会の担い手である子どもたちには、多様な他者と協働しながら課題解決していくことが求められる。 文部科学省においては、令和3年1月の中央教育審議会答申(「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～)を受けて教科担任制を導入することとしており、小学校高学年にとどまらず中学年にも拡大するよう推進している。 山形県では令和7年度から「第7次山形県教育振興計画」がスタートし、人口減少の加速化やグローバル化の進展等に加え、超スマート社会の到来、ウエルビーイングの重視が謳われており、学校教育もそれらに対応する形で変化していくことを求めている。現在の学校では、これまでの個々の教員の経験や知識だけでは対応しきれず、この状況の解決には教職員が組織的な協働を一層重視していく必要がある。 また、一人の教員が担任として責任をもって一つの学級を運営する形態から、「チーム担任制」「複数担任制」「教科担任制」など担任を固定しない方法に移行する学校が少しずつ増えている。このことは、チームで業務にあたることによって、より高い質の教育を受けられる環境を整えようという考えに基づくものである。</p> <p>(2)学校教育目標の実現を目指して</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">誇りと夢をもち 未来をひらく たくましい「雁戸の子」を育てる</div> <p>本校では、昨年度、この学校教育目標の実現のため、「子どもが主体性を発揮できる学校」「全職員が全児童を支える学校」づくりを重点として、「教科担任制」「ローテーション担任制」の実施を始めた。この1年で、全職員が全児童を支える仕組み(学校づくり)がだいぶ整ってきている。そこで、今年度は、全職員が全児童を支える仕組みのもと、授業で子どもを育て、笑顔あふれる学校を目指すことを推し進めるため、以下を特に重点として、研究をさらに推進していくこととする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"><ul style="list-style-type: none">* 夢中になって学びを楽しむ授業づくり* 仲間とともに課題を解決する集団づくり* 高みを目指してチャレンジする自分づくり</div>		

	<p>(3)学校の実態から</p> <p>本校の各学年の構成は、20～30名程度の単学級である。“児童と児童、児童と教員の人間関係”“教員の専門性が発揮される場面”などが限定してしまうこと、さらに、学級担任の業務量が多く、他の職員と連携する余裕がないのが実情であった。それぞれが自分の学級の業務に追われ、他学級の経営について学び合える精神的時間的余裕がもてないことは、大きな損失である。また、本校でも、ベテラン教員の退職に伴う若手教員や臨時講師の増加の時代がやってくる。職員同士が学年を超えて学び合ったり、児童の成長を語り合ったりすることで学校全体が活性化されることが望まれる。</p> <p>よって、私たちは、これらをさらなる学校経営改善の視点とし、在籍する児童全員に、東沢小学校ができる得る一番高い質の教育を提供するための体制づくり、教員個々の強みを生かした組織的な対応を可能にする仕組みづくりを目指したいと考えた。</p> <p>以上が本主題設定の理由である。新しい学校の仕組みづくりを進め、上記のような学校としての課題を解決するため研究に取り組んでいく。</p>
<p>研究主題について</p>	<p>「全職員が全児童を支える」とは…</p> <p>本校では、職員が児童を支えることを「児童をよく理解し、児童の求めていることを把握し、自己選択・自己決定できるよう支援すること」と捉えている。授業でも生活でも、自らの課題を「わかること・できること」「わからないこと・できないこと」を捉え、他者に伝えたり助けを求めたりすることが大切だと児童も教師も理解していることが必要である。</p> <p>知識及び技術の習得や活用の喜び、充実感を味わう活動を充実することを目指すためには、学級集団を安心して学べる居場所にしていきたい。一方で、様々な生徒指導上の課題が早期化して、中学校からではなく小学校中学年からの対応が必要となっていることに関しては、本校も例外ではない。児童の価値観の多様化やインクルーシブ教育の必要性も考え合わせると、学級担任だけではなく複数の教員が関わり育てていくことが重要であると考えます。</p> <p>学習指導や担任として、複数の教員が児童に関わり支えることのできる仕組み・学校づくりを行うことで、多面的な児童理解が可能になる。そして、このことが児童の心の安定につながり、学校生活全般において、児童が主体的に力を発揮していくことにつながっていくと考える。</p>
<p>研究の内容</p>	<p>(1)学びの質の向上を目指す教科担任制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1, 2年ブロックでの交換授業 ・ 3～6年ブロックでの教科担任制 ・ 教員の専門性を発揮した教科の系統的な指導（年間指導計画の作成） ・ 教材研究の焦点化による教員の負担軽減 <p>(2)チームとしての学校の仕組みづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 主となる担任とローテーション担任との業務の整理 ・ 児童の混乱を軽減する指導の統一（学習・生活） ・ 教室管理消耗品などの環境の統一 <p>(3)多面的な児童理解、安心・安全で居心地のよい学級・学校づくりのための情報共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童の変化や課題の把握のための情報共有方法 ・ 心身の健康状態の把握のための情報共有方法

研究の方法

- (1)「4つの教師力(学習指導力・生徒指導力・特別支援教育力・ICT活用力)」を高める研修会の企画・運営
 仕組みは整ってきたが、教師個々の力が求められることも見えてきた。そこで、「4つの教師力」を高めることを狙いとして、『めざせ、教師力UP大作戦！～“やって楽しい・やって良かった”研修を～』を展開する。各自が、重点と教師力に関連するテーマ設定・研修会企画を行い、互いに参加する中で、楽しみながら日々の実践に生かすことのできる研修を積み重ねて「教師力」を高めていく。そうして、確かな学びや力のつく授業へつなげたり、よりよく児童を支え、チームの一員として働いたりすることができるようになることで、研究主題、学校教育目標や重点テーマの達成に迫ることができると考える。
- (2)実施と振り返りのくり返しによるアップデート
 PDCAサイクルを回し、やってみてうまくいかないことは改善案を出してより良い仕組みを整える。児童、教員などそれぞれの立場におけるアンケートを定期的実施して学校体制づくりに生かす。保護者には、参観日や学校だよりで情報を発信していく。

研究組織図

研究推進委員会	
【校長】	設楽 宏幸
【教頭】	永見 恵理子
【教務主任】	今川 豊
【研究主任】	寒河江 ふみ子
【副主任】	高橋 淳子
【学年部代表】	〈1,2学年部〉 寒河江 ふみ子 〈3～6学年部〉 佐藤 史輝 〈支援〉 高橋 淳子

	1, 2 学年部	3～6 学年部
生き方指導部	大坂・宗片	川合・阿部・五十嵐
学習指導部	寒河江	佐藤祐・佐藤史・高橋
担外	永見・今川	田中

研究の計画

月	日	活動内容
4	初旬	研究推進委員
	随時 (通年)	ローテーション担任・教科担任打ち合わせ
5	中旬	研究推進委員会（全体会に向けて・研究概要の確認） 研究全体会（研究概要の確認）
6	初旬	教職員アンケート（研修について）
	中旬	研究推進委員会（研修の計画）
7	初旬	研修スタート（1月頃まで、計画に則り）
	下旬	研究推進委員会・全体会（1学期ふりかえりと2学期に向けて）
8		
9	下旬	児童・教職員アンケート①（前期分）
10	初旬	研究推進委員会
11		
12	中旬	研究推進委員会
	下旬	研究全体会（2学期ふりかえりと3学期に向けて）
1		
2	初旬	児童・教職員アンケート②（後期分）
	中旬	研究推進委員会（今年度のまとめ・次年度の方向性について）
	下旬	研究全体会（今年度のまとめ・次年度の方向性の確認）
3	初旬	研究推進委員会（全体会を受けて）

<様式>

学校名	山形市立滝山小学校 山形市小立四丁目13-86 Tel 631-2248 FAX 631-9034	校長	會田 雄一
		研究主任	木村新之祐
研究主題	自ら 学びをつないでいく子ども(3年次) ～子どもが学びの主体となり、みんなが笑顔の学校をつくるために～		
研究主題設定の理由	<p>令和7年度までは、研究主題『自ら 学びをつないでいく子ども(1・2年次)』のもと、育成したい資質・能力を意識したカリキュラムづくりや単元づくりを通して授業改善に取り組んできた。また、それぞれの学年らしさを生かした生活科・総合的な学習の時間の授業づくりをしたことで、「学びをつなぐ」ためのより具体的な手立て、それぞれの発達段階にあったアプローチの仕方があることが見えてきた。</p> <p>しかしながら、カリキュラム全体を通して子どもに力を付けていくことを重視してきた一方で、1単位時間あたりの授業の深まりや子どもの学びの深まりには課題が見られた。日々の学校生活で最も多くの時間を割いているのは授業であり、学校課題解決のためには日々の1時間1時間の授業を改善していくことが欠かせない。そこで、今年度は、カリキュラム全体を通して子どもに力を付けていくことは意識しながらも、本校がこれまで大切にしてきた特別支援教育の視点を生かし、どの子どもも授業に主体的に参加し学びを楽しむことを目指して授業改善に取り組んでいく。そのための手立てを全校で共有することで教職員の指導力向上にもつなげていきたい。</p>		
研究の目標	<p>今年度の学校経営テーマである『子どもが学びの主体となり、みんなが笑顔の学校をつくる』ためには、児童の実態を踏まえ、学年の児童に必要な資質・能力を明らかにして教育活動を進めていくことが不可欠である。特定の教科や単元だけでなく、教科横断的な視点のもと、生活科や総合的な学習の時間を中心としたカリキュラム・マネジメントを充実させていくことで、これまでよりも更に効果的に資質・能力を高めていくことができるのではないかと考える。そして、生活科・総合的な学習の時間では、子どもの関心や課題意識を起点とし、地域に目を向けることで改めてその良さを発見したり協働的に探究することで学びを深めていったりする姿を目指していく。また、児童が主体的に学習に臨むことができれば自ずと学校生活全体が充実していくと考える。様々な特性の児童がいる中で、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりをしていくことで、どの子も主体的に学びに向かえるようにすることを目指していく。</p>		
研究の内容	<p>自ら学びをつないでいくためには、学びを子どもの生活と結び付けていくことが必要である。子ども達が自分の生活の中で学ぶ必要を感じたり、「学びたい。」「できるようになりたい。」「うまくいくために何とかしたい。」と学びに対する意欲や思いを持ったりすることで、学びが子どもの生活に結びついていくと考える。また、身につけた力や得てきた学びを必要に応じて自在に引き出し、生活科や総合的な学習はもちろん、他教科・他の学習活動でも汎用的に活用していくことができるようにするため、子ども達が自ら学びをつないでいくにふさわしい環境を整えることや、深い学びへ導く寄り添い方を考えていく。また、学びを自分の中だけの閉じたものにするのではなく、必要に応じて仲間と学びをつなげていくことや地域社会に学んだことをつなげていくことも目指していく。</p> <p>1 日々の授業において</p> <ul style="list-style-type: none">・今の学習が、単元の中でどのように位置づけられているのかを押さえる。・前後の学習とのつながりやその時間のねらいを意識して授業づくりを行う。		

	<ul style="list-style-type: none"> ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れ、どの子どもも主体的に学習に臨めるような手立てを取り入れる。 ・児童が学びをつなぐ場面を授業の中に意図的に設ける。 <p>2 単元構成において</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの思いを大切に単元を構成する。教師側のねらいや意図を持ちつつ、学習過程の中で子どもの気付きや課題意識を吸い上げ、意欲や探究心が持続していくように人・もの・こと（ホンモノ）との出会わせ方やタイミングを工夫していく。 ・「課題設定→情報収集→整理分析→まとめ・表現→ふりかえり・改善」の探究の過程を経由しながら、そのプロセスが何度も繰り返されるように単元を構成していく。 <p>3 カリキュラムデザインにおいて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が学びをつないでいくために必要な資質・能力は何かを見極め、育成したい資質・能力を明確に持つ。 ・生活科・総合的な学習の時間を中軸にして、その学年で育成を図る資質・能力を高めていけるようなカリキュラムデザインを行う。 																																							
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">研究の方法</p>	<p>(1) 学年の共同研究とし、学年の児童に必要な資質・能力を明らかにして研究を進める。資質・能力を育成するために効果的な支援や手立てを決め、年間を通じて実践を積み重ねていく。（どの教科・学習場面においても、設定した資質・能力の育成をねらっていく。）</p> <p>(2) 研究授業を行い、目指す児童像・授業像を明確にするとともに指導力向上を図る。研究授業は小研・大研を設定する。大研は学年部から1名ずつとし、その他を小研とする。</p> <p>(3) 事後研では、子どもの姿から学びを丁寧に見取っていく。実際の児童の行動や発言、表出したものから思考の流れを汲み取り、どこにその児童の学びがあったか、カリキュラムマネジメント表で設定した資質・能力の育成に迫っていたか、本時のねらいに迫っていたか等について協議していく。</p> <p>(4) 定期的なカリキュラムマネジメント研修を行い、カリキュラムマネジメント表（学級経営案を兼ねる）を作成する。</p>																																							
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">研究の計画</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>日程</th> <th>予 定</th> <th>備 考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>4/3</td> <td>推進委員会</td> <td>方針の確認</td> </tr> <tr> <td>4/15</td> <td>研究全体会① 今年度の方針 推進委員会</td> <td>今年度の研究について 研究授業の日程→学年で検討依頼 カリマネ表・資質能力表について 指導案の様式・事後研の方法</td> </tr> <tr> <td>4月</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>6/5</td> <td>カリマネ研修会</td> <td></td> </tr> <tr> <td>7/15</td> <td>大研①（5年）</td> <td></td> </tr> <tr> <td>7/31</td> <td>研究全体会② カリマネ研修会</td> <td>1学期ふりかえり</td> </tr> <tr> <td>9/16</td> <td>大研②（3年）</td> <td></td> </tr> <tr> <td>11/18</td> <td>大研③（1年）</td> <td></td> </tr> <tr> <td>12/24</td> <td>研究全体会③ カリマネ研修会</td> <td>2学期振り返り</td> </tr> <tr> <td>1月</td> <td>推進委員会</td> <td>来年度について・集録確認</td> </tr> <tr> <td>2/24</td> <td>研究全体会④</td> <td>来年度の方針</td> </tr> <tr> <td>3/3</td> <td>カリマネ研修会</td> <td>年間ふりかえり</td> </tr> </tbody> </table>	日程	予 定	備 考	4/3	推進委員会	方針の確認	4/15	研究全体会① 今年度の方針 推進委員会	今年度の研究について 研究授業の日程→学年で検討依頼 カリマネ表・資質能力表について 指導案の様式・事後研の方法	4月			6/5	カリマネ研修会		7/15	大研①（5年）		7/31	研究全体会② カリマネ研修会	1学期ふりかえり	9/16	大研②（3年）		11/18	大研③（1年）		12/24	研究全体会③ カリマネ研修会	2学期振り返り	1月	推進委員会	来年度について・集録確認	2/24	研究全体会④	来年度の方針	3/3	カリマネ研修会	年間ふりかえり
日程	予 定	備 考																																						
4/3	推進委員会	方針の確認																																						
4/15	研究全体会① 今年度の方針 推進委員会	今年度の研究について 研究授業の日程→学年で検討依頼 カリマネ表・資質能力表について 指導案の様式・事後研の方法																																						
4月																																								
6/5	カリマネ研修会																																							
7/15	大研①（5年）																																							
7/31	研究全体会② カリマネ研修会	1学期ふりかえり																																						
9/16	大研②（3年）																																							
11/18	大研③（1年）																																							
12/24	研究全体会③ カリマネ研修会	2学期振り返り																																						
1月	推進委員会	来年度について・集録確認																																						
2/24	研究全体会④	来年度の方針																																						
3/3	カリマネ研修会	年間ふりかえり																																						

<様式>

学校名	山形市立桜田小学校 山形市桜田東一丁目1番30号 TEL 624-5083 FAX 633-9794	校長	須藤 克郎
		研究主任	小笠原 恵
研究主題	仲間とともに学びを創る子供の育成(二年次)		
研究主題設定の理由	<p>本校の学校教育目標「未来をひらく、英知と力のある子供の育成」を具現化するためには、学校生活の中で生じる課題を自分事として捉えて、他者と協働して解決していくことや、互いを認め合いながら生活する経験を重ねていくことが重要である。そこで、昨年度からは「仲間とともに学びを創る子供の育成」という主題を掲げ、協働的な学びを目指して研究を進めてきた。その結果、「仲間とともに学ぶ」ためには、「よい聞き手」と「よい話し手」の育成が不可欠だということが見えてきた。相手を認め、安心感のある学級づくりを行い、主体的な発信や深い学びの土台をつくっていくことが大切だと再認識したところである。そこで、今年度は、「聞き手づくり」を授業づくりのベースとし、以下の3つの観点を意識した授業づくり・学級づくりを推進していきたいと考えた。</p> <p>【仲間から学ぶ】他者の考えを受け入れようとする子供（受容） 【仲間と学ぶ】互いに寄り添い、支え合おうとする子供（共感） 【仲間と広げる】学びをつなぎ、高め合おうとする子供（創造）</p> <p>3つの観点を往還させながら、すべての子供が「友達と学ぶ面白さ」を実感できる授業を展開し、学校教育目標の具現化を目指したい。</p> <p>以上より、今年度も引き続き、研究主題を「仲間とともに学びを創る子供の育成」と設定し、私たち教師が授業観の転換を図り、子供たちが学び方を身につけ、互いに学びを高め合う授業の実現に邁進していきたい。</p>		
研究の目標	学級全体、また、小集団での学習活動を通して仲間とともに学ぶ楽しさや面白さに気づき、自己の学びを創る子供を育成するための、学習指導のあり方を実践研究する。		
研究の内容	<p>本研究では、先述した3つの観点を往還させることで、協働的な学びを深めていく。</p> <p>また、子供たちの学びの価値観は、教師の日々の関わりから育まれる。「一人で悩むのではなく、仲間を頼ってよい」「他者との関わりで学びが豊かになる」と実感できる環境づくりに努めたい。</p> <p>「多様な考えが生まれる課題の提示」、「子供自ら聞きたい・伝えたいと思える学習活動の工夫」、「主体的な学び合いを促す手立て」など、授業の転換を図ることが必要となる。日々の実践を重ねながら、「仲間とともに学びを創る子供」を探っていけるとよい。</p> <p>「仲間とともに学びを創る子供の育成」の実現に向けた具体的な取り組みとして、下記のような取り組みができるのではないかと考えた。</p>		

	<p>●「仲間から学ぶ授業実践」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達の発表を聞く。(ペア、グループ、全体) ・友達の作品を観察、鑑賞 ・ヒント屋(ミニ先生)の活用 ・ICTの活用(まなびポケット「気づきメモ」での発言を見合う、友達が作成した「パワーポイント」を見るなど) <p>●「仲間と学ぶ授業実践」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意見交換や発表(ペア、グループ、全体) ・友達の発表や作品について感想を述べたり、質問をしたりする。 ・ヒント屋(ミニ先生)の活用 ・グループ単位で学習を進める ・ICTの活用(1つの資料を分担して作成するなど) <p>●「仲間と広げる授業実践」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達と考えを伝え合う、説明し合う(ペア、グループ、全体) ・新たな考え、少数派の考えを取り上げる。(教師主導もあり) ・「さらに」「もっと」の追究 ・ICT、ホワイトボード、付箋、思考ツールの活用(まとめる、広げる、整理するなど) ・グループ単位で学習を進める
<p>研 究 の 方 法</p>	<p>(1) 研究授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1学級1実践行う。学年部ごとに大研を1授業行う。 ・活動案の提案、実践後の事後研だよりの発行を行う。 ・目指す子供の姿に迫れるような実践を行う。 <p>(2) 研修会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講師を招聘しての研修会 ・OJT「スキマ参観」「レッスンシェア」により、授業を見合って教師力、授業力アップを図る。 <p>(3) 研究推進だよりの発行</p> <p>(4) 安定した学級づくり</p>
<p>研 究 の 計 画</p>	<p>4月 3日(金) 第1回研究推進委員会</p> <p>4月30日(木) 第1回研究全体会</p> <p>5月20日(水) 目指す子供の姿設定</p> <p>6月16日(火) 村山教育事務所計画訪問</p> <p>6月末まで 大研授業者、教科、日程決定</p> <p>6月～12月 授業実践、実践報告</p> <p>10月30日(金) 都留文科大学 古屋 和久先生をお招きしての研修会</p> <p>1～2月 研究のまとめ、来年度に向けての協議</p> <p>2月下旬 第2回研究全体会</p>

<様式>

学校名	山形市立南沼原小学校 山形市飯沢 59-2 023-643-3010	校長	山口 雅和		
		研究主任	小川 優美		
研究主題	“まわり” とつながり、自ら学ぶ子どもの育成 ～ 「見通し」「実行し」「振り返る」サイクルを意識した授業づくり～ (2年次)				
研究主題設定の理由	社会的な背景から グローバル化は我々の社会に多様性をもたらし、急速な情報化や技術革新は人間生活を質的に変化させつつある。1、2年先でも予測困難で先行き不透明な激動の時代といわれている。こうした変わりゆく社会に主体的に対応していくためには、生涯学び続けることが必要不可欠である。学齢が上がるに伴い、学習者自身が自ら学ぶべき内容や方法を選んでいく機会が増えていく。そこで、今の自分に必要な知識や技能は何かを判断し、効果的な学習方法を選択して学んでいく「自立した学習者」として学ぶ力を育成していくことが必要であると考えます。これからの学校では、自立的な生活習慣と自主的な学習習慣の形成、そして生涯求められる自己学習能力の育成がますます重要な課題となっている。				
	子ども達の実態から（昨年度末の反省より） 学習に限らず学校生活の中で人任せな姿勢が見られたり、ルールを守ろうとする意識が薄かったり、「自分だけじゃないから」「他の人もやっているから」など、周囲に流され「自分はどうか」「自分はどいうなりたいのか」という思いがもてない児童の実態が見えてきた。日常的に自分で判断し、自己決定、自己選択の機会を意図的に設けていくことで、児童の変容が見えてくると考えられる。また、学習に対する前向きな姿勢の高まりなども期待できると考えた。そこで、令和6年度まで研究の主体となってきた「協動的な学び」に加え、「個別最適な学び」を効果的に取り入れていく。				
	(1) 授業研究の進め方 学年単位				
	担任団	研究授業スタイル	責任の範囲	事前研	事後研

研究の内容および方法

A	小研	学年	学年で	学年＋参観者
B	フリー	個人	なし（相談○）	参観者
C	フリー	個人	なし（相談○）	参観者
D	ICT 活用授業	学年	なし （他の ICT 担当と）	学年＋参観者

大研…小研をする人の中から

学級	氏名	日時	教科や単元	ご指導
4-4	小川 優美	11月4日	未定	森田 智幸 准教授

(2) 事前研・事後研

◇事前研…小研は学年で行う。

大研は、学年と研究推進委員を主とし、必要に応じて教科主任や授業者の希望する方を交えて行う。（2週間前までに）

◇事後研…めざす子どもの学びの姿について授業づくりの視点に沿って話し合う。小研は学年＋参加者で、大研は全員参加で検証していく。
研究授業を参観した際は、感想記入用紙を活用し授業者にフィードバックしていく。

(3) ふりかえり

◇「校内研究だより」を発行しながら、授業研究会の視点を明確にして共有化を図る。

◇「研究紀要」（授業研究会の成果と課題を含む）を作成し、授業を通した子どもの姿について、個人で振り返る。

研究の計画

年間計画

4月	研究推進委員会①
5月	研究全体会① 研究推進委員会②（カリキュラムマネジメントについて）
6月	カリキュラムマネジメント作成
夏季休業中	ICT 活用研修会
8月	研究推進委員会③（今後の研究日程・紀要について）
11月	大研 研究全体会②
12月	研究推進委員会④（来年度に向けて）
1月	研究推進委員会⑤（反省など）
2月	研究全体会③

<様式>

学校名	山形市立宮浦小学校 山形市宮浦17-3 TEL 645-1479 FAX 645-8346	校長	工藤 博史
		研究主任	千場 一磨
研究主題	自ら問いをもって考え、思いを伝え合う子供の育成（8年次） 重点「言語能力を育む授業づくり」		
研究主題設定の理由	<p>本校の子供たちは、素直でエネルギーにあふれており、前向きに学習に向かおうとしている。その一方で、困難な課題にぶつかったとき、課題を自分事として捉え、前向きに取り組むことができないこともあり、粘り強さや自ら問いを持って考えようとする姿に課題があると考えられる。</p> <p>少子高齢化やグローバル化等によって社会構造が多様化し、めまぐるしく変化する時代の中で、新たな課題に対して、既存の知識だけにとらわれることなく、他者と互いの思いや考えをすり合わせながら最適解を見つけていく、しなやかな生き方が必要となる。そこで重要となるのは、「自ら学ぼうとする意欲」であると考え。与えられた課題だけをこなしていくのではなく、「なぜだろう」「不思議だ」「調べたい」「解決したい」といった知的な探究心を持ちながら生活できるような子供を育てていきたい。また、探究するには、他者の存在が不可欠であると考え。子供たち同士が互いに思いを伝え合い協働的に解決したり、互いを認め合いながら生活する経験を重ねていったりすることができるようにしていきたい。そこで、本校の研究主題を、昨年度に引き続き、「自ら問いを持って考え、思いを伝え合う子供の育成」とすることとした。受け身の姿勢で学ぶのではなく、自ら課題を見出し、その解決のために、習得した知識・技能を活かしながら思考し、協働的に学ぶ過程を大切にしたい授業づくりを行っていきたい。また、本研究主題は、学習指導要領が掲げる「主体的・対話的で深い学び」という授業改善の視点にも直結するものであると考え。学習指導要領の趣旨を十分に踏まえながら、育てたい資質・能力をより明確にし、授業力の向上に努めていきたい。</p>		
研究の重点	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">言語能力を育む授業づくり</div> <p>本校が資質・能力として共通理解しているものは、学習の基盤となる「言語能力」「課題発見・設定能力」「自己調整力」の3つである。この中でも、本校の子どもたちに最も必要な資質・能力は、「言語能力」である。そこで、今年度の重点も「言語能力を育む授業づくり」と設定した。</p> <p>外部講師の指導を仰ぎ、「言語能力」を「根拠をもって、論理的に説明する力」と焦点化した。「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という探究的な学びにおいて、言語能力を含む3つの資質・能力を一体的に高められるような教育活動を展開していく。</p>		

研究の内容・方法

1. 研究実践年間プランの作成

学級経営案及び教科の指導案としての性格を持ち合わせた、「研究実践年間プラン」の作成を行う。作成は学期ごとに行い、教育計画に位置づけていく。学級担任が、一年間で育てたい資質・能力（言語能力は必須）を明確にしなが学級経営と単元計画を行う。基本的に個人で作成していくが、学年や学年部で検討する時間を設けるなど、複数人で取り組んでいく。また、研究実践年間プランの作成は、山形大学名誉教授である中井義時先生より専門的な指導を仰いでいく。子供たち同様、教職員も一人の学び手である。自己の課題を持ち、授業改善に意図的・計画的・継続的に取り組む「自律した学び」を行い、授業力の向上を図っていきたい。

2. 単元計画タイム（Tタイム）の実施

会議のない金曜日の放課後 16:00 から 30 分程度を単元計画タイム（T タイム）として位置づけ、学年や学年部ごとに単元・授業について考える時間を設定する。日ごろ学級事務に追われがちな放課後の時間を、授業について語り合う時間としてきちんと確保することで、学年として計画的に子供たちを育てていきたい。また、ベテラン教員からすぐれた教育技術を継承する場としても活用されていくことを期待している。

3. 授業研究会の実施

授業の提案（小研）は、すべての学級が行う。授業づくり等は、基本的に学年で進めていくが、学年部で進めたり、同じ教科を研究している者同士で進めたりするなど柔軟に対応する。単元デザイン表に加え、本時案、授業の視点、事後記録などを作成し、職員全員に周知する。参観した教員は、授業の視点に沿った見解や自由な視点で自分が学んだことなどを授業者に伝える場を設定する。小研に加え、今年度も 1 2 月に大研を設定し、本校の子どもの育ちを全職員で語り合う機会を設ける。

4. いつでもだれでもできる授業づくり

回数は決めずに、挑戦できる人が行う。授業を見てほしい人を自分で決め、実践を続ける。参観者からの助言をもとに、授業力向上を目指す。また、互いに授業を公開し、学び合うことにも取り組んでいく。

研究の計画

4月	・研究推進委員会 ・研究全体会（1年の見通し）	10月	
5月	・研究実践年間プラン研修会① （研究実践年間プラン作成①） ・研究全体会	11月	・研究推進委員会 ・事前研（大研学級の授業づくり）
6月		12月	・校内研大研・事後研 ・研究実践年間プラン研修会③ （研究実践年間プラン作成③）
7月	・研究全体会 （1学期の実践振り返り）	1月	
8月	・研究実践年間プラン研修会② （研究実践年間プラン作成②）	2月	・研究推進委員会 ・研究全体会 （今年度の振り返り、来年度の方向性）
9月		3月	・研究のまとめ

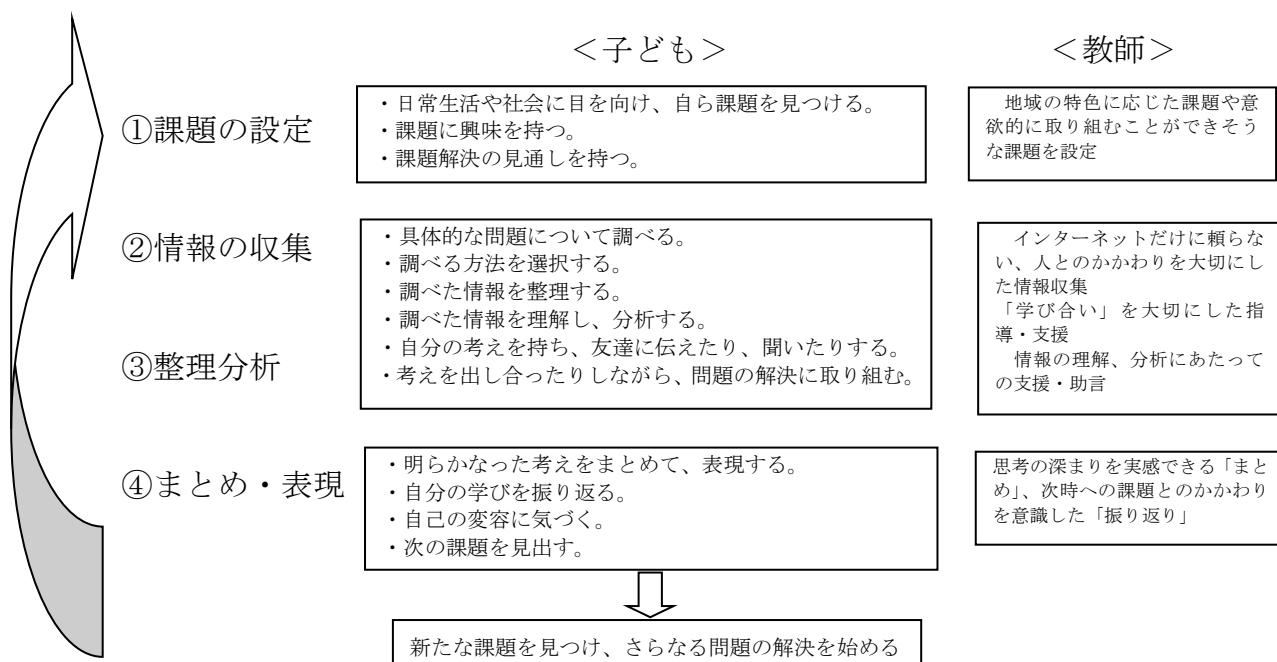
1学期の実践 (5月～7月)

2学期の実践 (8月～9月)

3学期の実践 (10月～12月)

学 校 名	山形市立蔵王第一小学校 山形市蔵王成沢西四丁目3番17号 TEL688-2210 FAX688-9041	校 長	鈴木 章人
		研究主任	松井 美和子
研 究 主 題	主体的に学びやくらしを創る子どもをめざして（1年次） ～生活科・総合を中心にした単元づくりを通して～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>本校では、学校教育目標「豊かな心を育み 自ら学び たくましく生きる子どもの育成」の具現化を目指し、平成30年度より研究主題「主体的に学ぶ子どもの育成」を掲げ、継続して授業改善に取り組んできた。学び合い、まとめ、振り返りといった学習過程を大切にしながら、子どもが自ら問いをもち、自ら学びをつくっていく授業のあり方を探ってきたことは、本校の教育実践の確かな土台となっている。令和7年度においては、「思いや考えを伝え合う力を高めるために」を副題として研究を進め、「自分の考えをもつこと」と「思いを表現する場の設定」を授業づくりの視点として大切にしてきた。こうした取り組みにより、子ども達の主体的な学びの姿には着実な高まりが見られた一方で、学びをさらに深めるためには、自分事として学習やくらしに主体的に働きかけていくこと、解決方法を自ら考え試行錯誤しながら粘り強く取り組むこと等に課題が見られた。</p> <p>加えて、令和8年度蔵王一小学校経営基本方針として「ざ・お・う」を合言葉に、主体的に生き未来を切り拓く力を育むことが掲げられている。「ざ=嶄然と、自分の良さを発揮し存在感をもつ子ども」「お=お互いを認め合い、自己肯定感を高め、多様性を尊重し協働的に学ぶ子ども」「う=うみ出し、つなぐ、受け止める、探究・創造・主体性をもって未来を創る子ども」を育てることが、本校の目指す子ども像である。</p> <p>そこで、令和8年度は、生活科・総合的な学習の時間を核としたカリキュラムを作成し、地域や生活に根ざした学習を通して、子どもが自ら問いを見だし、探究の過程を繰り返しながら学びを深めていく研究を進めていく。本校で特に力を入れて伸ばしていく資質・能力を「自己調整力」に絞り、生活科・総合的な学習の時間・生活単元学習（特別支援学級）を中心にしたカリキュラム・マネジメント表を作成、活用しながら学習指導の充実を図る。</p>		
研 究 の 重 点	<p>(1) 生活科・総合的な学習の時間・生活単元学習を中心としたカリキュラム・マネジメント表を作成、活用し、資質・能力（自己調整力）を伸ばしていく。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>本校で捉える自己調整力とは・・・ 学習の目標設定・方法選択・振り返りを自ら行い、必要に応じて学習の進め方や行動を調整する力</p> </div> <p>(2) 自己肯定感を高める学級づくりを土台とする。 (学級で認められる、支援される風土作り)</p>		

(3) 単元の中で、「課題の設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という探究のプロセスを意識した過程を心がけ、教科でつけた力を生かしていく。



(4) 校内研修会を実施し、生活科・総合的な学習の時間・生活単元学習の特性に応じた単元づくりについての研修を行う。

研究の方法

(1) 授業研究会（全ての授業研に外部講師を招聘する）

①大研：各学年部で1授業（低学年部1、中学年部1、高学部1、特別支援教育部1）
 今年度は、大研は生活科・総合的な学習の時間・生活単元学習で行う。
 指導案は全員に配付し、参観、事後研究会に参加する。

小研：大研をしない学級で行う。学年で一つは生活科・総合的な学習の時間で行う。
 指導案は全員に配付するが、参観、事後研究会は学年部と自主参加者で行う。
 参観し、事後研に出ない場合は、用紙に感想を書いて授業者に渡す。

②研究の教科について

- ・生活科・総合的な学習の時間・生活単元
 ～授業研は学級、学年でのどちらでもよい。
- ・生活科・総合の単元と関連のある教科

③指導案の形式

- ・指導案1～ 学年カリキュラム・マネジメント表（形式は自由）
- ・指導案2～ A4 1枚に 単元について・単元の目標・簡単な指導計画・本時の目標・本時案等

④事前研の進め方

- ・学年部で行う。（1～2週間前まで）
- ※構想段階で相談したい場合は、その都度時間を設定する。

⑤事後研の進め方

- ・資質・能力を育む「単元」になっているかを検討する。
- ・育てたい資質・能力にせまることができているか、子どもの姿を通してみとる。
- ・成果と課題をワークショップ形式で行う。
- ・外部講師を招聘し、指導をしていただく。
- ・研究のまとめの形式については、推進委員会等で検討していく。

(2) 校内研修

- ・外部講師を招聘し、生活科・総合的な学習・生活単元学習についての研修を行う。

(3) 研究紀要の作成

- ・研究授業だけでなく、年間を通したカリキュラムの中で育った子どもの姿や有効だった指導の手立て等を研究紀要にまとめ、次年度へ生かしていく。
- ・カリキュラム・マネジメント表を共有していく。

(4) 研究の組織

研究推進委員会～研究についての指針を決定するとともに、内容を討議し推進を図る。

- ・校長 ・教頭 ・教務（橋本） ◎松井
- ・1年（塚本） ・2年（後藤） ・3年（本間） ・4年（成澤）
- ・5年（佐藤） ○6年（福岡） ・特別支援（伊藤）

研究の計画

今年度の研究計画

日 時		内 容
4 / 3 (金)	研究推進委員会	目指す子どもの姿、研究の内容、方法、計画の検討
4 / 28 (火)	全体会	目指す子どもの姿、研究の内容、方法、計画の提案
7 / 8 (水)	大研①	6年2組 福岡先生（総合的な学習）
7 / 10 (金)	研究推進委員会	
7 / 17 (金)	全体会	
7～8月	校内研修会	生活科・総合的な学習について
9 / 11 (金)	大研②	3年1組 本間先生（総合的な学習）
11 / 18 (水)	大研③	1年1組 塚本先生（生活科）
11～12月	大研④	わかば学級 伊藤先生（生活単元学習）
11 / 27 (金)	研究推進委員会	今年度の成果と課題、研究紀要について
12 / 14 (木)	全体会	今年度の成果と課題、研究紀要について
2 / 12 (金)	研究推進委員会	次年度の方向性
2 / 22 (月)	全体会	〃
2月下旬		紀要原稿〆切

※小研の日程については、別で調整する。

※研究推進委員会については、必要に応じて適宜行う。

<様式>

学 校 名	校 長	山科 典子
	研究主 任	横尾 可織
研 究 主 題	主体的に学ぶ子どもの育成（2年次） ～一人一人が課題・見通しをもって学ぶ授業づくり～	
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>変化の激しい現代社会の中で、自分の良さを認識し、高い志をもって意欲的に物事に取り組んだり、多様な人々と協働しながら豊かな人生を切り拓いたりする力を身に付けることが求められている。その時代に求められる資質・能力を身に付けるために、生涯にわたって学び続けるためには、知識や技能の習得のみではなく、「何のために学ぶのか」「どのように学ぶか」という課題に向き合い学びの質を高める指導方法を吟味していく必要がある。</p> <p>本校では『あかるく・かしこく・ねばり強く「あかねっこ」の育成』を学校教育目標に掲げ、教育活動全体を通して、「自分も相手も大切に子ども」「主体的に考え行動する子ども」「なりたい自分に向かって挑戦し続ける子ども」の育成を目指している。その具現化のために、「分かった」「できた」が実感できる授業や、自己の成長を実感できるような授業づくりに取り組んでいる。</p> <p>【これまでの研究について】</p> <p>令和3年度から令和6年度の4年間は、「思いを互いに伝え合い、学びを高める子どもの育成」を研究主題とし、【思いを互いに伝え合う子ども】【学びを高める子ども】の育成を目指して実践を積み重ねてきた。4年目となる令和6年度には、副題として「子どもが自ら学ぼうとする授業づくり」を掲げ、子どもを「主体的な学習者」として育てることを目標とした。ここでいう『主体的』とは、単に自分の考えを積極的に発言することではなく、「学習の見通しをもち、自ら学ぼうとする意欲が生まれること」と教師間で共通理解を図り、研究を進めてきた。</p> <p>令和7年度は、これまで副題であった「子どもが自ら学ぼうとする授業づくり」をさらに焦点化し、「主体的に学ぶ子どもの育成」を研究主題として取り組んだ。目指す子どもの姿（＝主体的な姿）を教師間で共有し、子どもの実態を丁寧に見取ることで、子どもと教師が共に成長していくことを目指した。主体性をどのように捉えるか、またどのような姿を主体的とみなすのかについて議論を重ね、「自分の課題、見通しをもつ」「考えを深める」「学びをつなぐ」という3つの柱を設定した。この3つの柱を明確にしたことで、事後研究会での議論が焦点化され、日々の授業づくりにおいても教師の指針となっている。研究を進める中で、これらの柱の有効性が徐々に明らかになってきている。</p> <p>【今年度の研究について】</p> <p>昨年度の研究から3つの柱の有効性が見えた。一方で、子ども自身が学習のゴールを明確にすることで、どのように学べばよいのか見通しをもてる単元構成の必要性や、必要感のある課題や問いを設定することで、学習者としての子どもを育てていきたいという課題も明らかになった。</p> <p>そこで今年度は、3つの柱の一つである「自分の課題・見通しをもつ」に焦点を当て、研究を進める。副題を「一人一人が課題・見通しをもって学ぶ授業づくり」とし、なりたい自分や学習のゴールに向かって主体的に学ぶ姿の育成を目指す。</p> <p>また、次年度以降は「考えを深める」「学びをつなぐ」にそれぞれ焦点を当てて研究を進めることで、「主体的に学ぶ子どもの育成」に関する研究を4年間かけて深化させていきたい。</p>	

主体的に学ぶ子ども

めざす子ども像

- ・相手意識をもって言語活動を行う。
 - ・学習したことを生活場面に生かせる。(学習と生活・体験をつなぐ)
 - ・新しい課題でも既習を生かすことで解決しようとする。
 - ・目指したいモデル(指導者・友達・尊敬する人など)がいる。
 - ・自分の目標(ゴール)がある。
 - ・自己決定、自己選択がある。(めあて、やり方も含めて)
 - ・安心して「わからない」「どうして」が言える。
 - ・間違いを大切にできる。
 - ・試行錯誤しながら、努力する。(過程を大切にできる。)
 - ・「知りたい」「学びたい」という意欲がある。
 - ・友達と相談したり一緒に考えたりする。
 - ・自分と友達の考えを比べながら聞く。
 - ・目標に向かうために何をすべきか、共通理解が図られている。
 - ・自分に合った方法で学んでいる。
- ※研究を通し、主体的な子どもの姿を増やすことを目指す。

研究の内容

目指す子ども像の具現化に向けて、授業づくりの3つの柱をもとにしながら実践を積み重ね、授業改善につなげる。その中でも、今年度は「自分の課題・見通し」に焦点を当て、授業の工夫・手立てを探っていく。

課題をもつ

- ・既習や経験と結び付けて課題を捉えようとしている姿
- ・自分で課題や疑問を見つけて解決しようとする姿
- ・なぜ、どうしてという自発的な課題意識をもっている姿
- ・やってみたい、できそうという思いをもっている姿

→既習事項の掲示

→前時のふりかえりの活用

→子どもたちの身近なところ、生活と繋がる場所からの課題の設定

→必要感のある課題設定

→学び方を自分で選択できる場の設定

→ズレやゆさぶりのある授業の組み立てや提示

見通しをもつ

- ・課題や学習活動の流れを理解し、動き出そうとする姿
- ・単元や本時のゴールが分かり、そのゴールへの到達のしかたを自分なりに考えている姿
- ・課題を解決する手段を選び、学びに向かう姿

→単元の流れが分かるような掲示の工夫

→単元を貫いためあての共有

→ホワイトボードなどの教具の活用

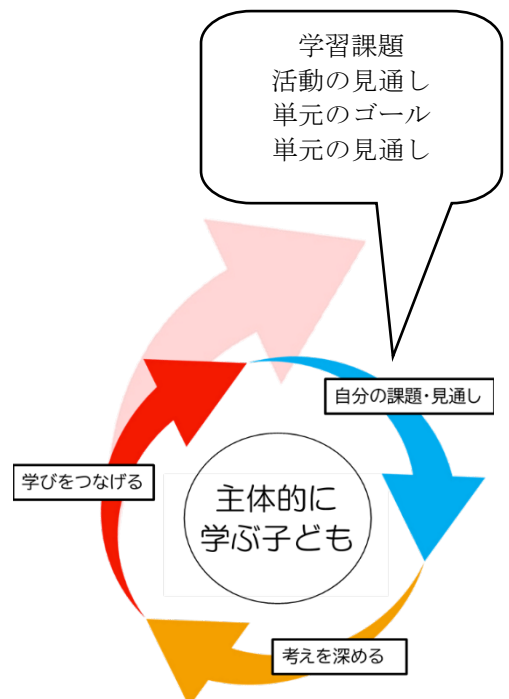
目標(ゴール)の設定

- ・つきたい力、なりたい姿を子ども自身がもっている姿
- ・目的をもち、達成しようとする姿

→学習環境の整備(手段・道具)

→適切な情報や資料等との出会わせ方の工夫

→単元の始めの目標の共有



研究の方法

(1) 授業研究会

①研究の教科

- ・授業者は、子どもの実態や挑戦したい意思により教科を選択する。

②授業研究の進め方

- ・研究主題に基づいた授業実践を行う。
- ・研究授業日の1か月前までには、構想の会を開く。構想の会の後に、授業者は指導案を作成し、事前研究会（指導案をもとにして）を行う。
※授業日の2週間前を目安に事前研究会を行い、助言者への指導案は1週間前をめどに提出。
- ・事後研究会では、2グループに分かれて具体的な子どもの姿や事実をもとに、授業の視点にそった話し合いをする。その後、グループで話し合われた成果や課題を全員で共有する。
- ・事後研究会日より（A4サイズ1枚に、グループごとの話し合いのまとめ、授業者からの一言、指導助言で出された成果や課題を簡単にまとめたもの）を授業者が作成・配付し、次回の授業に生かす。（授業後1週間を目安に）

③指導案（授業デザインシート）について

- ・子どもの思考の流れと授業づくりで大切にしたい柱が明確になる指導案を作成する。本時案は、板書計画を中心にした形式にし、本時で押さえるべきポイントを明確にする。
- ・授業を参観する側からも、本時の流れが見やすい形式にする。

(2) 校内研修

- ・可能な限り、全ての研究授業に外部講師を招聘し、課題の共有と教員個々のスキルアップのための研修を行う。

(3) 先進校視察

- ・県内外の先進校を視察し、学んだことを研究に生かす。（オンラインでの参観も含めて）

(4) 研究紀要の作成

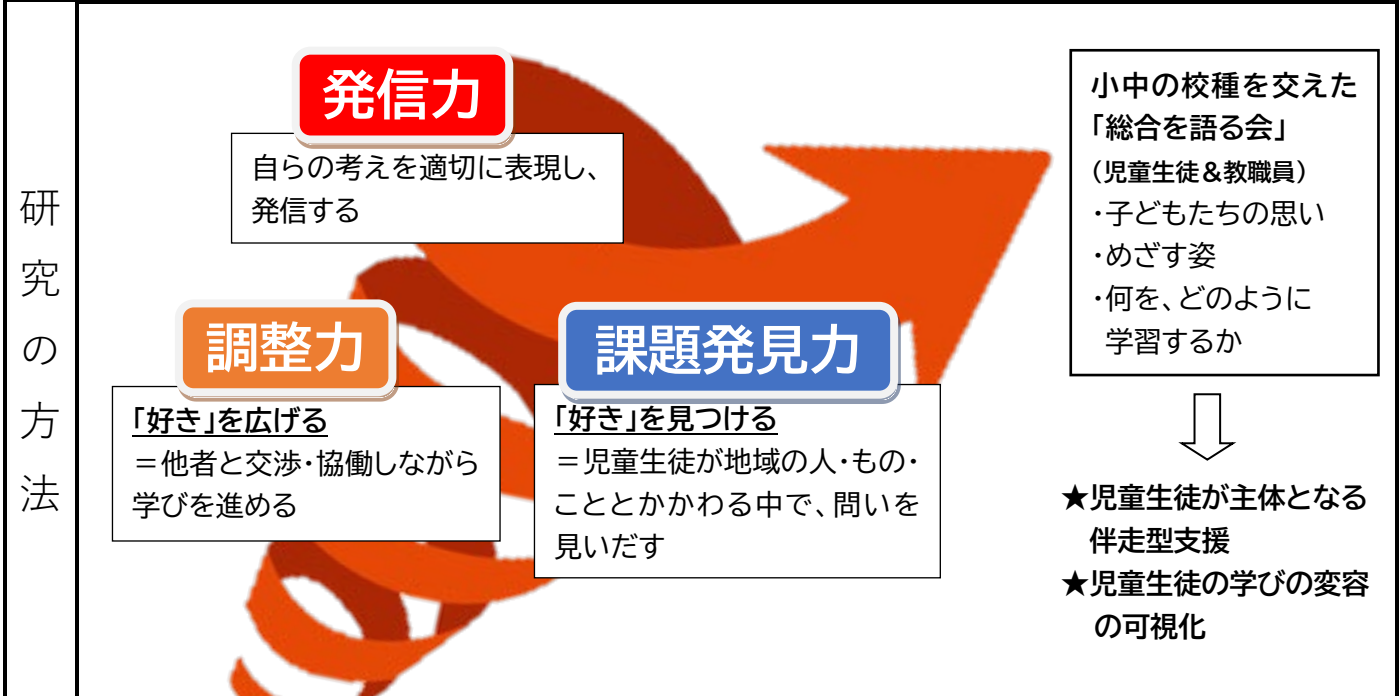
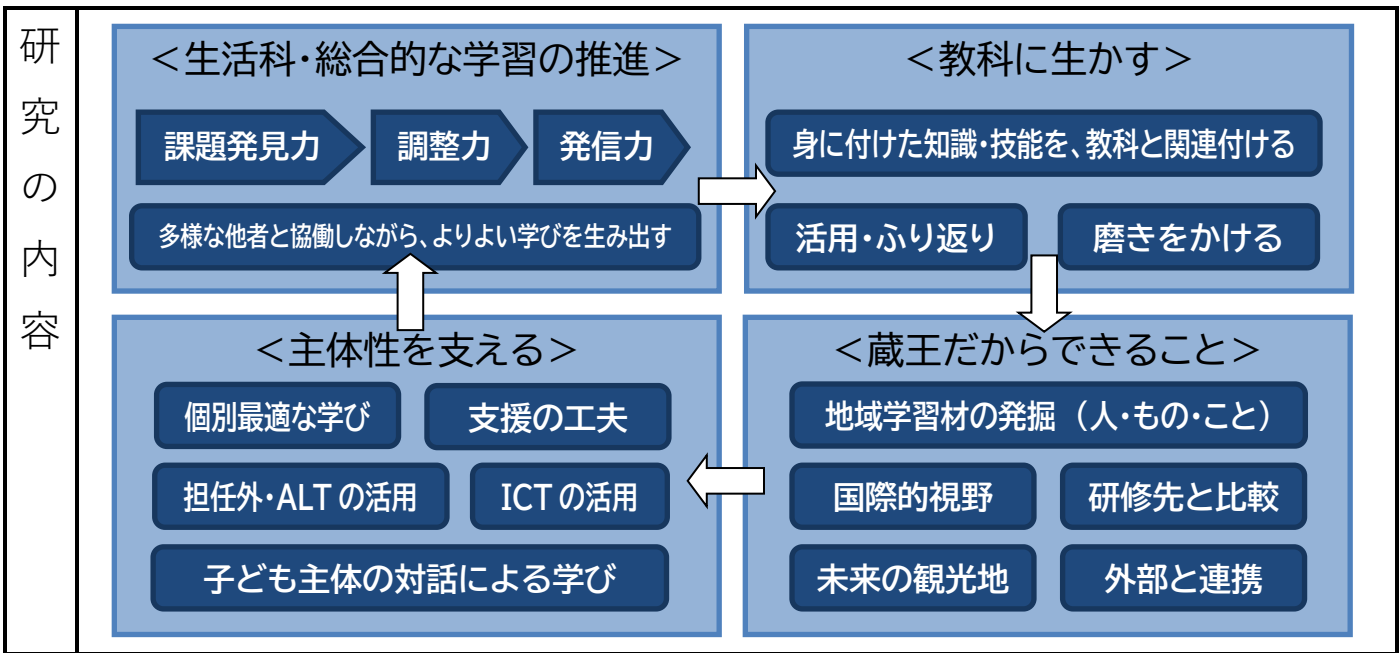
- ・授業研究会で実践したことを研究集録にまとめ、次年度の研究に生かす。
- ・実践を振り返って、研究授業だけでなく、その後の単元や他教科の学習でも見られた子どもの成果や課題をまとめる。

研究の計画

研究推進委員会は必要に応じて適宜行う。

日程	予定	内容
4 / 6 (月)	研究推進委員会①	研究概要、全体会の内容
4 / 20 (月)	研究全体会①	研究概要、グループ討議
	研究推進委員会②	研究の方法、日程、授業研の進め方
6月～12月	研究授業7回	4年 体育
		6年 算数
		1年
		2年
		3年
		5年
		こまくさ1・2組
1月	研究推進委員会③	全体会の計画
1月	研究全体会②	今年度の振り返り
2月	研究推進委員会④	次年度の方向性
2月	研究紀要原稿締め切り	

学校名	山形市立蔵王第三小・蔵王第二中学校 山形市蔵王温泉字丈二田727番地 TEL694-9042 FAX694-9373	校長	稲葉 健一
		研究主任	武田 俊紀 村山 隆太
研究主題	蔵王の魅力を探究し、国際的な視野で未来を創造する子どもの育成 ～地域の人・もの・こととかわり、課題発見力・調整力・発信力を高める～ <2年次>		
研究主題設定の理由	<p>本校は小中併設の極小規模校であり、児童生徒一人一人の実態や思いを丁寧に捉えながら教育活動を展開できるという強みをもつ。一方で、多様な価値観に触れる機会や人間関係の広がりに限られやすく、主体的に課題を見だし、他者と協働しながら解決していく力を意図的に育成する必要がある。こうした学校の特性と課題を踏まえ、本研究主題「蔵王の魅力を探究し、国際的な視野で未来を創造する子どもの育成」を設定した。</p> <p>本校が位置する蔵王地域は、温泉や樹氷をはじめとする豊かな自然環境と観光資源に恵まれており、地域そのものが学びの教材である。この地域資源を生かし、実社会とつながる探究的な学びを展開することは、児童生徒がふるさとに誇りと愛着をもちながら学ぶ上で極めて有効である。また、観光地である蔵王には国内外から多くの人々が訪れることから、地域課題を国際的な視点で捉えることが可能であり、グローバルな視野を育む契機にもなる。</p> <p>そこで本研究では、「課題発見力」「調整力」「発信力」の三つの資質・能力を中核に据えた。児童生徒が地域の人・もの・こととかわる中で問いを見だし(課題発見力)、実現に向けて他者と交渉・協働しながら学びを進め(調整力)、自らの考えを適切に表現し発信する(発信力)という一連の学習過程を重視している。これらは、変化の激しい社会において主体的に生きるために不可欠な力であり、学校教育目標である「賢く 強く たくましい児童生徒」の育成とも深く結び付くものである。</p> <p>昨年度は、総合的な学習の時間を軸に教科横断的な学びを意識し、「総合を語る会」の実施などにより児童生徒の主体的な思いや願いを大切に学習づくりを進めてきた。その結果、学年の発達段階に応じて地域との関わりを広げながら探究を深める姿が見られ、三つの資質・能力の育成に一定の手応えが得られた。一方で、学びの連続性や系統性の明確化、より多様な他者との関わりでの創出といった課題も明らかになった。</p> <p>以上のことから、本研究主題は本校の教育目標の実現に資するものであり、地域の特性と児童生徒の実態を踏まえたものである。2年目においては、これまでの成果と課題を踏まえ、探究の質をさらに高めるとともに、資質・能力の育成をより一層確かなものとする教育実践の充実を図っていく必要がある。</p>		
研究の目標	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p style="text-align: center;">学校教育目標 賢く 強く たくましい 児童生徒の育成 建学の理念「含英」</p> <p style="text-align: center;">「確かな学力の育成」「蔵王の未来を考える教育活動の充実」</p> <p>めざす児童生徒の姿</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;">蔵王の魅力を探究し、ふるさとを誇りに思う子ども</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;">多様性を受け入れ、国際的な視野で未来を創造する子ども</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;">いのち輝く自他の存在を認め、自己実現に向けて挑戦する子ども</div> </div> <p style="text-align: center;">学校研究 蔵王の魅力を探究し、国際的な視野で未来を創造する子どもの育成 ～地域の人・もの・こととかわり、課題発見力・調整力・発信力を高める～</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 25%;">感性を磨く体験・交流活動の推進</div> <div style="width: 70%;"> <p style="text-align: center;">児童生徒の主体性を支援し、活動を共に探究する</p> <p style="text-align: center;">多様な他者とかわることで、協働的な学びを工夫する</p> <p style="text-align: center;">生活科や総合的な学習の時間、各教科において、地域の素材を活かした学習材を発掘する</p> </div> </div> </div>		



研究の計画

期日・時期	内 容
4月 3日	第1回研究推進委員会(今年度の研究について)
4月 27日	第1回校内研究会(今年度の研究について)
6月 11日	第1回総合を語る会(児童生徒・教員)
7月 31日	第1回校内研修会(外部講師を招いた研修会を予定)
9月～10月	第2回総合を語る会(児童生徒・教員)
10月 22日	文化・学習発表会(山形市教育委員会委嘱研究校:公開日)
11月 27日	第2回研究推進委員会(研究のまとめについて)
12月 11日	第2回校内研究会(研究のまとめについて)
2月 15日	第3回研究推進委員会(次年度の研究構想・計画について)
3月 9日	第3回校内研究会(次年度の研究構想・計画について)

<様式>

学 校 名	山形市立南山形小学校 山形市大字松原字東河原188番地 TEL 688-2430 FAX 688-9043	校 長	遠藤 克裕
		研究主任	朝倉 諒
研 究 主 題	主体的に学びを求め、互いに認め合って生活する子どもの育成（4年次）		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0 時代」の到来、新型コロナウイルス感染症によって医療・教育・経済等の問題が引き起こされたことを代表する「予測困難な時代」において、一人一人が自ら考え、判断して問題を解決していく主体的な態度が求められている。また、一人ひとりの個を尊重し、様々な価値観を共有しながら課題を乗り越えていく協働的な態度も求められている。</p> <p>このような社会的背景を踏まえ、本校では、これからの時代を生き抜くことができる子どもたちを育てるために、重点目標として「主体的に学びを求め、互いに認め合って生活する子ども」を設定している。この達成のためには、具現化への方策が明確であることに加え、教職員のベクトルが同じ方向を向いていることも重要であると考え。従って、今年度は学校教育の重点目標＝研究主題とし、よりシンプルに、教職員が目指す方向性を一致させて校内研究に取り組むこととした。</p> <p>本校の子どもたちは、とても素直で、前向きに学校生活を過ごしている。また、コロナ禍が終わり、関わり合いが増えたことにより、話し合うことの重要性や楽しさを感じ取る姿が少しずつ見られるようになってきている。一方で、自分から進んで学ぼうとしたり自信を持って表現したりすることが苦手な子どもが多く、仲間との違いを受け入れることができない場面も見られる。そこで、育成したい資質・能力を『主体性』と『協働性』とし、これらを柱に重点目標（研究主題）に迫ろうと考えた。職員間での主体性と協働性の捉え方が曖昧だったという反省を踏まえ、今年度は育成したい資質・能力を下記のように設定し、より具体的に捉え、研究に取り組んでいくことにした。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>主体性…○自ら課題を見つけ、進んで解決する力 ○粘り強く取り組み、学びを生活に生かす力</p> <p>協働性…○相手のよさや苦手なことも、互いに認め合う力 ○思いや考えを伝え合い、よりよいものを生み出す力</p> </div>		
研 究 の 目 標	育成したい資質・能力の主体性と協働性を柱として、日々の授業づくりを行いながら、授業改善・授業力の向上を目指す。		
研 究 の 内 容	<p>（1）日常的な授業実践</p> <p>子どもの思いに寄り添った単元構成や主体性と協働性を育成する単元のあり方などについては、日々追究し、日常的に子どもの成長を目指して実践する。また、授業だけではなく、学校行事、委員会活動やクラブ活動、たてわり班活動、清掃など教育課程全体で子どもを育てていく。</p> <p>（2）学級カリキュラムマップの作成</p> <p>学級経営案と学級カリキュラム、両方の性格を持つカリキュラムマップを作成する。「A3」1枚にまとめ、つけたい資質・能力が育まれたのか可視化できるようにしたい。また、定期的に更新し、PDCAサイクルをしっかりと回していくものとする。</p>		

(3) 校内授業研究会

校内授業研究会を通して、教師の授業力を高め、日常の授業の充実・改善に生かしていく。授業研究は学級経営の中核となり、重点に迫りやすい教科「国語」「算数」「生活・総合」から決定して実践を積み上げる。

- ①大研…今年度は、低学年1回、中学年1回、高学年1回の計3回とする。全員が参観する。
- ②事前研究会…学年で構想し、各学年部で指導案を検討する（下学年部会は1～3年、すぎのこ学級、教務主任とし、上学年部会は4～6年、すぎのこ学級、担任外とする）。事前研の日程は、研究推進委員と教務主任で調整する。
- ③事後研究会…主体性と協働性の育成を実現する授業のあり方について多角的な見方から迫っていけるようにする。外部講師を招聘し、指導を仰ぐ。
- ④研究のまとめ…授業者以外の教員がまとめ、次の研究授業や日々の授業づくりに生かせるようにしていく。

研究
の
方法

授業構想（学年で）

- ・授業者の思いや授業構想の共通理解
- ・大まかな単元の指導計画や本時の展開の検討

指導案作成

指導案検討（事前研）（上下学年部で）

- ・単元計画、本時の目標・学習活動・評価の一貫性、資質能力を育てるための手立てや工夫が適切か検討

指導案修正→指導案完成 （1週間前まで）

授業研究会（全員参観）

- ・育成する資質能力を中心に、子どもたちの主体的な学びの姿を見取る。
- ※授業記録や写真は学年部で分担

事後研究会（全員参加）

- ・子どもの学びの姿を中心に、手立てや工夫について
- ・重点や資質能力、カリキュラムマップと授業との関連について

研究だより「東雲」発行

授業者の振り返り、授業研での学びをこれからの日々の授業にどう生かすか、お互いの授業力の向上につながるように、成果と課題をまとめる。（学年部で発行担当を決める）

研究 の 計 画	月	校内研究全体会	大研（低・中・高、1ずつ）
	4	13日（月）研究推進委員会① 21日（火）研究全体会①（研究概要・進め方） 22日（水）総合・生活構想 30日（木）学カリ研修①（山大中井先生）	
	7	16日（木）研究全体会③（授業研・事後研） 9日（木）研究推進委員会② 27日（月）研究全体会④（1学期反省） 31日（金）学カリ研修②（山大中井先生）	16日（木）大研①
	11	19日（木）研究全体会⑤（授業研・事後研）	19日（木）大研②（候補日）
	12	11日（金）研究全体会⑥（授業研・事後研） 15日（火）研究推進委員会③ 21日（月）研究全体会⑦（2学期反省）	11日（金）大研③（候補日）
	2	2日（月）研究推進委員会④ 16日（月）研究全体会⑧（今年度の成果と課題）	

<様式>

<p>学校名</p>	<p>山形市立みはらしの丘小学校 山形市みはらしの丘三丁目4番地 TEL 023 - 689 - 0181 FAX 023 - 688 - 2333</p>	<p>校長</p>	<p>馬場 賢</p>
<p>研究主題</p>	<p>自ら考え、深く学び合う子ども ～自分事として学ぶための授業づくり～</p>		
<p>研究主題設定の理由</p>	<p>本校では、教育目標を次のように掲げている。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>夢と感動 勇気と感謝 みはらしの丘の未来を創る 生きる力にあふれる子どもの育成</p> </div> <p>現在みはらしの丘小に通う子どもたちが、成人し社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎える。生産年齢の人口減少、グローバル化の進展、絶え間ない技術革新等と、変化の予測が困難な時代になる。このような社会の変化に受動的に対応するのではなく、主体的に関わり自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となってほしいと考える。</p> <p>そのためには、授業において主体的・対話的で深い学びを実現し、資質・能力を確実に育成することのできる校内研究にしていきたい。</p> <p>そして、一人一人が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることを目指していく。</p>		
<p>授業づくりの視点</p>	<p>～「自分事として学ぶ」とは～</p> <p>子どもが、主体的に学ぶ姿勢を養い、「生きる力」を育てていくためには、学習の内容や活動を自分の事として捉え、人生や社会、生活等と関係付けたり他者と関わったりしながら学びを深めていく「自分事としての学び」が大切になる。</p> <p>「自分事としての学び」は、子どもが「問いや考え」を「個別最適な学び」と「協働的な学び」を繰り返す中で再構成し、その過程で目指す資質・能力を育てていく「子どもが主体となる学習」を指している。</p> <div style="text-align: center;"> <p>深い学び 自分の身の回りのもの・こと・ひとに対する見方が豊かになる</p> <p>主体的な学び 自己実現 ・思いや願いの実現 ・自分事の問題解決 ・自分にとっての意味や価値</p> <p>対話的な学び 承認・共感・メタ認知 ・受け入れる ・分かり合おうとする関係 ・他者の見方で物事をみる</p> <p>子どもが深い学びに向かうための授業者の役割 子ども理解・教材研究・環境 ・子どもの言動の洞察・深い教材研究・自己選択・自己決定 ・目的意識と見通しの見取り・単元のデザイン・環境の整備 など</p> </div>		

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">研究の方法</p>	<p>(1) 研究授業について 全職員が指導案を書いて授業を公開する。 授業づくりは全職員が行う。</p> <p>① 研究企画授業研究会（全体研）年3回</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全員で研究の方向を確かめるため、1学期の早い段階で1回目（企画研）ができるとうましい。 ・職員全員で参観し、事後研究会を行う。 ・事前研や授業づくりのアドバイス等は学年部で行う。 ・全体研授業者は、授業前に指導案（裏表1枚）を作成し、職員室共有にデータを入れる。また、プリントアウトし、職員室前の引き出しに入れる。 ・外部から講師の先生を招き、指導していただく。 <p>② 学年授業研究会（学年研） 各学年・支援学級</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体研を行わない教員が授業を行う。（学年の教員全員が参観する。） ・事前研、事後研は学年と希望者で行う。 ・支援学級は、事前に参観することを担任に伝え、必要に応じて参観する。 ・指導案（裏表1枚）は職員室共有にデータを入れておく。また、プリントアウトして職員室前の引き出しに入れる。 ・授業2週間前には実施日時を教務に伝え、週予定に挿入してもらう。 <p>③ 参観について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体研3つ、担当の学年研は参観するようにする。他の学年研にも、可能であれば参加する。 <p>(2) 教科について 教科や単元はしぼらない。単元を通して、教科の見方・考え方を働かせて、どんな資質・能力を育成していくのかを明確にして授業づくりをしていく。</p> <p>(3) まとめ方について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度と同様には、研究通信は作成せず、研究のまとめも発行しない。代わりに第2回研究全体会で実践を交流する。 <p>(4) 指導案、研究のまとめ、授業写真の保存 ☆指導案は、教科および学年ごとにまとめて保存し、普段使いできるようにする。</p>																		
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">研究の計画</p>	<p>校内研究全体会・研修会（予定）</p> <table border="0"> <tr> <td>4月 28日（火）</td> <td>第1回全体会</td> <td>校内研究の計画と進め方（概要をもとに）</td> </tr> <tr> <td>6月 30日（火）</td> <td>第1回全体研</td> <td>授業研究会</td> </tr> <tr> <td>11月 30日（月）</td> <td>第2回全体研</td> <td>授業研究会</td> </tr> <tr> <td>12月 9日（水）</td> <td>第3回全体研</td> <td>授業研究会</td> </tr> <tr> <td>12月 21日（月）</td> <td>第2回全体会</td> <td>今年度の研究の成果と課題を確かめる。</td> </tr> <tr> <td>2月 15日（月）</td> <td>第3回全体会</td> <td>来年度研究についての提案（概要をもとに）</td> </tr> </table> <p>○月一回程度、研究推進委員が集まり、実践の共有・発信の話し合いを行う。</p>	4月 28日（火）	第1回全体会	校内研究の計画と進め方（概要をもとに）	6月 30日（火）	第1回全体研	授業研究会	11月 30日（月）	第2回全体研	授業研究会	12月 9日（水）	第3回全体研	授業研究会	12月 21日（月）	第2回全体会	今年度の研究の成果と課題を確かめる。	2月 15日（月）	第3回全体会	来年度研究についての提案（概要をもとに）
4月 28日（火）	第1回全体会	校内研究の計画と進め方（概要をもとに）																	
6月 30日（火）	第1回全体研	授業研究会																	
11月 30日（月）	第2回全体研	授業研究会																	
12月 9日（水）	第3回全体研	授業研究会																	
12月 21日（月）	第2回全体会	今年度の研究の成果と課題を確かめる。																	
2月 15日（月）	第3回全体会	来年度研究についての提案（概要をもとに）																	

- ・計画を立てる
- ・一覧表にする
- ・月曆に載せる

学 校 名	山形市立本沢小学校 山形市大字長谷堂 1111 の 1 TEL (023) 688-2420 FAX (023) 688-9044	校 長	渡 邊 弘 晶
		研究主任	小 池 郁 貴
研 究 主 題	子どもの主体性を伸ばす 自由度の高い授業の実践 ～若手と共に考える 評価から設計する授業～（2年次）		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>《社会的背景》 知識基盤社会への構造転換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「正解」よりも「最適解」を場面に応じて自力で、または多様な他者と協働して生み出すことが求められる。 ・国連が示した「SDGs」を達成するために、持続可能な社会の担い手を育成する教育への取り組みが必要となる。 ・コンテンツ・ベースの学習観からコンピテンシー・ベースの教育への転換 ・学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善が求められている。 ・令和3年中教審答申において、新しい時代の学校教育の姿として「全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が提言された。 →「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることが求められる。 <p>《これまでの研究》 「子どもの主体性を伸ばす 自由度の高い授業の実践 ～若手と共に考える評価から設計する授業～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○授業のゴールを明確に示すこと（教師側）と授業のねらいを意識しながら主体的に学習に取り組むこと（児童側）を徹底したことで、教師と子どもの間で目標が共有され、子どもたちがいろいろな方策で課題解決に向かうことができた。また、様々な道のりでゴールに向かうことを受け止める教師の待ちができるようになってきた。 ○中学年・高学年の担任間で教科を縦持ちしたことで、学習のつながり、系統性が見えるようになった。次の学年までにどのような力をつけていかなければならないか、前学年の学習内容のどの部分はその学びに活かされるのかが明確になり、授業づくりのヒントとなった。また、評価を行う目を増やすことで、子どもに様々な評価を与えることにつながった。 ○若手が行う提案授業を職員全員で見て、パネルディスカッション形式で話し合ったり、講師の先生から助言をいただいたりしたことで自分の授業をふり返る機会となり、教師一人一人の授業力向上を図ることができた。 ▲1時間ごとのめあてを確認するだけでなく、単元全体を通した課題を見出し、意識させることで、<u>どんな子どもに育ててほしいかという教師の願いと、自分がどのような姿になれば「学習のゴール」になるのかという子どもの意識を明確にしたい。</u> ▲単元の途中でめあてを確かめ、<u>自分の状態を把握し、必要に応じて学習の進度や取り組む内容を見直すような「学びを調整する力」も育てたい。</u> ▲単元の中で、<u>子どもの問いを大切に、主体的な学びの自覚化を進めていきたい。</u> <p>※全校児童にアンケートを実施（9月・2月）して変容を見たが、めあてを意識しているという児童の割合は向上した（子どもの自己評価として）。</p> <p>《子どもの実態》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達の考えや既習事項を活かすことで（真似をする）、より良く学ぶ姿勢が高まってきており、加えて真似したことを自分のもの（オリジナル）にしようという意識も育まれてきている。 ・児童会として本沢小の新しい歴史を創ることに挑戦したことで、新しいことに恐れず挑戦する気持ちが醸成され始めている。 ・集団の学びの質がより高まるために、個を鍛えていく必要がある。 ・集団では動けるが（学べる）、一人で取り組むことに抵抗をもつ子の姿が見られる。 		

《考察》

- ☞ 友達のよいところを参考に学習に取り組む姿が見られるのは、学校教育目標が子どもにも伝わり、学校の教育活動全体を通して意識づけが浸透した成果だと考えられる。
- ☞ 授業の目標を明示する（教師）ことと、目標を意識して学習を行うこと（子ども）が共有されることで、授業の自由度は上がる。しかし、一方で、できるだけ子どもが迷わずにゴールに向かうにはどうすればいいかを考える必要があるのではないかと感じる面がある。
- ☞ 教師と子どもが学習の目標を共有することに挑戦してきたが、目標に対してどれくらい到達できているかを子どもが適切にかつ厳しく自己評価する意識をもつまでには至らなかった。
- ☞ 教師の側が子どもの話す姿（＝表面的な姿）にだけ目が行き、授業のねらいにせまる内容になっているのを見取れておらず、即時的に評価を返せていないのではないかと感じる。
- ☞ 子どもの可能性を信じて「待つ」ことと、積極的に教える場面の使い分けを整理して取り入れていくことで、子どもたちの主体的に学ぼうとする気持ちが高まるのではないかと感じる。

令和7年度時点で本沢小学校教員が感じる子どもたちの課題や目指したい姿

- ★自分で学びをつくっていくような主体性がほしい。
- ★あきらめてしまい、粘り強く取り組むことが難しい。
- ★一部の子に任せきりで、自分で考えようとしていない子がいる。
- ★自分の思いを、他者にわかるように伝えることが苦手な子がいる。
- ★自分自身の学びの様子を適切に評価し、学びを調整したり、次の学びへとつないだりできるようになってほしい。

以上のように令和7年度の研究をふり返り、本校の子どもの実態を受けて、今年度の研究主題を「子どもの主体性を伸ばす 自由度の高い授業の実践

～若手と共に考える評価から設計する授業～」（2年次）

と設定した。

2年次は設定した評価に子どもが到達するための単元を学ぶ価値や、働かせる見方・考え方等について明示的な指導を吟味し、その働きかけの有効性を問うことで、子どもたちの自己評価・他者評価を行う力を伸ばし、自ら学ぼうとする姿勢が高まっていくと考える。また、授業の目的が明確であれば、子どもたちはよく考え伝えようとするだろう。

研究の目的

「評価から考える」ために

- ① その授業または単元を通してどのような資質・能力の育成を図るのか、子どものゴールの姿を指導要領で確認し、ねらいを明確にした授業を構成することを意識する。
- ② 学習内容の系統性、上下学年のどの学習とつながっているかを確認する。
- ③ 指導と評価を一体的にとらえることを意識した授業づくりを行っていく。
- ④ 自由進度学習で配付する「てびき」のように、子どもに単元の目標や働かせる見方・考え方を明示的に指導することで、教師と子どもの共有化を図る。

「(学びの) 自由度を高める」とは

- ① 単元の目標を共有すること
 - ・ 明確な目標を設定し、子どもと教師がその目標を共有する。
- ② 学習における選択場面があること
 - ・ 目標を達成するための選択肢が多様であり、子どもの発想を尊重しながら価値や目標にせまる働きかけを行うこと。一人で、または協働して学ぶ、学び方等。
- ③ 学習材、学習進度の工夫や単元の設定
 - ・ 目標を達成するための実態に応じて学習材を工夫したり、学習進度の幅をもたせたりする。
 - ・ 学習の個性化、指導の個別化を念頭においた学習を計画することで、自由度を高める。

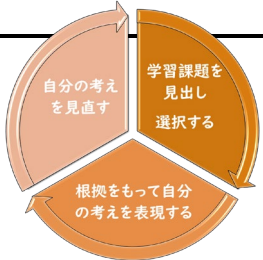
	<p>①ねらいと評価を一体化させることを意識した授業づくりを進めていく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価（授業のゴールの子どもの姿）から授業を構成し、ねらいにせまるための学習材や教師の働きかけについて検証を重ねる。 ・その単元がどのように位置づいているか学習の系統性を意識して授業づくりを行う。 <p>②教師の授業力の向上と授業改善を図る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校の子どもの課題を解決するために授業実践を行い、教師は授業の腕を磨く。その際、現行学習指導要領で求められている授業が具現化されているかを確認していく。 <p>③評価を行う場を意図的に仕組み、評価を重ねることで資質・能力を高めていく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師による評価、子ども自身で行う評価、子どもどうしで行う評価を行う場を設定する。 ・子どもにとってよりよい評価となるように、深い子ども理解を進める。
<p>研究の方法</p>	<p>① 日々の授業実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究テーマにもとづいた日々の授業を重ね、職員間で日常的に見合ったり、話し合ったりする。 ・学年部ごと担任間で授業を縦持ちにしたり、特別支援学級担任や担外教諭が授業を担当したりして、学びの系統性を確認する。同時に、様々な教師から評価を与える機会とする。 ・全校児童にアンケートを実施し、「評価」に対する子どもの意識を把握して、授業に活かす。 <p>②授業研究会→日々の授業の中に位置づけ、教科の授業実践を行う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・提案授業を全員で見つめ気づいたことを話し合ったり、外部講師からアドバイスをいただいたりすることで、一人一人の日々の授業実践を充実させる。 ・校外の先生方に向けて授業を公開し、事後研に参加していただく。幅広い視点から意見をもらい、研究がさらに充実するようにする。 <p>③学級経営案（カリキュラム・マネジメント表）の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活科・総合的な学習の時間を中心としたカリキュラム・マネジメント表を作成し、年間を通して意図的・計画的に資質・能力の育成を図っていく。 ・本校で育てたい資質・能力を整理し、子どもの成長を確認する際の手がかりとする。 <p>④評価の日常化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校生活全体の中で評価を行うことを意識し、授業に限らず、委員会活動や学級活動においても「目標を立てる→評価する」というサイクルを大切にする。 <p>※評価はできるだけポジティブに行うよう留意する。</p> <p>⑤視察・外部講師の招聘・研究会への参加</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他校の実践を視察したり、各種研究会に参加したりして、学んだことを校内で紹介し共有する。 ・外部講師を招聘し、校内研究の充実を図る。 ・市の委嘱公開研究会に参加し、各校の実践に学び、共有する。
<p>研究の計画</p>	<p><校内研究全体会></p> <p>5月 1日（金）…今年度の研究の提案とカリマネ作成</p> <p>2月26日（金）…今年度の反省と次年度について</p> <p><校内研修会></p> <p>5月18日（月）…「複式学級の学習について（案）」の研修（齊藤一弥先生による示範授業）</p> <p>校内研充実のために、他に2回程度の校内研修を予定</p> <p><授業研究会（山形市委嘱公開研究会）></p> <p>7月 1日（水）頃…6学年飛田教諭による授業提案</p> <p>12月 9日（水）頃…5学年小池教諭による授業提案</p> <p>1月20日（水）頃…4学年本間教諭・富松教諭による授業提案</p> <p><研究の日常化></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教務による授業提案 ・日常的なお互いの授業見学・教科の縦持ち・交流学級等の充実 ・日常的に子どもたちをどう見取るか話し合う（日々の職員室での会話や子どもを語る会等で） ・主体的で手軽な実践報告（打ち合わせ等で） <div data-bbox="1069 1680 1500 2038" style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin-top: 20px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・研究全体会や授業研究会では、それぞれ外部講師や指導主事を招聘する。 ・自由度を高める学習の手法として「特別支援教育」「複式学級の学習」「単元内自由進度学習」「パフォーマンス課題」等を参考に研修していく。 </div>

<様式>

学 校 名	山形市立西山形小学校 山形市大字柏倉 3774 番地 1 TEL 643-3011 FAX 645-8602	校 長	森山 謙一
		研究主任	稲村 良平
研 究 主 題	自ら学びに向かう子どもの育成（3年次） ～子どもに委ねる授業づくりと教師の役割を探る～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>本校は「たくましい心と体を持ち、進んで学び、郷土を愛する子ども」を教育目標に掲げ、短・中期的にめざす具体的な子どもの姿である「これからの社会の担い手として必要な学力や資質・能力を持ち、西山形地区に生まれ育ったことを『誇り』に感じている子ども」の育成に向けて教育活動に取り組んでいる。</p> <p>「自ら学びに向かう子どもの育成」を研究主題に掲げ、今年度で3年目となる。昨年度までは、子どもが主体的に学ぶ姿をめざして、カリキュラム・マネジメントを軸とした指導法の工夫を研究してきた。子どもの実態に合わせて、カリキュラムをマネジメントすることで、各教科をつなげた合科的な学習を実践することができ、子どもが見通しをもって学習に取り組む姿が見られるようになった。また、発達段階に応じて、子どもに委ねることを意識した学習を展開することで、自ら進んで考えたり学びを深めたり姿が見られるようになった。教科だけではなく、各行事とも関連づけて指導することで、授業や行事で語られる感想が、自分が感じたことや考えたことに変化し、即興的に自分の思いを伝える姿が見られるようになったことが大きな成果であった。</p> <p>一方、まだまだ教師頼りの学びで、「教師が思い描くものが正しい答え」であり、「試行錯誤する過程ではなく、出来たことや完成したことをよし」と思っている児童が多いことが課題として挙げられた。教師の顔を見て話す、困った時に教師に目線を送って助けを求めるといった姿が授業で見られるのが現状である。また、子どもたちが自ら学びに向かうために、相手意識や目的意識をもった、必要感があり子どもたちが自走するような課題を設定することで、学び合いの一助となる全員を巻き込むような問い返しの質を高めていくこと、各教科の見方・考え方を大切に、単元ベースで資質・能力を育むための単元構想や授業展開を工夫することが教師側の課題として挙げられた。</p> <p>今年度は、「自ら学びに向かう子ども」を育てていくために、副題を「子どもに委ねる授業づくりと教師の役割を探る」と設定した。昨年度の課題を踏まえ、子どもたちが自ら学びをつくっていくために、学びの自由度や選択の幅を広げていけるよう、単元構成を工夫したり、学習環境を整備したりしていく。学ぶ時間を十分に確保し、子どもたちが試行錯誤しながら課題に向かっていけるようにしたい。また、子どもの学びを支える教師の役割も見直すことで、子どもが変容した要因を適切に見取る力を高め、子どもの力が最大限に発揮される教師の支援の仕方について全職員で考えていく。</p> <p>西山形の貴重な地域素材を生かし、地域の方々・友達・教師との関わりを大切にしながら、進んで課題を見つけたり新たに挑戦したいことに取り組んだりする意欲をもつなど、自ら生き生きと学ぶ子どもを育てていきたいと考える。</p> <p>さらに、学習活動の軸となるカリキュラム・マネジメントを計画的且つ日常的に行い、子どもに委ねる授業づくりを日々実践していくとともに、様々なアプローチ（教科横断的学習、ICT活用、地域学習、自由進度学習など）で授業改善を図っていく。子ども自身が地域及び学校の一員としての自覚や西山形地区に対する思いを深めていくことができるようにしたい。</p>		

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">研究の重点</p>	<p>1. 子どもに委ねる授業づくり ○単元全体で資質・能力を身に付けられるような単元づくり。1 単位時間ではなく、単元を通してその教科の本質に迫る資質・能力を育成していく。 ・各教科の見方・考え方、系統を踏まえた教材研究 ・子どもの心が動く学習材 ・子どもが自走できる課題設定（自分で課題を作る、自己選択できる課題）</p> <p>○学びの環境づくり ・学び方を身に付ける（学びの約束、各教科の特性） ・自由進度学習、学習リーダー等</p> <p>2. 子どもの見取りと教師の役割を探る ○子どもたちがどのように学びを進めているのか、どんな変容があったのかを適切に捉え、子どもの実態や求めに合った教師の働きかけを吟味していく。 ・子どもが変容した要因を見取る。 ・子どもの力が最大限に発揮される教師の出と待ち ・子どもたちの学び合いの一助となったり、思考が動き出したりする問い返しの質を高める。</p>																																																												
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">研究の内容と方法</p>	<p>1. 日々の実践 授業研＝研究ではなく、日々の実践＝研究という意識をもつ。日々の実践の中で、単元全体で資質・能力を育成できるような単元構想を練る。</p> <p>2. カリキュラム・マネジメント 子どもの実態を的確に見取り各学年で付けたい資質・能力を明確にした上で、カリマネ表を作成する。総合的な学習の時間や生活科と各教科をつなげ、西山形の貴重な地域素材を生かしたカリキュラムを構築していく。</p> <p>3. 授業研究会の実施 一人一授業の提案（その内、大研2回）を行い、学び合う場を設定する。上学年、下学年に分かれて事前研を行い、授業を構想していく。授業後に事後研を行い、参観者による話し合いの場をもつ。各学年の「資質・能力」の向上に向けた手立ての具現化から、その有効性について、子どもが変容した姿やその要因を語り合うことで授業力の向上を目指す。</p> <p>4. 定期的に学び合う場（カリマネの日）の設定 月1回程度、カリマネの日を設定し、定期的に日々の授業について語り合ったりカリマネ表を見直したりすることで、授業改善につなげていく。</p>																																																												
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">研究の計画</p>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th colspan="2" style="text-align: center;">研究全体会・カリマネの日</th> <th colspan="2" style="text-align: center;">授業研</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="text-align: center;">4月22日</td> <td style="text-align: center;">研究全体会① 研究の概要</td> <td style="text-align: center;">6月</td> <td style="text-align: center;">6年</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">4・5月中</td> <td style="text-align: center;">カリマネ表の作成</td> <td style="text-align: center;">7月</td> <td style="text-align: center;">2年</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">5月1日</td> <td style="text-align: center;">カリマネの日①</td> <td style="text-align: center;">9月</td> <td style="text-align: center;">4年</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">6月5日</td> <td style="text-align: center;">カリマネの日②</td> <td style="text-align: center;">10月</td> <td style="text-align: center;">5年</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">7月17日</td> <td style="text-align: center;">カリマネの日③</td> <td style="text-align: center;">11月</td> <td style="text-align: center;">1年</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">8月28日</td> <td style="text-align: center;">カリマネの日④</td> <td style="text-align: center;">12月</td> <td style="text-align: center;">とかみ学級</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">9月11日</td> <td style="text-align: center;">カリマネの日⑤</td> <td style="text-align: center;">1月</td> <td style="text-align: center;">3年 きらり学級</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">10月16日</td> <td style="text-align: center;">カリマネの日⑥</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">11月13日</td> <td style="text-align: center;">カリマネの日⑦</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">12月18日</td> <td style="text-align: center;">カリマネの日⑧</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">1月8日</td> <td style="text-align: center;">カリマネの日⑨</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">2月5日</td> <td style="text-align: center;">カリマネの日⑩</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">2月15日</td> <td style="text-align: center;">研究全体会② 研究のまとめ</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">2月中</td> <td style="text-align: center;">研究収録作成</td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	研究全体会・カリマネの日		授業研		4月22日	研究全体会① 研究の概要	6月	6年	4・5月中	カリマネ表の作成	7月	2年	5月1日	カリマネの日①	9月	4年	6月5日	カリマネの日②	10月	5年	7月17日	カリマネの日③	11月	1年	8月28日	カリマネの日④	12月	とかみ学級	9月11日	カリマネの日⑤	1月	3年 きらり学級	10月16日	カリマネの日⑥			11月13日	カリマネの日⑦			12月18日	カリマネの日⑧			1月8日	カリマネの日⑨			2月5日	カリマネの日⑩			2月15日	研究全体会② 研究のまとめ			2月中	研究収録作成		
研究全体会・カリマネの日		授業研																																																											
4月22日	研究全体会① 研究の概要	6月	6年																																																										
4・5月中	カリマネ表の作成	7月	2年																																																										
5月1日	カリマネの日①	9月	4年																																																										
6月5日	カリマネの日②	10月	5年																																																										
7月17日	カリマネの日③	11月	1年																																																										
8月28日	カリマネの日④	12月	とかみ学級																																																										
9月11日	カリマネの日⑤	1月	3年 きらり学級																																																										
10月16日	カリマネの日⑥																																																												
11月13日	カリマネの日⑦																																																												
12月18日	カリマネの日⑧																																																												
1月8日	カリマネの日⑨																																																												
2月5日	カリマネの日⑩																																																												
2月15日	研究全体会② 研究のまとめ																																																												
2月中	研究収録作成																																																												

<様式>

学 校 名	山形市立村木沢小学校 山形市大字村木沢6046番地 TEL 023-643-2240 FAX 023-645-8606	校 長	片山 敬子
		研究主任	新田 亜紗恵
研 究 主 題	<p style="text-align: center;"> 学びを深めるために（3年次） ～自律して学び進める子供を目指して～ </p>		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>令和6年度より、『学びを深めるために～自律的に学び進める子供を目指して～』を研究主題として「自律」を大きなキーワードに掲げ、子供たち一人一人が意志や考えをもち、自律して学び進めることを目指して研究に取り組んできた。また、研究を進めるにあたって、自律＝自己理解力、自己選択力、自己表現力と捉え、自律した姿を教員や子供たちと共有しながらの授業づくりを目指している。</p> <p>令和7年度の研究を通して、「自律学習により児童の自己選択力が向上した」「自己表現をする雰囲気ができ、学習意欲が向上した」「児童が授業を進める“村小スタンダード”が整備されてきた」などの成果が見られた。複式学級も単式学級も、子供が先生役として進める自律学習に取り組んできたからこそであると考えられる。</p> <p>一方で、年間計画・時間の使い方のマネジメント力、児童の見取りが十分ではないこと、単式学級担任も複式学級を指導できるような研究のあり方など、課題も明確になった。さらに、全学年が算数科を中心に研究に取り組んだこともあり、教科・担任問わず自律学習について深めていく必要性も見えてきた。</p> <p>今年度も、子供たちが自分自身を見つめ直し（自己理解力）、必要な学習課題を見出し（自己選択力）、根拠をもって考えを表現すること（自己表現力）ができるような授業づくりを通して、子供たちの自律的な学びを支えていく。</p>		
研 究 の 重 点 と 目 指 す 姿	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 60%;"> <p>（1）研究の重点</p> <p>◇子供が主体的・協働的に取り組む中で 学びを深めていく授業の工夫</p> <p>（2）研究でめざす姿</p> <p>①めざす子供の姿</p> <p>◇自ら学び、友達と学び、<u>学びを他教科や日常生活等とつなげたり、次の学習課題を見出したりすることができる子供</u></p> <p>◇友達の意見や考えを聴き、<u>根拠をもって自分の考えを表現したり、言葉でつないだりすることができる子供</u></p> <p>◇多様な考えや様々な情報をもとに、<u>自分の考えを見直したり再確認したりすることができる子供</u> （下線・・・村木沢小「育成すべき資質・能力」と関連）</p> <p>②めざす教師の姿</p> <p>◇教科を問わず子供たちの自律した学びを支えることができる教師</p> <p>◇子供たちの学びをつなぐためのコーディネーターができる教師</p> </div> <div style="width: 35%; text-align: center;">  </div> </div>		

研究の視点と内容	<p>(1) 研究の視点</p> <p>◇学びを深めるための手段や手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ・既習とのつながり ・学習ツール（図・式・タブレット等）の活用 ・教師の発問 ・ワークシートの工夫など <p>◇自律した学びを行うための手段や手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の「待ち」と「出」を意識した授業計画 ・ICTの活用 ・個の学習の充実と協働的な学習の充実 ・単元構成の工夫など <p>(2) 主な研究内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どの教科においても同様に研究主題に迫れるように、学びを深めたい教科、道徳及び外国語活動、合同学習等も積極的に研究し実践する。 ・【村小スタンダード】を共通のものとし、研究の日常化を図っていく。その上で、いろいろな視点から研究・授業等を行い、各自で研究主題へ迫っていく。 	
	<p>【村小スタンダード】</p> <p>①「課題」「まとめ」を明確にし、1時間の授業が見える板書をする。</p> <p>②学びを自覚できる、次時の学習につながるような「振り返り」の視点の工夫をする。</p> <p>③授業の流れを提示し、子供たちが学び進める際の手掛かりにできるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせた学びを大事にする。指導案に具体的な「見方・考え方」を働かせている子供の姿を記述し、「深い学び」に迫る。 ・子供たちの「学びが深まっている姿」「自律して学ぶ姿」とはどんな姿なのか教師間で共有し、研究でめざす子供の姿に迫る。子供たちの自律した学び、さらには深い学びを目指していく。 	
研究の方法	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の日常化を図る。 →研修や日々の授業の中で「学びが深まった姿」「学びを深めるために効果的だった手段・手立て」「自律して学ぶ姿」などを話題にし、OJTや教材研究の時間などを活用して教師間で共有する。また、共有フォルダを活用して資料やデータを集積していく。 ・授業研究を一人一回行う。授業者は「研究のまとめ」を発行する。 ・年度末には研究成果、反省を受けて、次年度の研究につなげていく。 	
研究の計画	4月～5月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究全体会（校内研究内容の検討） ・校内研修会（・学年カリキュラム検討）
	7月	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修会（学年カリキュラム検討） ・授業研究会（・全国学調・学力テスト分析）
	6月～12月	<ul style="list-style-type: none"> ・授業研究会
	12月	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修会（学年カリキュラム検討） （本校の児童のよさを生かし、課題を克服するために）
	1月～3月	<ul style="list-style-type: none"> ・授業研究会 ・研究のまとめ作成・発行
	2月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究推進委員会 ・研究全体会（研究の振り返りと次年度の研究に向けての協議）

<様式>

学 校 名	山形市立大曾根小学校 山形市上反田278番地 Tel (023) 643-2134 Fax (023) 645-8614	校 長	晋道 康史
		研究主任	佐藤 卓生
研 究 主 題	他に働きかけながら、自分らしく学び続ける子どもの育成～2年次～ ～自分と向き合う力、自分を高める力、他とつながる力を育てる教育活動の展開～		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>本校では、資質・能力ベースの学力観を前面に打ち出した学習指導要領や関係法規、変化が急激で不確実性が高く将来を予想することが困難なVUCA 時代に突入したと言われる社会背景、地域の伝統や特性、子どもたちの実態を踏まえて、</p> <p>「大曾根に誇りをもち、未来を拓く子どもの育成」を学校教育目標に掲げている。そしてその具現化に迫るための資質能力を、</p> <ul style="list-style-type: none">○ 身に付けた知識や技能を学習や生活に生かすことができる。○ 根拠や理由を明確にして、自分の考えを表現することができる。○ 自ら学習を調整しながら、粘り強く取り組もうとする。 <p>と設定し、教育活動に取り組んできた。</p> <p>しかし、その中で</p> <ul style="list-style-type: none">○ あらかじめ用意されたことにしか対応することが出来ない。○ 困難なことがあると黙ってやり過ごせる、誰かがやってくれると思っている。○ さらに高まろうとする意識がない。○ まわりの「こと」「もの」「人」に対する関心が薄い。 <p>といった課題も明らかになってきた。</p> <p>学習指導要領が示している資質・能力の柱の一つである、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）」は、非認知能力に大きくかかわるものである。また、VUCA 時代をたくましく生きていく子どもを育てるためには、目の前の問題に対して、他と協働しながら自律的に対応するための非認知能力の育成が重要であるといわれる。こうした主張は、本校の学校教育目標やそこに近づくために育成を目指す資質・能力の設定、本校の子どもが抱える具体的な課題と符合するものであると考える。そこで、本校でも、テーマを上記のように設定して非認知能力を基盤に据えた研究を推進する。</p>		

<p>研究の目標</p>	<p>以下のような力の育成を通して、研究テーマの達成、ひいては学校教育目標の具現化を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自分と向き合う力・・・現在の自分を維持・調整する能力 自己制御、感情調整、レジリエンスなど ○ 自分を高める力・・・現在の自分を変革・向上するための力 意欲、自尊感情、グリットなど ○ 他とつながる力・・・他とかかわり、協働する力 共感性、協調性、コミュニケーションなど
<p>研究の内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校研究を「45分の授業づくりの方法」等を検証するものとしてではなく、学校の教育目標を具現化する方策としてとらえ、令和8年度の教育活動全般を対象とする。 ○ 目指す子どもの姿・支援や指導の在り方を全職員で共通理解する。 <p>(1) 子どもを見る</p> <p>子どもの実態をどうとらえるかが、そのあとの展開や支援の仕方を描く際のよりどころになる。つまり、学習材や実践方法は、子どもが対象にどのような目を向け、どのような思いをもっているのかをとらえることなしに語ることはできないということである。</p> <p>そこで、常に子どもの姿を根拠にしなが、子どもの学びをより深くとらえることを非認知能力を育てるための教育活動の基盤にする。</p> <p>(2) 学習材を見る</p> <p>くらしの中で、「三角の形をしているものはなんとなく同じ」ととらえていた子どもが、算数科の学習を経て、くらしの中で身の回りにある様々なものを算数的な見方ととらえなおしたり算数的な見方で分類・整理していくことができたり、そのような自分の姿を自覚的にとらえたりすることができたとする。この場合、算数的な認知能力だけではなく、算数を題材として非認知能力を成長させた姿であるのとらえることができる。</p> <p>このように考えると、単元を構想したり活動計画を立てたりする際に、子どもが会う学習材が、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもがどのような目を向けるものなのか。 ・どのように資質・能力の向上を図っていくことが可能なものであるか。 ・どのような非認知能力を育てる可能性があるものなのか。 <p>などを十分に検討していくこと大切にする。</p> <p>また、子どもが学習材やまわりの人たちにどのように働きかけ、どのように学んでいくことで、どのように資質・能力や非認知能力を向上させていくのか、また、その時に教師はどのような指導・支援をしていくのかということ具体的に描いていくこと、あるいは瞬時に判断することが重要であると考え</p> <p>(3) 教師が自分自身を見る</p> <p>教師自身が、どのような意識で教育活動に当たっているのかということは、形には表れないものの子どもの育ちに極めて大きな影響を及ぼすものであると考える。そこで、教師自身が、どのような意識に基づいて教育実践にあたっているか、それに基づいた実践の中で子どもや学習材が見えているか、さらには、その上での指導・支援は最善であったかを常にモニターしながら教育活動を展開する。</p>

研究の方法	<p><子どもを見る>・・・研究授業、子どもの記録、教育相談・特別支援教育、スピーチ</p> <p><学習材を見る>・・・研究授業、特別活動、教育課程</p> <p><教師が自分自身を見る>・・・研究授業、職員会議・職員研修、研究のまとめ</p>
研究の計画	<p>1学期・・・おまかせ校務のいいところみつけを活用した子どもの記録の蓄積 スピーチの時間の参観・討議</p> <p>2学期・・・研究授業</p> <p>3学期・・・教育課程 研究のまとめ</p>

<様式>

学 校 名	山形大学附属小学校 山形市松波二丁目7-2 TEL 023-641-4444 FAX 023-641-8594	校 長	早坂 和重
		研究主任	成澤 結香里
研 究 主 題	ちがいをたのしむ(1年次)		
研 究 主 題 設 定 の 理 由 ・ 内 容	<p>1 わたしたちが大切にしていること</p> <p>(1)子どもは、人・もの・こととの関係の中で育つ存在であると捉えること</p> <p>わたしたちは、子どもを「よりよい自分になりたい。」という思いや願いをもつ存在として捉えている。子どもは、事象と関わる中で思いや願いをふくらませたり問いを見いだしたりし、試行錯誤しながらとらえを更新していく。その歩みを、わたしたちは「子どもの問題解決」と呼び、大切にしてきた。わたしたちが変わらず目指してきたのは、子どもが事象と関わる中でもった思いや願いを出発点に、見方・考え方を働かせ、事象と関わることに夢中になる姿である。</p> <p>(2)教師が目の前の子どもの姿を真摯に洞察して働きかけること</p> <p>わたしたちは、育みたい資質・能力を明確にし、それと目の前の子どもの姿とを往還させながら、教師の働きかけを吟味してきた。授業中の子どもの言葉や行動、表情を丁寧に洞察し、働きかけを問い直し続けることで、子ども自身が事象と関わる中で見方・考え方を働かせられるようにする。そして、その過程や結果、子どもにどのような「とらえの更新」の可能性があるかを具体的に思い描きながら授業を実践する。この姿勢こそが、わたしたちが変わらず大切にしてきた研究の基盤である。</p> <p>2 これからの研究で大切にしたいこと</p> <p>これまで、研究主題「自ら問題解決を進める子ども」を掲げ、4年間研究を進めてきた。その中で明らかになったことは、「子どもの問題解決」を支えるためには、子どもの洞察、学習材の吟味が重要であることである。わたしたちは、これまで大切にしてきたことを継承していくという思いを確かにすると同時に、その上で、子どもが問題解決を進めていく意欲をさらに高められるようにしたいと考えた。子どもが「もっと問題解決を進めていきたい。」と思いや願いをもち、夢中になって活動するためには、問題解決を「たのしい」と感じる事が重要だと考える。子どもが夢中になっているときには、事象との関わりをたのしんだり、見いだされたことやその過程をたのしんだりしているのだろう。事象と出会ったり、事象について話し合ったりして心動かされることは、子どもの心に火をつける。子どもが心動かされ、「たのしい」と感じることを大切にしていきたい。</p> <p>子どもが事象と関わり、それらに対する思いや願いをもつときには、自分とは異なる考えや、予想と異なる結果との出会いが存在していると考え。問題解決を進める原動力の背後には、自分の中や自分と人・もの・こと（自己と他者、自己と新たな自己、自己と事象など）との間に生じる何らかの「ちがい」があるのではないだろうか。友達の考えとのずれ、未知の対象との違和感、理想と現実との食い違い。そうした「ちがい」は、ときに戸惑いや抵抗などのゆらぎを生じさせる。それこそが思考を動かし、捉えを更新させる出発点となるのではないのだろうか。この「ちがい」を単に乗り越えるものとしてだけでなく、学びを深める契機として積極的に位置付けたいと考えた。学校は、多様な背景や価値観をもつ人々が出会う場である。子どもが出会う「ちがい」こそが、学校という場で過ごす大きな意味である。わたしたちは、子どもが「ちがい」に出会い、その「ちがい」にゆらぎ、対話を通してよりよいものを生み出そうとする経験を積み重ねることができるようになりたい。その経験は、これからの時代を生きるのに必要な資質を育むことにもつながると考える。</p> <p>これからの激動の変革社会は、それまで定義されていた「普通」のものとはちがうものになっていくことだろう。これまでの当たり前が当たり前ではなくなる世の中で、目の前の子どもとこれから子どもたちが生きる社会の様相を見つめてみても、子どもたちが学校で出会う「ちがい」を「たのしむ」ことができるようになっていくことで、「ちがい」を価値あるものだと感じられるようになる。すると、その「ちがい」をもつ周りの人・もの・ことに価値を見いだすことができるようになるだろう。</p>		

	<p>これまで大切にしてきた自分と違う人・もの・ことと前向きに関わり、自分らしさを追究することは、多様性の中において、よりよく生きることと言える。</p> <p>以上のように、2026年度は「ちがい」を学びの出発点として位置付け、「ちがい」に前向きに関わり続けながらとらえを更新し続ける姿勢を育むことを大切にしていく。それは、これまで大切にしてきた子どもの洞察と問題解決の歩みを土台としながら、学びをより深く、より広く捉え直す挑戦である。</p> <p>そこで、これまで大切にしてきたことを土台としながら、子どもが社会でより幸せに生きていくことができるよう、研究主題「ちがいをたのしむ」を掲げることとした。</p>
<p>研 究 の 計 画</p>	<p>1 定期的な研修</p> <p>(1) 全体研 (年 10 回)</p> <p>(2) 校内授業研究会 (年 3 回)</p> <p>(3) 公開型研究会</p> <p>①学習指導研究協議会 (6 月)</p> <p>②秋の研究協議会 (11 月)</p> <p>2 日常的な研修</p> <p>(1) 学年部会</p> <p>(2) 教科・領域部会、ブロック部会</p> <p>(3) 分掌部会</p>